

471

香我美迴屋編

津野山遺聞錄

高知蒲原文英堂發行



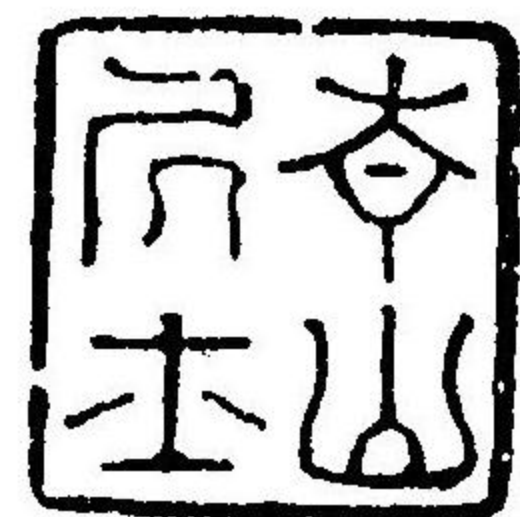
實事求是



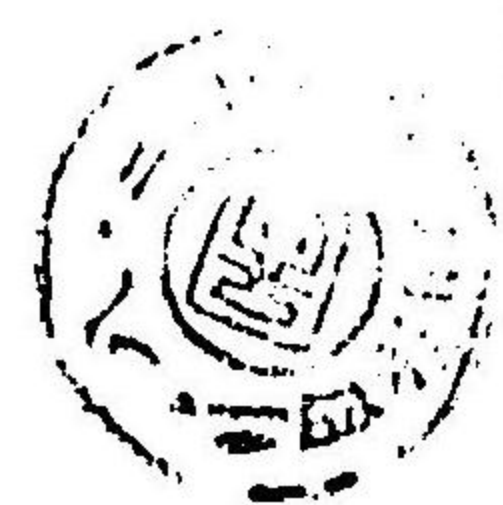
求是

己酉春日

青山題



實地美乃 齊湖本





# 津野山



22-496

## 序

津野山は高知縣北境の邊地なり而も其地名の特に縣内に著はるゝものは戰國の世に豪族津野氏の歴代武威を振ひしと維新の前に吉村那須前田上岡中平掛橋等の勤王烈士を出せしことを以てに非ざらん哉夫れ名所舊跡の富山光風色の美未た必すしも其土地の誇とするに足らず時代の要求する人材を出し以て邦家に貢獻するは眞に其土地の譽にして津野山人士の榮譽とする所蓋し亦此に存せん高知縣人宮地美彦君頃日津野山遺聞録なる一書を編述し知人竹村敬凡君を介して余に序言を求む之を閱するに此地の舊記古蹟風土人情等歴々掌を指すか如し誠に好著と謂ふへし夫れ過去の美蹟は現在の鑑にして現在の善事は將來の範たり津野山人士は宜しく此書を読み深く郷土の美點を感知し古に遡りて今に及び俯仰感慨益々愛郷の心を奮起し學を興し産を殖し人材を輩出して邦家に貢獻し以て前代の榮譽を全うし後世の龜鑑を示し大に津野山の美名を發揚すべきなり思ふに本書編述の趣旨亦此に在らん歎余職を高知縣に奉じ常に意を風教の振興に



注りり今本書の上梓を見て其世道人心を裨益せんことを喜び爲に一言を識すこと云ふ

明治四十二年八月八日

高知縣事務官 植木 半次郎

### 序

我州津野山の郷は戰國の世津野氏城據の地なり維新の舉に際し吉村寅太郎等勤王の有志此の里に輩起せり其地形の勝將た津野氏累代の化育に負ふ所のもの有りて然る乎

夫れ吉村等の藩を脱し義を大和國に擧ぐるや十津川の險要に據れり余は以爲らく津野山郷は是れ土佐の十津川郷ならずやと何を以て謂ふか曰く十津川郷の民たる南朝忠臣の子孫にして津野山郷の士民は津野氏傳統の末葉なればなり即ち名門貴族の子孫形勝の地を占め連綿今日に到りたる者彼此相似たるに非ずや然らば則ち吉村等義徒が十津川郷士と肝膽相容るゝ盟結して以て錦旗を其險要に奉したるもの豈に偶然ならんや然るに今や津野山の郷は縣治を距ること遠く交通亦不便にして其古傳遺聞湮滅に歸せんこと是れ頗る惜むべきなり頃者前橋原小學校訓導宮地美彦氏深く之を憂い舊記を探り古老の言を徵し津野氏の家系傳統及び吉村等勤王烈士の越歴を叙し津野山遺聞録と題し之を公刊せんこと蓋し郷土地利研究の資料に貢獻多きのみならず吉村等古勤王有志の風を聞く者をし



正奮然として起つあらしめん果して然らば亦風教に補あるや大なるべし是れ余  
が其巻首に一言を辞せざる所以なり

明治四十二年一月二十日

高知公園

高知縣教育會事務所に於て

安藝喜代香

代序詞

後れゆく人をてらさむ鏡とも  
なれる此ふみ讀て知るへし

高岡郡西の果なる檉山の麓

に住める岩崎忠雄



今日志事出於白石  
口歆討五以候考法類  
為應昇任竹村以  
志首以仕志之

光緒元年

辛未正月朔日

定後

市村勉之書



## 自序

津野山の地は我土佐の一角に僻在し、山高く谷深く實に山紫水明の郷なり。由來偉人烈士を輩出す、即ち前には津野經高あり、經高の子孫亦代々名將勇士たり。近くは吉村寅太郎、那須俊平、同信吾、前田繁馬、中平龍之助、上岡膽治、掛橋和泉等の勤王烈士あり。蓋し此の地は土佐に於ける武の一靈地なればなり。余先年職を此地に奉ずるや大に感ずる所あり。則廣く同地に關する諸記録を調べ、且つ各部につきて實地の踏査をなし、以て其の地理史談等を精細に網羅したる一書を編纂し聊か教育上の資料に供せんことを期せり。依て余は檮原、太郎川、北川、新田、四万川、越知面、飯母等に往きて人情風俗より苟も地史に關係あるものは悉く之を調査せり。猶殘る各部にも同様の研究をなさんご期せり。然るに客年三月、余は故ありて突然郷里に歸るの止むを得ざるに至れり。嗚呼余は此の山紫水明の幽境に對して、神聖なる武の靈郷に對して惜別の情堪へ難きものありき。しかるに歸來已后公務多忙にして本誌編纂のことも自然中止の姿となりしも常に以爲らく、津野山の如きは實に他に求むべからざるの靈地なり、然かも未だ文献の徵すべきもの無し。豈に道に教育に従ふもの徒に之を廢没に委すべけんや。「隗より始めよ」の故事に倣ひ敢て分を顧みず、今日迄に蒐集したる材料なりとも輯録して江湖に紹介せば聊か同好の士の參考にもなりねべし。是唯余が同地に盡さんご



する精神の万一のみ。かくて一箇年の後にはご思ひしことも仇なれや、更に月日は過ぎて早くも二年目になりぬ。有志の諸氏は余の所志を賛し、其の出版を促すこと頃日に至つて益切なり。此に於て余も亦今更飛び立つやうに急ぎて稿を脱したるが、この津野山遺聞録なり。前に述べしが如く研究未だ央ならずして歸郷したるを以て、材料多くは西津野村の方に偏し。且つ聞くがまゝに、見るがまゝに成るべく舊記の意を損はざるやうに、又後人の参考に便ならんことをのみ考へて、職務の餘暇に於て急卒に成案もなく、組織も立たず、取り止めもなく書き記したり。されば食ひ足らぬ点多かるべし。さるを臆面もなく世に公にせんは如何がご、思案もせしが今は豫て有志の切なる依頼もあれば既に詮なし。茲に印刷に附して出版せんす。幸に同好の士の一顧を得て、併せて近き將來に於て精確なる津野山誌を完成し。以て益々同地の精華を發揚せんことを希望すこ爾云。

明治四十一年五月上浣

臥龍山の麓に於て 編者 識す

本誌印刷ニ際シテ左ノ有志諸君ハ賛助員トシテ直接間接ニ助力セラレシコト多大ナリ、今日漸ク本誌ヲ有志ノ士ニ贈呈スルニ至レルハ實ニ諸君ノ賜ナリ、謹デ茲ニ其厚意ヲ謝ス

崎村青恵	西村一水	掛橋富松	掛橋清現	矢野義雄
森山宗晴	谷口芳三郎	廣瀬一穂	森田荒次郎	前田龜吉
西村義治	前田春市	武田天良	市川傳太郎	佐竹熊次
長谷部平馬	兼頭佐彌吉	熊田龜吉	中越義洗	中越保興
竹村敬凡	明神藤三郎	西村伊之助	西村千代次	西村榮
西村榮三郎	中岡數惠	中岡貞次郎	中岡善六	中山良次
南部達次	吉本誠太郎	中越小光	茨木包政	明神清助
弘田重光	田村耕馬	沖田要吉	三橋定馨	沖田勝次
中越夏三郎	二神吉亮	川上乙藏	岡田盛喜	中越吉滿
岡田潤吉	森田長	兼頭圓次郎	橋詰森藏	中越良雄
沖田光次郎	永野青年會	川上宗吉	竹倉万吾	中越政留
吉門有政	中越弘術	中越義教	西津野村西川尋常小學校	全初瀬尋常小學校
全上成尋常小學校	全折渡尋常小學校	全松原尋常小學校	全橋原尋常高等小學校	

(以上豫約出資ノ有志者)

特ニ崎村青恵、竹村敬凡、中平利連、明神重固、茨木包政、大平關州、中越弘術、前田龜吉ノ諸氏ハ或ハ多額ノ出資ニ或ハ編輯材料ニ或ハ賛助者募集ニ終始盡力セラレタルコトヲ深ク感謝スル次第ナリ





Vertical columns of Japanese text, likely a transcription or commentary on the photograph. The text is arranged in approximately 12 columns, reading from right to left. The characters are small and densely packed, typical of a printed document. The text appears to be a detailed description or historical context related to the woman in the photograph.



うつせみの世は常なきものの極みかな。吾は圖らずも今年の九月といふに妻を失ひぬ。妻の名は於菟女、病は心臓麻痺  
齡をうくること二十八、ゆきし其宵までも甲斐々々しく立ち働きて、笑ひさめめきなどせるものを、かゝる病にて忽然  
この世を去るべしとは夢にも思はざりき。げにはかなきは人の世かな。あはれ愛ぐし於菟女子よ、其のさがさどく且つ  
温和ひにして、父母の心に背かず、よく夫に順ひて、常に己が務を怠らず、殊に手藝の道によく勤めけり。逝きし月は  
あたかも産月に當りければ吾れ人ともに悦ばしき其の日の片時も早く來よかしと待ち樂みしものを、いかなればかくは  
なりけるよ、のこりし吾はいかにして此世を送らん。げに思へばある時はありのすさびに過してし、なくてごまことの  
哀さは知りぬる。

昨日ごのみ思ひし日の夢うつと過ぎ去りて早くも今日は百日の忌日となりけり、今こそは翠平山の老い松も、改田  
濱の清き流も、物皆亡き人のありし朝な夕な思出となりて、見聞くにつけて物憂きことの限りなれ。中にも去年の菊  
月の頃、千草の花みち／＼たる庭にをり立ちて與に撮りつる此の寫繪は、折節其頃より思立ちて、漸く此の程成りぬる  
此書と共に圖らずも亡き人の紀念の種とはなりぬ。さればいとをこがましき業ながら、せめてもの思ひやりにと、かれ  
が面影をこゝにかかげて諸人の前に捧ぐるこゝはしぬ。知ると知らぬとの別なく、あはれと見給ふ人もあらば吾が望  
はたりなん。吾が望はたりなん。

明治四十有一年十二月十九日

編者しるす

## 津野山遺聞録

### 目次

- 第一 西津野村 一頁  
位置及境界、地勢、山川、氣候及産業、部落、橋原町、交通、沿革、教育
- 第二 津野氏 六頁  
津野經高、津野元高、津野滿之、津野通重、津野通高、津野光高、津野元實、津野國泰、津野定勝、津野勝興、津  
野親忠
- 第三 中平氏 十二頁  
中平常定、中平元忠、中平駿河守光房、中平左京亮光義、 附文祿の役の分取品(中平氏所藏)の圖
- 第四 勤王烈士 十七頁  
那須信吾(田中光顯伯撰)、  
吉村實太郎、吉村實太郎遺詠、吉村實太郎考案の石遺金庫の銘及圖、前田繁馬、中平龍之助、掛橋和泉、中平定晴、  
那須俊平、西村治家、竹村猪之助、中平定純  
那須翁招魂碑文、田中伯爵撰、  
那須信吾招魂碑文、田中伯爵撰、  
上岡磨治と吉村實太郎の事、上岡氏未亡人直話、
- 第五 社寺及古趾 四十頁  
岩村の津野神社、靈通山孝山寺、須崎の津野神社、  
橋原吉祥寺の法會、飯母、中越孫次翁直話  
附腰旗の圖、イレハウタ、ヒキハウタ、津野祭に用ふる三番叟と濺、橋原三島神社、同社々例、謂書等、壁路山城  
攻の事(以下七項茨木氏の益古語傳集による)島がうね古城、四萬川中野川局屋敷、深入の地名、釜の久保遠見ヶ



岩、唐ひう遠見ヶ岩、壁路山四万川天満宮由來、四万川三島宮由來、天満宮の棟札、  
 方言一二、四万川の地質、氣候、ナラシメジ等、茶室、橋原の寺堂、中越豊前守吉高の碑、中越神内略傳、實業家  
 川上宗吉、横貝部落の祖川上主殿頭、太田家老、川上家の寶物、山下木工並竹村氏、竹村彌三兵衛信忠、竹村助左  
 衛門尉信正、竹村家の事、關所、橋原、津野家の記録、那須家、天徳山吉祥寺、津野山六ヶ寺、泉のカラ松、橋原  
 の七不思議、善之進シケ、鷲ヶ森城趾、郷社三島神社、越知面の地形地質、越知面の特産物、越知面特有の風習、  
 津野定勝墓碑、田植歌、長橋藤人尉廷秀の墓、皿ヶ森、中越越前守居城趾、長橋藏人尉居城趾、海津見神社（龍王  
 の社）、島がうぬ城趾、河野士の千人塚、前田道慶の墓、餅ツキ山城趾、善之進の首塚、駿河屋敷、唐箕ヶ城趾、吉  
 本元仙、勤王家贈位紀念碑、中平氏先塋、那須氏先塋、越知面の吉門氏、勝地、中越吉長墓、親忠遺墨、大藏谷明  
 家、吉祥寺に於ける明神家の坐席、及燒香願の事、掛左敷の事、四万川に於ける神社、海津見神社寶物、吉門有理  
 の戦死、五石詩集の内五十首

目次終

津野山遺聞録

西津野村 位置及ビ境界

西津野村ハ高岡郡ノ西北部ニ位シ東ハ別府、東津野、松葉川等ニ南ハ幡多郡東上山村ニ接シ西ト北ハ四國山脈ノ本幹ヲ  
 以テ愛媛縣東宇和、北宇和、上浮穴ノ三郡ニ境ス東西四里、南北六里面積大凡十八方里戸數、一千六百六十七、人口七  
 千二百三十九ヲ有スル大村ニシテ室町時代ヨリ徳川幕府創業ノ頃マデハ津野氏ノ領土タリシヲ以テ東津野村ト共ニ津野  
 山郷ノ名アリ  
 上記人口戸數ハ明治卅七年末ノ調査ニヨレリ明治四十一年一月現在人口ハ七千三百九十一人ナリシト云ヘバ今日ハ尙  
 多少ノ増加アルベシ

地勢

本村ハ四國山脈中ノ高地ニシテ渡川ノ上流溪谷ニ當リ海拔大凡一千尺、西北ヨリ東南ニ向ヒテ多少ノ傾斜ヲナス、四國  
 山脈中ノ高峯ヲ蘇野山トイフ其南ニ雨包山アリ普通ニ之ノ兩山ヲ總稱シテ雨包山トナスモノノ如シ、蘇野山ノ頂ハ南北  
 二峯ニ分レ其間ニ高原ヲナシ、東ニ延ゾルコト數里ニ及ブ彼ノ天正ノ頃ヨリ土豫境界ノ爭論地トシテ又新設陸軍演習地  
 トシテ有名ナル大野ヶ原乃チ是ナリ、  
 大野ヶ原ニハ盆形ノ窪地アリ奇巖怪石多ク、殊ニまいぬけト稱スルモノハ有名ナリ、蓋シ此地ノ地盤ハ一体ニ石灰岩ヨ  
 リ成レルヲ以テ地下水並ニ雨水ノ浸蝕作用ヲ受ケ斯ノ如キ状態ニ至レルモノナルベシ、  
 烏帽子山脈ハ四國山脈ヨリ分岐シ、東津野村ノ界ニ沿ヒテ西南ニ走リ西津野村ニ入ル、便チ越知面本村ヨリ南ニ折レ橋  
 原本村ニ於テ烏帽子山ヲ起シ、山勢東ニ延ヒ、再ビ南折シテ北川ノ西岸ニ沿ヒ遂ニ四万川、北川二川會合点ニ盡ク、烏  
 帽子西南ニ分岐シ橋原、初瀬兩部落ノ分水界ヲナスモノヲ河野士山脈トイフ、  
 昔豫州河野氏ノ我津野氏領内ニ浸入セシ時津野氏逆ハ撃テ之ヲ走ラス、河野軍、廣野白井谷ニ追窮セラレテ遂ニ將卒悉  
 ク此所ニ戦死ス、河野士山ノ千人塚ハ其ノ死屍ヲ葬リシ所ナリト云フ、  
 中央山脈モ亦四國山脈ヨリ分派シ北ヨリ南ニ走リテ西津野村ノ中央ヲ貫キ、橋原、川西地ニ至リ、烏帽子山ニ對ヒテ樫  
 棚山ヲ起シ、更ニ南ニ走リ四万川、越知面二川ノ合流点ニ終ル、其東麓ヲ流ルルモノハ越知面川ニシテ越知面ニ發源ス  
 西麓ヲ流ルルモノヲ四万川トイフ、四万川ニ發源ス、共ニ南流シテ橋原川口ニ至リ相合シテ水勢漸ク大トナリ、更ニ南、



岩、唐ひう遠見ヶ岩、壁路山四万川天満宮由來、四万川三島宮由來、天満宮の棟札、  
 方言一、四万川の地質、氣候、ナラシメジ等、茶室、橋原の寺堂、中越前守吉高の碑、中越神内略傳、實業家  
 川上宗吉、横貝部落の祖川上主殿頭、太田家老、川上家の寶物、山下木工並竹村氏、竹村彌三兵衛信忠、竹村助左  
 衛門尉信正、竹村家の事、關所、橋原、津野家の記録、那須家、天徳山吉祥寺、津野山六ヶ寺、泉のカラ松、橋原  
 の七不思議、善之進シケ、鷲ヶ森城址、郷社三島神社、越知面の地形地質、越知面の特産物、越知面特有の風習、  
 津野定勝墓碑、田植歌、長橋藤人尉廷秀の墓、皿ヶ森、中越前守居城址、長橋藤人尉居城址、海津見神社(龍王  
 の社)、島がうの城址、河野士の千人塚、前田道慶の墓、餅ツキ山城址、善之進の首塚、駿河屋敷、唐筑ヶ城址、吉  
 本元仙、勤王家贈位紀念碑、中平氏先塋、那須氏先塋、越知面の吉門氏、勝地、中越吉長墓、親忠遺墨、大蔵谷明  
 家、吉祥寺に於ける明神家の坐席、及燒香願の事、掛左敷の事、四万川に於ける神社、海津見神社寶物、吉門有理  
 の戦死、五石詩集の内五十首

目次終

津野山遺聞録

西津野村

位置及ビ境界

西津野村ハ高岡郡ノ西北部ニ位シ東ハ別府、東津野、松葉川等ニ南ハ幡多郡東上山村ニ接シ西ト北ハ四國山脈ノ本幹ヲ  
 以テ愛媛縣東宇和、北宇和、上浮穴ノ三郡ニ境ス東西四里、南北六里面積大凡十八方里戸數、一千六百六十七、人口七  
 千二百三十九ヲ有スル大村ニシテ室町時代ヨリ徳川幕府創業ノ頃マデハ津野氏ノ領土タリシヲ以テ東津野村ト共ニ津野  
 山郷ノ名アリ  
 上記人口戸數ハ明治卅七年末ノ調査ニヨレリ明治四十一年一月現在人口ハ七千三百九十一人ナリシト云ヘバ今日ハ尙  
 多少ノ増加アルベシ

地勢

本村ハ四國山脈中ノ高地ニシテ渡川ノ上流溪谷ニ當リ海拔大凡一千尺、西北ヨリ東南ニ向ヒテ多少ノ傾斜ヲナス、四國  
 山脈中ノ高峯ヲ蓋野山トイフ其南ニ雨包山アリ普通ニ之ノ兩山ヲ總稱シテ雨包山トナスモノノ如シ、蓋野山ノ頂ハ南北  
 二峯ニ分レ其間ニ高原ヲナス、東ニ延ズルコト數里ニ及ブ彼ノ天正ノ頃ヨリ土豫境界ノ爭論地トシテ又新設陸軍演習地  
 トシテ有名ナル大野ヶ原乃チ是ナリ、  
 大野ヶ原ニハ盆形ノ窪地アリ奇巖怪石多ク、殊ニまいぬけト稱スルモノハ有名ナリ、蓋シ此地ノ地盤ハ一体ニ石灰岩ヨ  
 リ成レルヲ以テ地下水並ニ雨水ノ浸蝕作用ヲ受ケ斯ノ如キ状態ニ至レルモノナルベシ、  
 烏帽子山脈ハ四國山脈ヨリ分岐シ、東津野村ノ界ニ沿ヒテ西南ニ走リ西津野村ニ入ル、便チ越知面本村ヨリ南ニ折レ橋  
 原本村ニ於テ烏帽子山ヲ起シ、山勢東ニ延ヒ、再ビ南折シテ北川ノ西岸ニ沿ヒテ遂ニ四万川、北川二川會合点ニ盡ク、烏  
 帽子西南ニ分岐シ橋原、初瀬兩部落ノ分水界ヲナスモノヲ河野士山脈トイフ、  
 昔豫州河野氏ノ我津野氏領内ニ浸入セシ時津野氏逆ヘ撃テ之ヲ走ラス、河野軍、廣野白井谷ニ追窮セラレテ遂ニ將卒悉  
 ク此所ニ戦死ス、河野士山ノ千人塚ハ其ノ死屍ヲ葬リシ所ナリト云フ、  
 中央山脈モ亦四國山脈ヨリ分派シ北ヨリ南ニ走リテ西津野村ノ中央ヲ貫キ、橋原、川西地ニ至リ、烏帽子山ニ對ヒテ樫  
 棚山ヲ起シ、更ニ南ニ走リ四万川、越知面二川ノ合流点ニ終ル、其東麓ヲ流ルルモノハ越知面川ニシテ越知面ニ發源ス  
 西麓ヲ流ルルモノヲ四万川トイフ、四万川ニ發源ス、共ニ南流シテ橋原川口ニ至リ相合シテ水勢漸ク大トナリ、更ニ南、



初瀬ヲ過ギ中平ニ至リテ北川ヲ合セ松原ヲ經テ幡多郡ニ入ル、是本縣ノ大河、渡川(一名四万十川)ノ上流ニシテ鮎ヲ産スルコト頗ル多シ、下流ハ幡多郡第一ノ各邑昔一條公ガ居城地ナル中村町ヲ經テ下田港ニ入ル

海拔——土地ノ高度

鳥帽子山、	一一〇三、 <sup>米</sup> 一	河野士	八一〇、 <sup>米</sup> 〇
八ヶ森、	八三四、 <sup>米</sup> 三	三方ヶ辻	一一六二、 <sup>米</sup> 六
神在居、	六一八、 <sup>米</sup> 四	橋原橋	四〇七、 <sup>米</sup> 四
大越、	五五五、 <sup>米</sup> 四	廣野橋	四三八、 <sup>米</sup> 七
赤はげ、	一〇四〇、 <sup>米</sup> 四		

(不入山ハ一千三百三十六、四米、鳥形山ハ一千四百五十九、七米)  
石槌山ハ一千九百七十六米即約六千五百二十尺ナリ

越知面川

越知面川 水源地越知面ヨリ流束地幡多郡東上山村ニ至ル間

七里十三町

氣候及産業

氣候寒冷ニシテ南部地方ニ比スレバ降雨特ニ多シ盛夏三伏ノ候ト雖モ晝間ノ數時間稍炎熱ニ苦シムノミ涼風常ニ來リテ爽快ヲ覺ユ、殊ニ冬季ハ寒威激烈ニシテ積雪數尺、降雪數日ニ亘ルコト常ナリ、  
本村ハ田、二百七十四町五反九畝四歩(地價五万一千四百五十三圓五十五錢)畑二千五百五十五町六反〇十五歩(地價四万三千五百六十二圓一錢八厘)宅地四十七町一反六畝四歩(地價一萬八千八百三十三錢)。山林三千八百七十一町六反四畝十九歩(地價八百三十八圓三十三錢五厘)、其他十七町八反八畝一歩(地價八圓十七錢三厘)。ヲ有セリ而シテ此等何モ頗ル肥沃ニシテ豊饒ナルヲ以テ住民ハ一般ニ農業ニ從事シ商工業ヲ營ムモノ極メテ少シ、田地ハ概ネ越知面川、四万川、北川等ノ沿岸ニアリテ灌溉ノ便アリ然レドモ何レノ土壤モ多ク砂石ヲ混ズルヲ以テ保水力乏シク隨テ米作ニ適セス、故ニ米ノ收穫甚ダ少シ、蓋シ氣候ノ寒冷ナルモ其一因ナラン、

本村ノ産物ハ推計三九、五〇〇三五、〇〇〇格二三、〇〇〇蠶繭蠶絲五、六茶三、六〇〇間等ナリ何レモ製法未ダ宜シカラザルヲ以テ市場ニ聲價ヲ得ザルハ遺憾ナリ 本項物産價格高ハ西津野村々役場書記岩本竹馬氏ガ報セラレタル近年調査ノ概數ヲ示セルモノナリ

昔時津野山郷ト稱セシ地ヲ東西津野ノ二村ニ分チ昔ノ村ヲ部落(字)トナセリ乃チ本村ノ部落ハ松原初瀬、中平、橋原、越知面(オチヨモシ)、四万川(シマガハ)ノ六區ナリ猶各部落ハ數小部落ニ分レタリ、例ヘバ橋原ハ仲洞(チカト)、山子川井、川口、飯母(キーボ)、仲間(ナカイダ)、本村、西ノ川、竹ノ藪、太郎川(タロガハ)、神在居(カンザイコ)、廣野、川西地、大藏谷(オゾータニ)、後別當(ゴベツト)、宮野々、上成(ウハナロ)松谷、等ヨリ成レルガ如シ、

橋原ノ町

本村内ノ最モ繁華ナル地ヲ橋原本村トス假定縣道ノ兩側大約百軒ノ商家軒ヲ連ネテ市街ノ形ヲナス 最モ冬季降雪氷結等ナドハ全ク北國地方ノ是レヲ呼ンデ橋原ノ町ト稱ス、須崎區裁判所橋原出張所、橋原郵便局、村役場橋原高等小學校、巡查部長駐在所、蠶種貯藏所、寒天製造所、崎村病院等モ町ノ兩側ニ建テ並ベリ之ノ町ハ益々繁昌ニ趣キツ、アリテ本村ニ於テハ將來甚ダ有望ノ地ナリ

交通

交通機關トシテハ道路アルノミ其主ナルモノハ高知、中村、松山、宇和島ノ四線路ナリ、中村線ハ渡川ノ沿岸ニ沿ヒ、中村ニ達スルモノニシテ本村トノ關係至ツテ薄シ然レドモ宇和島線及高知線ハ共ニ郵便線路ニシテ本村發達ノ要路ニ當レリ

橋原高知間里程表

地名	距離
自橋原	十二里十四町
自須崎	六里二町四十間
自高岡	四里五町二十間
至高知	二十二里二十二町

全上

地名	距離
自橋原	十二里十四町
自須崎	四里
自佐川	四里七町廿間
自伊野	四里
至高知	二十三里十七町四十間



橋原中村間郵便線路里程表

地名	距離
自橋原	四里十七町四十間
自松原	十里四里廿町
自川崎	十里廿四町廿間
自中川村	廿九里三十町
計	

橋原松山間里程表

地名	距離
自橋原	十二里十八町廿間
自久万町	七里四町四十間
自松山市	十九里廿三町
計	

橋原宇和島間里程表

地名	距離
自橋原	五里十八町四十間
自土居	八里三十一町四十間
自卯ノ町	五里三十五町
自宇和島	廿里十三町廿間
計	

沿革

本村ハ往昔津野野經高ナルモノ來リテ居ラ橋原ニ定メシヨリ二十二代ノ間ハ其ノ領土ニ歸セシガ勝興ニ至リ長曾我部元親ト戰ヒ勢窮シテ和ヲ乞ヒ己ハ西ノ川ニ退キテ養子親忠ニ家ヲ繼ガシム、蓋シ親忠ハ元親ノ第三子ニシテ實ハ既ニ元親ノ所領ニ歸セシナリ、元親ノ子盛親關ケ原ノ役ニ西軍ニ屬ス、西軍敗ルルヤ、其領土ハ我藩祖山内一豊公ノ所領トナリ、廢藩置縣ノ令布カル、マデ其子孫世々土州藩主トシテ此地ヲ領ス、當時ハ橋原、越知面、四方川、初瀬(中平松原組合)ニ各一名ノ庄司ヲ配置シ村内ノ政務ヲ掌ラシメシガ明治四年以後郷正、郷長、村長、用係、戸長等職名ヲ改メラレシコト數々ナリシモ、其管轄區域ニハ大ナル異更ナク、只初瀬、中平、松原ヲ一組合トシテ戸長ヲ置クニ至リシ一事アルノミ、然レハ其權能ハ大ニ削減セラシ、行政事務ノミヲ取ルニ至リタリ、其後明治廿一年法律第一号ニ基キテ六ヶ村ヲ合併シテ西津野村ト稱シ、橋原、戸長役場ヲ以テ村役場ニ充用シ、明治廿二年六月一日自治ノ政ヲ行フニ至レリ

然ルニ區域廣濶ニシテ村治上不便少ナカラザルヲ以テ、越知面、四方川、(中平松原組合)ニ各一名ノ區長ヲ置キ自治政ノ機關トシ其他ハ皆役場ノ直轄トス

現在村吏員ハ左ノ諸氏ナリ (明治四十年三月現在)

- |    |       |     |        |
|----|-------|-----|--------|
| 村長 | 大野 職  | 助役  | 中平 定純  |
| 助役 | 竹村 敬凡 | 收入役 | 森田 荒次郎 |
| 書記 | 森山 宗晴 | 書記  | 掛橋 清現  |
| 書記 | 岩本 竹馬 | 書記  | 西村 清市  |

藩政中ハ庄屋、醫師、僧侶等ニ就キテ習字、算術等ヲ學ビシノミ明治五年縣廳ヨリ橋原ニ學校ヲ設置セシヲ以テ本村學校ノ始メトス、明治七年ニ至リ村稅ヲ以テ各部落ニ學校ヲ建設ス、是ヨリ就學ノ歩合非常ニ増加シ教育ノ著シキ進歩ヲ見ルニ至レリ明治卅四年ニ至リ橋原ニ高等小學ヲモ開設セシガ數年前ヨリ橋原ニアルニ小學校ヲ合併シテ橋原高等小學校トナセリ此外 四方川、越知面、坪ノ田、上成、西川、初瀬、折渡、松原ニ全名ノ尋常小學校アリ、何レモ年々好成績ヲ以テ進ミツ、アリト云フ。

附南路志ニ越知面村ハ別府ノ内、地二百二十石七合、橋原村ハ地三百九十七石九斗四升七合、宮ノ野村ハ橋原ノ内地四十二石五斗、初瀬村ハ橋原ノ内地百三十六石二升六合中平村モ橋原ノ内ニテ地ハ九十石三升七合アリ」ト記セリ



藤原經高

上成、竹籤  
皆西津野村  
ノ字ナリ

經高ハ藏人頭ト稱ス藤原仲平ノ子ニシテ

母ハ伊勢ノ御、伊勢祭主從二位大中臣輔親ガ女ナリ、初メ伊勢ノ御、宇多天皇ノ女御タリ後藤原仲平ニ賜フ御臺トナル、然ルニ經高故有リテ伊豫ニ下リ浮穴郡川上庄道ノ内村ニ住ス、延喜十三年西年救免ヲ蒙リ同年三月四日八万山通リ土佐ニ遷リ上成ニ來リシモ此處ハ峻山深谷ノ邊地ニシテ永住スベキ所ニ非ズ、宜ク勝地ヲ得テ興隆ヲ計ント一日柳絮ノ流ヲ逐フテ竹籤ニ至ル日既ニ西山ニ没シ、暮煙橫ル、月ハ東嶺ニ登ツテ夏江冷シ、從士ヲ引テ人家ニ宿ス、公兼テ伊豆ノ國ヨリ三島大明神ヲ勸請シ奉リ清淨ノ地ヲ擇ミ宮殿ヲ建立セシト欲ス、此夜靈夢ノ告有リ、次日ヨリ工匠ヲ召シ此所ニ宮殿ヲ造營ス不日落成シ寶幣ヲ納メ奉ル、又神前ニ一基ノ神牌五輪寶形ノ柱ヲ建テ附テ請シテ法華經ヲ四面ニ書寫セシメ、天地、神明、佛陀ノ三寶ヲ供養シ、丹誠ヲ抽ンデテ之ヲ祈ル、諸願ヲ成就セシメシガ爲メ也、是レ古代ノ風今時ノ例ニアラズ、此所ノ里一民是ヨリ御經柱ト云フ、抑々此ノ神ヲ勸請シ奉レル由來ハ往昔大織冠未ダ鎌子ノ連ト申シシ時、祈願ニ依テ相摸ノ國ニ下向シ鎌子大織冠ガ岡ニ納メ給フ、此レヨリ此地ヲ鎌倉ト名ク、夫レヨリ伊豆ノ國ニ趣キ此ノ神ニ詣テテ靈驗ヲ祈ル明神威靈無ク天下ニ大切ヲ立テ子孫永ク、天子補佐之大臣ト成リヌ、經高尙モ其苗裔タルヲ以テ就中此神ヲ信仰シ奉ルコト心魂ニ徹ス、同年椅原ヲ開テ住所ト爲ス、蓋シ椅ノ木多キ故ニ村名ト爲ス、同十九己卯ノ年椅原村ニ城ヲ築キ居城ト爲ス、夫ヨリ津野山ノ村々ヲ開キ、次第ニ里方ニ手ヲ入レ、此ニ於テ武備漸ク張ル、一説ニ曰ク延喜十三年三月四日土州ニ遷リ、高岡郡津野ノ庄、床鍋ニ住ス、又タ深山ヲ開キ椅原村ト名ク此所ニ住スト云フ、是レ後人浮會ノ説ニシテ甚キ齟齬也元高降下ニ見合ヌ可シ、又椅原三島大明神觀請ニ就テモ異説多シ、其一説ハ河野好方勸進ヲ蒙リ朝敵純友征伐ノ時之ニ隨テ松山ニ會ス、大三島大明神ハ伊豆國三大社ニシテ而シテ河野家氏神、我ニ一体分身ノ氏神ナリ爲ニ、俱ニ參詣シテ誠心ヲ凝ラシ武運ヲ祈ルルニ、出陣難ナク朝敵ヲ退治ス、好方ノ武名舉ル、歸陣ノ後、此ノ御神ヲ椅原城下ニ勸請シ奉リ、鎮守ト爲ス、故ニ正月二日神前ニ於テ御弓始ス、朝敵退治ノ遺風也、又一説經高椅原ニ遷ル時竹ノ藪ヨリ城下ニ勸請シ奉ルト云フ、兩説何レヲ以テ是トス可キ哉之ニ依テ二所ノ御神椅原村ノ惣鎮守ト爲シ、祭祀忘ルコトナシ、然シテ後半山ニ姬野城ヲ築キ遷ル、此時椅原村ヨリ姬野ニ勸請シ奉リテ鎮守トナス、是ヨリ代々當地ニ在城ナリ時ニ康保二年乙丑十二月二日卒歲七十

四、法名ヲ常明院光岳願西ト号ス、此レ津野山ノ内氏ノ祖也。  
附、四國名所誌ヲミルニ經高ハ在原姓ナリ、即平城天皇ノ皇子阿保親王ノ曾孫ニシテ從五位下越中守ナリトアリ又曰ク椅原ニテ食祿一千町ヲ賜ル子孫世々之地ニ居ル而シテ其十五代ノ孫ヲ元質トイフ、其居城墟ハ須崎ニ在リト(蓋シ同書ハ四國舊蹟志及土佐物語ニヨリシモノナラン) 附記シテ參考トナス

津野元高

元高ハ津野氏第八代經高ヲ初代トシ淨高(孫次郎ト稱ス)ノ長子ニシテ孫次郎ト稱ス、承久ノ兵亂ハ京鎌倉ヲ騷動セシメシモ暫時ニシテ相治マレリ已ニ靜謐ナル處、山ノ内藏人次郎ト云フモノ須崎ノ浦ニ著船シテ津野家ニ頼ムト請フ、元高之ニ依テ遠國ヨリ下リ、全家ヲ頼ム子細ヲ聞クニ「藤原ノ秀郷ノ後胤首藤刑部重義地カ末葉ニシテ越前ノ國今立郡山ノ内城主左衛門ノ佐經實ガ子今度 院宣ヲ蒙リ御味方ニ參リシ所、御軍利ナク、多クノ軍兵何レモ鎌倉ノ威風ヲ恐レ散々落チ行キタレバ再ビ歸國スルコト相成ナラズ、浪々爰ニ至ル、君哀情ヲ垂テ窮身ヲ救ヒ玉ヘ」ト云フ元高之ヲ憐ミ、養育シテ後、床鍋山ノ内ニ居住セシム、此ノ子孫家臣トナル、元高ハ元仁元年甲申三月十四日卒歲二十五、

津野滿之

十一代滿高ハ實ハ九代元高ノ弟滿長ノ子也、其子ヲ滿之、孫次郎ト稱ス、即チ第十二代ノ主ナリ、建武元年ヨリ新田足利確執ニ依テ國家再ビ亂レ一日モ安ラズ、古今未嘗有ノ亂世也 兩朝南北ニ並立シテ天下ニ分レ、諸將南北ニ奔走ス、此ノ時ニ乘ジ、西夷八蠻蜂起シテ而シテ國々所々ニ發向シ、或ハ城責メ或ハ合戰、止ム時ナシ、其節、西伊豫川上黨境目ニ亂入シ財寶ヲ奪ヒ、或ハ民家ヲ燒ク、土民等防グコト能ハズ、之ヲ姬野役所ニ訴ヘ出ツ滿之之ヲ聞テ安カザル事也防カズンバ有ルベカラズト、豫州道口中平村、城ガ峯ニ塞壘ヲ構ヘ、自身立越シ相守ル是ヨリ豫州勢境ヲ劫スコト之レナシ、其ノ以來此所ト姫野ト交代ニ之ヲ守ル時貞治元年壬寅正月四日姫野ニ卒ス、歲六十、法名ヲ法光寺殿梅豐清心ト号ス、

津野通重

津野通重ハ津野十四代ノ主ニシテ山内筑前守ヲ拜ス、河野通堯、彼ガ大志ヲ有シ、且ツ縁者ナルヲ以テ養育ス、康暦元年己未ノ十一月六日ノ合戰通堯ニ從ヒ一族四十七人ト共ニ討死ス

津野通高

通高ハ通重ノ子ナリ父通重討死ノ時纔ニ三歲也、兄弟二人アリシガ成長ニ及テ博聞闊達智勇相備テ大將ノ器量有リ、後姫野ニ歸テ家ヲ繼グ

津野光高

孫次郎(實ハ之高ノ誤)



光高實ハ山ノ内筑前守通重ノ男河野家ニ養育セラルル年既ニ十五歳一族家臣共之ヲ迎ヘテ家ヲ繼ガシム、能ク士ヲ愛シ、民ヲ惠ミ政道ヲ正シテ而シテ領分大ニ治ル

山川草木識威名

今夕御筵歌舞處

陽春一曲是歡聲

將軍家大ニ感賞シ奏シテ正五位ニ叙シ、備前守ニ任ス、之ニ依テ本國ノ諸將其ノ德ヲ感シ厚ク交ヲ成ス領分靜謐萬事心ニ愜ズト云フコトナシ、永享三年歳日諸士出仕ノ時、和歌ヲ詠ジテ曰ク

越方もまた此すへもよもあらし 身にあまりたるおもひ出乃春

此年(永享三年辛亥)三月四日卒ス歳五十五、法名永林寺殿朝散大夫兼備前、大守壽岳元公ト号ス

谷奈山先生曰ク「按ニ細川常久吸江庵ニ寄ル書大ニ津野備前守ヲ感喜セリ」ト蓋此人ナラン、然ル時ハ則上件ノ故事、鹿苑相公之時ニ當ル乎、武藤氏輯ノ南路志ニ

津野之高姓藤原元祖藏人經高始メ豫劔浮穴郡山ノ内ニ住シ山ノ内ヲ以テ氏トス、後土州ニ移リ高岡郡津野山ヲ開キテ壘ヲ構フ故ニ、津野氏ト稱ス之高ハ其ノ十一世、津野山郷姫野ノ城主也字ハ孫次郎、父ハ孫次郎春高實ハ豫劔河野通重ノ三男、春高ノ養息ト成ル室ハ豫州河原淵氏ノ女也、之高幼孩ヨリ學ヲ好ミテ多才也、年甫メテ十七上洛ス足利鹿苑相公ノ命ニ應ジ宴席ニ詩ヲ賦シテ献ス、將軍家大ニ感賞有テ奏シ給ヒ則

勅命ニ依テ從五位下ニ叙シ、備前守ニ任ゼラル、細川常久吸江庵ニ寄ル書ニ備前ノ守ヲ感賞スルハ蓋シ此人也其後大番役、犬追物、八的、鷹野、免除ノ御教書ヲ賜ハリ、文明九年三月四日逝ス年九十八、法諱永林寺殿

又南路志、四十八卷親忠切腹、盛親滅亡ノ條ニ

津野家元祖越中守經高  
二代次郎太郎重高  
四代彌次郎高行  
六代彌次郎頼高  
八代次郎太郎淨高  
十代孫次郎春高

- 三代彌次郎國高
- 五代孫次郎高績
- 七代孫次郎繁高
- 九代孫次郎元高
- 十一代孫次郎光高
- 十三代刑部少輔元實
- 十五代孫次郎基高
- 十七代孫太郎勝興
- 十四代孫次郎國泰
- 十六代孫次郎定勝
- 十八代孫次郎親忠
- 十二代彌次郎元藤

トアルモ之ヲ中平家ニ歳スル津野氏系圖及ヒ中平氏系圖照合スルニ十一代滿高十二代孫次郎滿之、十三代全泰高、十四代通重、十五代通高等代數ニ加ヘアル故元祖ヨリ親忠マデ二十四代トナリ、從ツテ之ノ十一代光高ハ彼ノ十六代光高(蓋シ諸書ニヨルニ光高ハ之高ノ誤ノ様ナリ)、之ノ十二代彌次郎元藤ハ彼ノ十七代元藤、以下代數ニ相違ヲ生ジ、且ツ俗名ニモ彼ハ彌次郎國泰トアルヲ此ハ孫次郎國泰トセル柄アリ、又或書ニ元實ヲ基實ト書セリ、此等ハ猶大ニ研究ヲ要スベキ点ニシテ速斷シ難シ、サレバ茲ニハ唯其ノ一二異說ヲ掲ゲテ以テ識者ノ叱正ヲ俟ツノミ、  
附、此ノ書ニ誌セル津野、中平兩氏ノ畧傳等ハ主ニ中平定殺ノモノセル津野、中平家系譜(中平利連氏所藏)ニヨリシモノナリ、サレバ津野氏家系考証、南路志其ノ他ノ諸書ニ記スル處トハ稍異ル所少ナカラザルベシ

津野元實、刑部少輔

(津野氏第十九代ノ主)

元實十七歳ニシテ而シテ家ヲ繼グ、自ラ智勇相備ハリ、能ク輜器ヲ識ル、頗ル戰守ノ法ヲ得、實ニ良將之器也、訴ヲ聞クコト明ニシテ而シテ民能ク政道ニ從フ、領分靜謐ニ治ル、一日中平忠光ノ願ニ依リテ家臣高倫ニ命ジテ經高ヨリ基實ニ至ル、相續都テ十八代ノ家譜ヲ撰バシム、之ヲ寫シニ帖ト作シ一帖ハ公家ニ藏メ一帖ハ忠光ニ賜フ、乃チ是家之正傳也、然ルニ近年久禮ノ城主、佐竹繁義、戸波城主福井玄蕃事ヲ狩獵ニ寄セ領内ニ蹈入り、田島ヲ損シ、作物ヲ傷フ、農事ヲ妨クルニ數度ニ及ブ、元實大ニ怒リテ曰ク佐竹福井近隣ニ居リ當家ヲ慢リ、非道之振舞奇怪ノ至也、其儘ニ指置ケバ則當家ノ耻辱武門ノ瑕瑾據ナシ、不日ニ兵ヲ起シ、先ヅ久禮ニ押寄セ佐竹ヲ討亡ボシ、勝ニ乘ジ兵ヲ以テ戸波ヲ討テバ、破竹之勢當ルベカラズシテ一戰ニ福井ヲ討チ讎ヲ報ヒ得ベシ、兵ハ神速ヲ費ム不意ニ押寄セ討取ルベシト下知シテ永正十四年丁丑三月十四日久禮城ニ攻メ寄ス佐竹勢不意ヲ討タレ防戦スレドモ一採ミニ攻メ敗ラレ、佐竹繁義勢盡キ腹搔切リテ相果ル家臣共評議シテ繁義ノ子掃部頭義之助命ヲ殺リテ降参シ幕下ニ屬スベク起請文ヲ捧ゲ出城シテ歎キ訴フ、元實之ヲ憐ミ、一命ヲ助ケ幕下トナシテ歸陣ス、同四月十三日福井玄蕃ヲ討ント欲ス、戸波井場城ニ攻寄ス、福井、猛威ニ恐レ、大平ニ加勢ヲ乞フ、大平來リ援ク、城兵力ヲ得テ防戦ス、寄手兩敵ニ當リ、血戰數刻、元實猛勇ヲ震ヒ縱横ニ馳立ツ、敵兵敢テ相當ル者ナシ、勢ニ乘リ攻



戰中過テ深田ニ落入リ大勢ニ取巻カレ、終ニ此處ニ生害ス、一族家臣殘ラズ討死ス、先ツ一族ハ中平因藩守外九人也家臣ニハ市川石見ノ外二十八人、士分四十三人、雜兵數百人也此日、元亨庵之庵主徒然之余リ覺エズ午睡ス「松寺ニ竹テ同ク一鶴ト棲ム」古詩ノ意ニ彷彿タリ矣、時ニ門外ニ馬ノ嘶クアリ庵主不思議ニ憶ヒ之ヲ見レバ元實也、進ミ來テ曰ク今日過テ蚊蛇之徒ニ辱メラル此ニ來テ和尙ノ教ヲ請フト、庵主驚テ答ヘント欲スレバ、夢忽チ覺タリ、此ノ靈夢ニ依テ庵主ヲ以テ師ト爲ス、

法名元亨院殿健翁勇公ト号ス、維時永正十四年四月十三日歳三十六ナリ、

### 津野國泰(彌次郎)

津野氏第二十代ノ主ヲ國泰ト云フ永正十四年四月十三日ノ戸波城攻ニ元實ノ戰死アリ、其翌日福井方家臣、出間九郎兵衛須崎ニ討入り津野城ヲ取ラント欲ス、其折節一條公ノ家士安並彌惣(彌三トセル書モアリ)所用ニ就テ同豐ニ使シテ歸ル處出間ニ出會ヒ、此時ニ乘ジテ津野ヲ從ヘ忠勤ニ備ヘント勇ミ進ンデ來ル、中平兵庫之ヲ聞テ、吾井郷ニ迎ヘ戰ヒ敵軍ヲ討破リ、松ガ瀬ニ追ヒ詰メ、出間安並ヲ生捕リタリ、此時國泰繼カニ二歳再ビ家ヲ繼グコト元忠ガ忠戰ニ依ツテ也、其後一條房家安並ガ仇ヲ報ゼント猛勢ヲ以テ攻寄セシカハ、元忠之ヲ大野見ニ迎ヘ戰ヒ討負テ津野城ニ引籠ル、一條勢城ヲ取巻キ攻メ討ツコト甚ダ急ナリ、元忠慮ルニ味方ハ小勢ニシテ敵ハ大勢ナリ城ノ破レノコト目前ニ有リ、何卒幼君ヲ世ニ立テタク、矢留ヲ乞ヒ兵庫幼主ヲ背負ヒナガラ出城シテ而シテ、佐竹掃部頭方陣所ニ至リ、義之ニ對シテ曰ク「今日元忠死スルノ日也御邊讎ヲ報ゼント欲セバ我首ヲ取テ一條公ニ奉シ夫ヲ功ニ幼君ヲ世ニ立テ給ハルベシ、若又助命ノ恩ヲ報ゼント欲セバ愛憐ノ情ヲ垂レテ一條公ニ歎訴シ給フベシ、万一運ニ叶ヒ助命ヲ蒙ラバ則一城ヲ以テ降參シ永ク忠誠ヲ盡スベシ我ガ生死御邊ノ胸中ニアリ庶幾バ宜シク思案シ給ハルベシ」ト云ヒケレバ、義之之ヲ聞キ情之ヲ思フニ、今度元忠命ヲ捨テテ幼主ヲ取リ立テ度キ趣キ尤モ至極感心ニ堪タリ我元實ノ厚恩ヲ報ゼンバアルベカラズト、本陣ニ到リ「元忠一城ヲ以テ降參仕リ幼主ニ家名ヲ繼セタキ段、頼ヒ奉ル此身ノ粉骨碎身少シモ苦シカラズ、何卒御許容下サレタシ」ト達一ニ言上ス一條元忠ノ忠心ヲ感ジ給ヒ、カ、ル忠義ノ士ヲ留センコト本意ニ非ズトテ、御免ヲ蒙リ幕下ニ屬ス之ニ依テ戸波運池波川等ヲ初メ高岡郡分發ラズ一條公ハ降參ス、元忠心ヲ盡シ守リ立テ、城ヲ渡ス、主管スルコト歳ニ一年、天文二年癸巳十二月廿八日卒ス歳十八法名知信院殿逸峯當雲ト号ス

### 津野定勝、中務少輔

第二十二代定勝ハ先代即基高孫次郎ノ長子也、其高ハ國泰ノ後ヲ繼グルモ實ハ山内攝津守元定(元實ノ弟)ノ長男ナリ。運池城主大平山城守ハ先年戸波攻メノ時福井安並ニ加勢シテ元實ヲ討ノ讎アリト雖モ、其一條殿幕下ニ屬ス故ニ空シク時機ヲ相待ツテ年月ヲ送ル、或人ノ曰ク定勝一條房冬公之罫ト成リ武威日ヲ逐フテ盛ナリ此コニ定勝ガ家士、戸田又左衛門ノ父左衛門佐ハ永正十四年元實ニ隨フテ討死ス、其時未ダ幼少ニシテ家ヲ繼ギ、津野家ニ奉公ス、此節一條公ノ下知ニ依ツテ運池城ヘ加番ニ遣ハサル、或時元忠ガ居城時田ニ來ツテ密ニ告テ云ク「大平ハ君父之讎ナリト雖、御下知ニ依ツテ是非ナク還ツテ彼カ爲ニ在番ス、口惜キ次第也、然ルニ此頃大平ハ本山ニ組ミン叛逆ヲ企テ依ツテ加番ノ者共ニ相談ラフニ彼ニ組スル者多シ某モ彼ニ相談ラハル、故ニ陰謀疑ヒナク露顯ス、此趣ヲ主君ニ達シ、舊恨ヲ晴ラサント欲ス、然ルニ某此所ニ來ルト聞カバ彼疑ヲ生ゼン、片時モ油斷相成ラズ貴老能々之ヲ計リ給ヘ」ト、元忠之ヲ聞テ悦テ云ハク「我大平ヲ討ント欲スルコト多年ナレモ力足ラズ殊ニ大平ハ一條殿ノ幕下ニ屬ス、旁以テ時節ヲ待ツ所、大平滅亡ノ時至レル哉我老年ニ及ブト雖討手ヲ乞ヒ請ケ大平ヲ討テ亡君ノ讎ヲ報ズ可シ、貴殿早ク歸テ大平ニ悟ラルベカラズト、云テ戸田ヲ運池ニ歸シ其儘姫野ニ出仕シテ之ヲ定勝ニ達ス、定勝モ亦大ニ悦ビテ讎ヲ報ズルノ時至レル、哉ト直ニ元忠ヲ輔多ニ遣ハシ之ヲ訴フ、一條公大ニ驚カレ、中平兵庫、福井安並兩人討手ノ大將ヲ命ゼシル、頃ハ弘治二年兩將直ニ運池城ニ押寄ス、大平、思ヒ寄ラザル討手ニ驚キ、防戦スト雖モ終ニ相叶ハズ遂電ス而シテ殘黨ヲ悉ク退治シ舊恨ヲ報ズ、又元龜元年庚午十二月晦日佐川和泉村西森源内、半山ニ亂入シ財寶ヲ蓄ヒ、百姓ヲ害ス其騒動相川名本竹村彌三兵衛之ヲ討ツ、定勝大ニ之ヲ感ジ感狀ヲ遣ス、然ルニ長曾我部元親ノ威勢日々ニ慕リ一條公ノ武威漸シ衰フ、元親此時輔多ヲ取ラント欲ス、先ヅ定勝ヲ誅ス、定勝從ハズ、家臣ノ心區々ニナリ異變ヲ生ゼントヲ恐レ、終ニ退ヒテ豫岳ニ趣キ、弟兵部孫次郎之ニ從フ、定勝老年ニ至リテ椅原郷松谷ニ飯住ス、元和二年丙辰七月九日卒歳九十六松谷長生庵ニ葬ル、墓有リ法名ヲ長林寺殿現西定雲ト号ス(竹村彌三兵衛ノコトハ後章ニアリ参照スベシ)

### 津野勝興

定勝ノ第二男ナリ

定勝ノ隱退スルヤ家臣等相議リ勝興ヲ立テ定勝ノ後繼ガシム即第二十三代ノ主ナリ此時元親運池城ヲ取リ、戸波ニ逼ル之ヲ防ギ相戰ントイヘドモ元親ノ武威次第ニ強ク國中大半ヲ討テ從ヘ勢ヒ日ヲ逐フテ盛也勝興勇ナリト雖勢ヒ轉微ニ成リ、相持スルコト能ハズ、其上累年病氣ニシテ而シテ治セザルコトヲ知ル故ニ媾和シ元親ガ三男親忠ヲ請ヒ養子トナス、城ヲ渡シ其身ハ椅原郷西野川村ニ退隱シテ剃髮ス、士人入道殿ト云フ天正六年戊寅十一月二十一日ヲ忌日ト爲ス歳二十九法名



皇御院殿片窓瑞臻ト号ス、幕ハ西野川村入道谷ニアリ、此ノ時ニ至ツテ津野山ノ内氏世系斷絶ス當家氏流之輩蹉跎嗟之摩理リナル哉

津野親忠

實ハ長宗我部土佐守泰元親ノ三男ナリ、勝興之ヲ請フテ養子トナス、元親時ニ既ニ一條家ヲ傾ケ一國ヲ橫領シ、威風四州ニ靡ク然ルニ豊臣秀吉武吉今ニ獨歩シ威名神ノ如ク天下ニ震ヒ、席ノ卷クガ如シ天正十三年四國征伐ノ軍ヲ起シ羽柴秀長浮田秀家等ヲ將トシテ大軍ヲ率キ來リテ阿讃ノ諸城ヲ攻ム元親拒ギ戰フ能ハズ終ニ家臣ノ諫ヲ入レテ秀吉ニ降リ幼子親忠ヲ送リテ質トナス、其後親忠成長シテ日下ノ城主三宮平左衛門ノ女ヲ娶ル、然ルニ元親ノ長子信親豊後ニ戰死シ、慶長元年丙申元親四男盛親ヲ立テ嗣トナス、爾後親忠兄ヲ以テ立タズ其心服セザルノ機アリ盛親之ニ惑フ、嫌疑之間親忠ハ暫ク香我美郡岩村ノ僧寺ニ執居セシメラル、年月不詳蓋シ慶長四五ノ交ナリ五年庚子盛親石田三成ノ軍ヲ催スニ從フ、美州ニ於テ三成ノ兵敗ル、ヤ、盛親狼狽シテ歸國ス時ニ諸國三成ニ從フ者或ハ身竄セラレ或ハ國除カル、井伊兵部少輔直政伴テ元親ト相善シ故ニ盛親ヲ憐願懇訴セント欲ス

家康其罪ヲ宥恕シ盛親ヲ招ク盛親上京ス、發スルニ臨ミ人ヲ岩村ニ遣シ親忠ニ通ツテ自殺セシム、此レ親忠ト兩分スルヲ其レ恐ル、ナリ時ニ九月二十九日實ニ關原戰後十五日目ノ事ナリトス、享年二十八歲ハ岩村孝山寺ニアリ法名ハ孝山寺殿雪庭宗第ト号ス、都而經高ヨリ親忠ニ至マデ二十三代、須崎郷主津野山内家系祀絶ユ矣、藤堂和泉守高虎皆テ親忠ト交リ厚シ、此ニ至ツテ家老中平駿河具ニ事ヲ高虎ニ申ベ、且ツ親忠ガ遺物ヲ贈ル、高虎盛忠ガ不義ヲ疾ミ具ツニ之ヲ家康ニ聞ス、家康大ニ怒リ遂ニ土州ヲ沒收ス、故ニ今ニ至ルマデ須崎津野山内氏親忠ヲ思フテ息マズ、歲時吊祭在スガ如シ、焉ゾ其恩化之人ヲ感ズルヤ、深シ矣。

後章津野神社吉祥寺ノ條ヲ參照スベシ

中平常定

中平氏ハ津野氏ト同ジク藤原仲平ノ裔ナリ、而シテソノ初代ヲ中平備後守常定ト云フ、常定ノ父ハ津野光高ニシテ母ハ豫州川原淵氏ノ女ナリ、光高ノ室早ク死ス、後二妻アリ、一ハ豫州ノ川原淵氏ノ女ニシテ中平村ニ居ル一ハ土佐國佐川中村氏ノ女ニシテ姫野ニ居ル、二妻共ニ身ムコト在リ、光高約シテ先ツ産スルモノヲ嗣トナス可シト、豫女先ツ産ス、是常定也使人ヲ以テ姫野ニ送リ執事市川佐渡ノ入道、慮ルニ光高ハ豫州ノ人也其嗣亦豫女ニ出ヅレハ本國ノ諸將或ハ心ヲ隔テン、長久ノ策ニ非ズト、因テ抑格シテ送セズ、後七日土女元藤ヲ産ス、市川乃テ慶儀ヲ具ヘ之ヲ送ス、立テ、嫡子トナス、然

ルニ達シ方前後スルヲ以テ甚ダ不興ナリ、市川云折節大雨洪水山川渡リ之ナク、使者唯今到着ス、臣ノ知ラザル處也、之ニ依テ常定成長ニ及ンデ之ヲ聊ミ市川ヲ討ント欲ス、故ニ常定出仕ノ日ハ市川病ト稱シテ出デズ、爲メニ人シク此ノ體憤ヲ晴サントシテ果サザリキ漸ク十七歲ニシテ遂ニ中平村ニ壘ヲ構ヘ兵ヲ起シ元藤ト相戰ハント欲ス、年ヲ經テ媾和シ、津野山九箇村ヲ領シテ中平村ニ居ル、後橋原村ニ遷リ住居ス、出所ヲ以テ名字トナス、是レ中平氏ノ元祖ナリ、與力ノ十七三人請ヒ取テ、西藩ヲ守ル、又伊勢御眞筆ノ伊勢物語此ノ時ヨリ當家ニ傳ル是レ嫡家ノ規模也老後采地ヲ元勝ニ飯シ、竹藪村ニ遷リ住居ス、延徳二庚戌年二月十七日卒ス年七十六

中平元忠

元忠ハ津野經高十五代ノ孫ニシテ中平氏四代ノ祖ナリ、後土御門帝ノ明應四年ニ生ル、永正十四年四月十三日元實、戸波城ニ於テ戰死スル有リ、時ニ元忠ハ廿三歲ナリ、翌十四日、田間九郎兵衛、安並彌惣、津野城ヲ取ラントシテ來ル元忠吾井ノ郷ニ於テ之ヲ虜ニス、其後一條殿ノ幕下ニ屬シ幼主ヲ守ラントシテ城ヲ渡シ本意ヲ達ス、元忠ノ功勞天心ニ慨ヘル乎然ルニ國泰不幸ニシテ短命ナルコト、是レ所謂天命ナリ、憐ベシ悲ムベシ領内開夜ノ如シ此ニ於テ基高ヲ立テ主君トナス、基高能ク領内ヲ治ム、是ヨリ津野家暫ク安寧也蓋津野家再立之功專ラ元忠ノ忠戰ニ依テ也、然シテ基高ニ押移リシ後、太平山城守一條殿ニ背キシ時、舊恨ヲ削ラントシテ、討手ヲ請フテ、太平ヲ追討セント乞ヒ、蓮池城ヲ平治ス、都テ元忠ノ武功悉ク述べ難シ、時ニ元龜三年壬申十一月廿三日卒ス、歳七十八、錫杖越ニ葬ル、法名孝岩院殿前兵庫助節叟道忠ト号ス、是レ土崎中平ノ祖也、元忠居城ノ邊リニ地許多ヲ領ス、先祖常定以來同家之格ニテ家臣ノ例ニ入ラズトイフ、錫杖越ハ高岡郡香桑村吾井郷ニ在リ、此處ニ元忠ノ會孫沙門道晃ガ延寶七年ニ建テシ墓碑アリ、其高サ六尺余、巾一尺七寸、厚サ八寸許ノ砂岩ニシテ之ヲ庇フニ結構ナル碑亭ヲ以テス其ノ銘左ノ如シ。

土州高岡之郡内津野元祖仲平氏藏人頭經高公十一代孫山内孫次郎兵衛尉之基高公四代孫子吾井江崎田之任仲平兵庫助元忠曾孫之塔也

孝岩院殿前兵庫助節叟道忠居士覺靈

元龜三年壬申歲菊月念二日壽七十八裸逝去當子延寶七己未歲季夏初八覺居士嫡子清忠



爲供養祖黃葉菩薩戒弟子繼耀晃比丘造立之

トアリ

中平光房(駿河守)

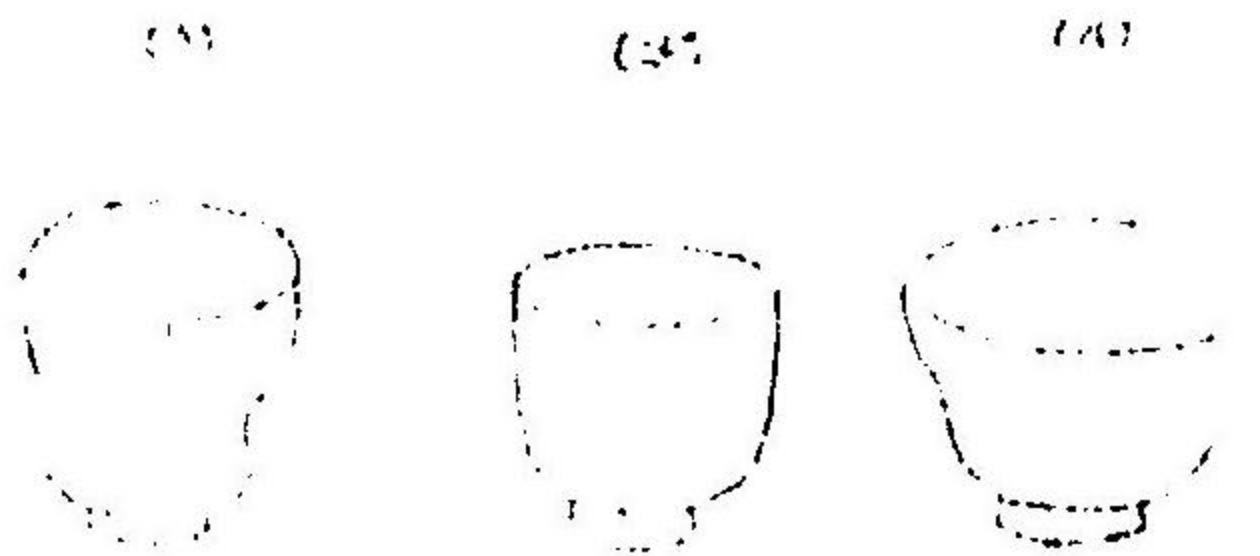
中平光房ハ中平氏五代ノ祖ニシテ駿河守ト稱ス、元祿六年癸亥八月四日豫州ノ北川肥前守親廣、大番源太夫、金康板嶋西園寺公宗勢ヲ合シテ境目ニ押入り駿河ノ居城ヲ攻ム、七晝夜防戦シ、奇計ヲ以テ敵兵許多ヲ討取り大將北川、西園寺等ヲ追拂ヒ、又元龜二年辛未正月朔日北川備前守親康不意ニ押寄セ城ヲ閉ム、用意ノ鐵桶或ハ石弓等ヲ切テ落シ、即時ニ敵兵二千余人ヲ討殺ス、駿河震雷ノ如ク討テ出ヅ、親康打負ケテ逃散ス、二度ノ戰定勝公ノ聽ニ入り、威狀ヲ賜フ、又天正八庚辰八月十三日元親ノ大將桑名太郎左衛門、久武内藏助、依岡左京、北川親康ヲ退治ノタメ發向ス、親忠下知トナリ、駿河守案内ノ大將ヲ蒙リ、先陣ニ進ム、蓋シ親康降參ス元親波川兵庫ノ智タリ、今度波川叛逆ノ時組スルヲ以テ之ヲ退治セシムルナリ、

北川領分ハ土州ノ境ニ五城アリ、甲ノ森、三瀧、大番、猿瀧、烏森、此ノ内北川ガ居城ハ大番ナリ、桑名、久武之ノ城ニ向フ、寄手相圖ヲ定メ五城ニ攻落ス、親康石見守源太夫悉ク討死シテ而シテ北川平定ス、蓋シ光房ノ所領百二十石家臣ナシ、並ニ勤事與力ノ士三十五人請取り豫州境目ノ關所ヲ守ラシム、然ル所右ニ記スル豫州勢打入り城ヲ攻ムルコト甚ク嚴ナリ、楠公ノ術ヲ煉リ、粉骨防戦ニ盡シ兩度ナガラ小勢ヲ以テ大敵ヲ追拂ヒ、武名ヲ遠近ニ震フ、其時國家ハ兵乱、殊更親忠ハ幼弱ニシテ而シテ褒賞ノ沙汰ナシ今般本知ノ外三町五反知行スベキ旨親忠ノ威狀ヲ賜ハリ、元親ヨリ前給ノ外里分ニ於テ八町五反知行ヲ賜ヒ光房數度ノ軍功威賞ノ趣威狀アリ、然ルニ元親慶長四年己亥五月卒去シ、盛親家督ヲ繼ギ、同五年濃州青野ヶ原合戦ニ盛親ハ石田三成ニ組ス西軍敗ル、ヤ盛親狼狽シテ而シテ歸國シ間モナク伊井直政ノ招ニ應ジ上京ス、發スルニ臨ミ久武内藏助、津野藤藏人ノ兩人ヲ岩村ニ遣ハシ親忠ニ逼リ自殺セシム、親忠ト其ノ國ヲ兩分スルヲ恐テ也、駿河大ニ盛親ヲ憎ム、此ニ於テ藤堂高虎督テ親忠ト交リ厚シ、之ニ依テ、甥近房(光房弟忠房ノ子)ヲサシ上セテ盛親ノ殘忍ヲ高虎ニ詳訴シ、且ツ親忠ノ遺物ヲ賜ル、高虎盛親ノ不義ヲ疾ミ直ニ之ヲ遠セラシ、家康大ニ怒リ給ヒ土州ヲ沒收シ、盛親ヲ浪人トナス、光房時ニ慶長十年乙己九月廿一日椅原ニ卒ス歳八十八、法名ヲ了元常治ト号ス

中平光義

左京亮、光或之下モ有リ

駿河守光房第三子(末子)ナリ



Vertical text columns between the top diagrams, likely identifying the locations or events associated with them.

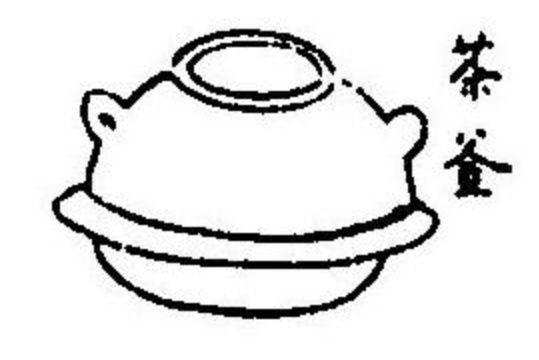


Vertical text columns between the middle diagram, continuing the historical or geographical information.

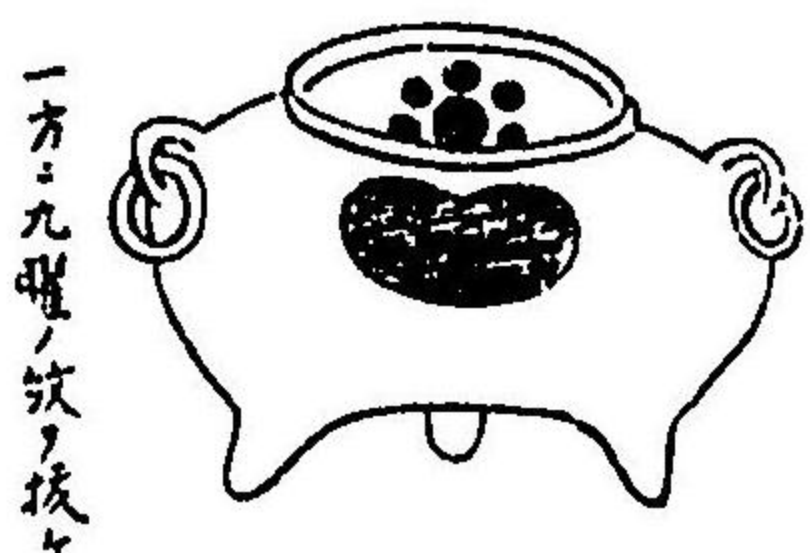




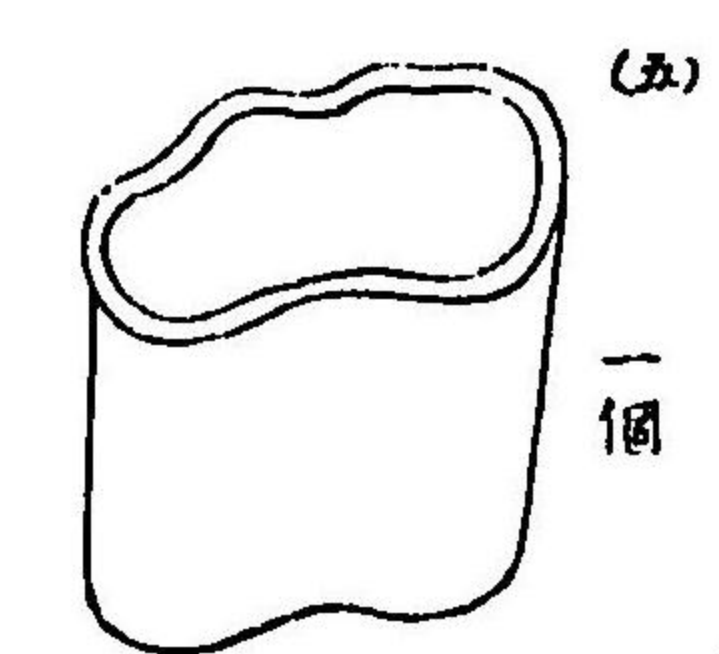
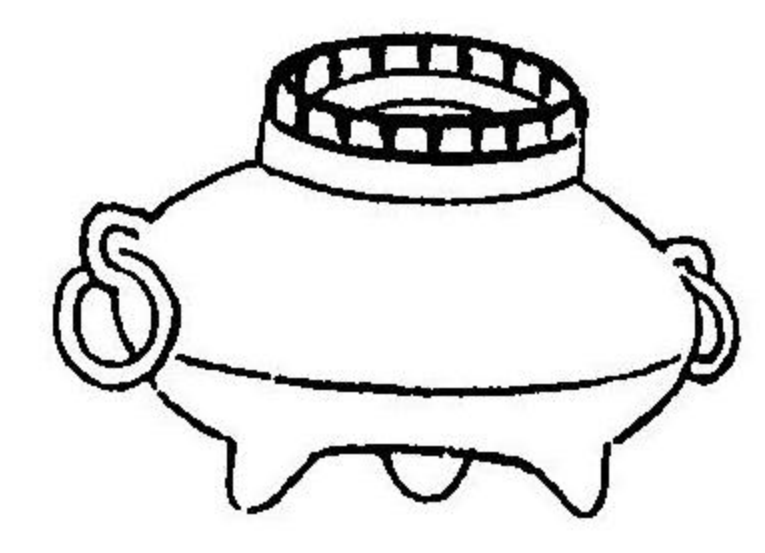
中平氏 (氏名ハ利達津野氏ト同シ) 所藏寶物



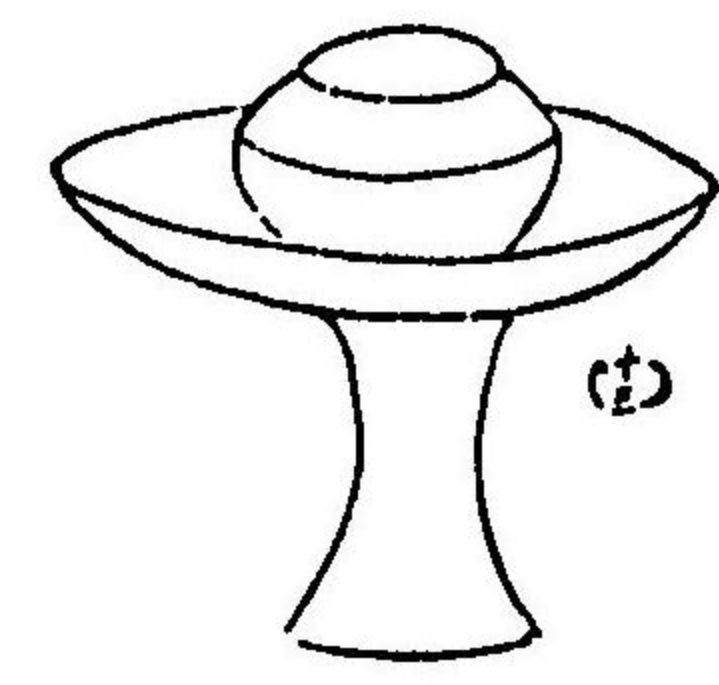
茶釜  
黒金ノ赤錆ビシモノニ個  
(相シ上面ノシト同形同大)



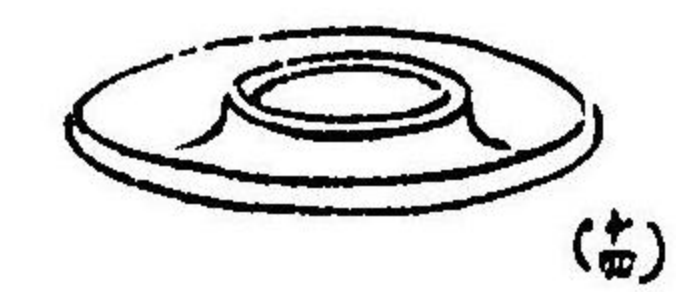
一方ニ九曜ノ紋ヲ抜ケリ



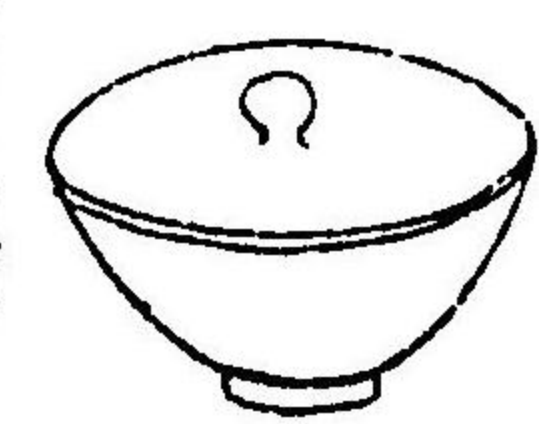
一個



全蓋



全蓋



大小ニ個



大小ニ個

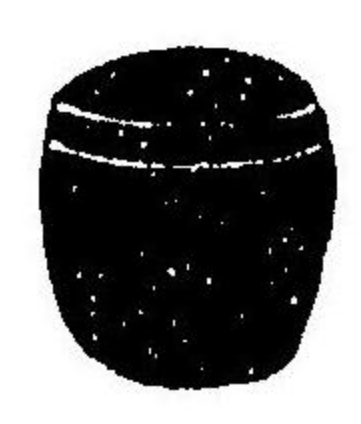
大ハ口ノ直径四寸  
小ハ全 三寸五分  
各々同大ノ蓋アリ



大小ニ個



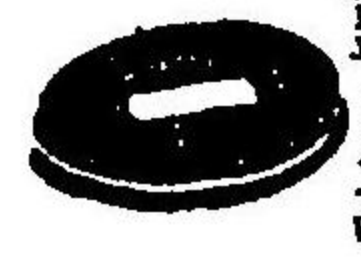
表面ニもくアリ



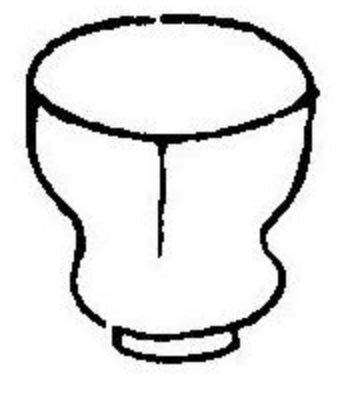
黒漆ニ塗ケリ 蓋白キハ全ク金ニシテ



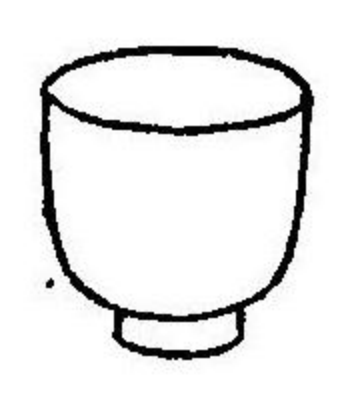
茶筌



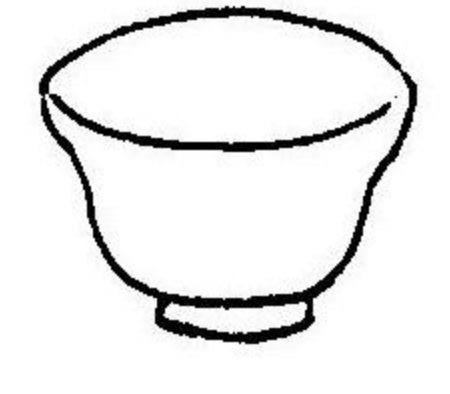
全蓋ノ上面



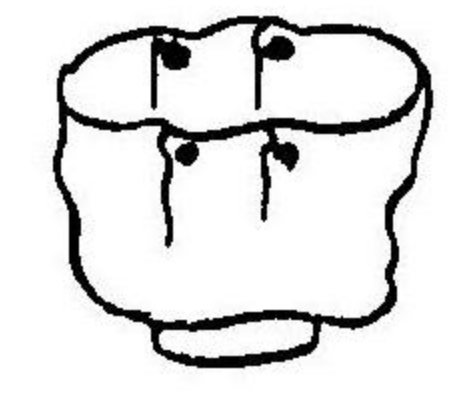
(六)



(七)



(八)



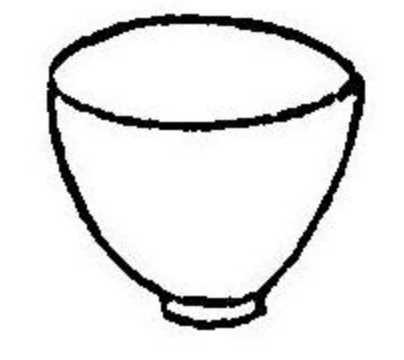
(九)

栗色ニシテ  
口ノ直径ニ寸二分  
深サニ寸二分位ナリ  
四所破目トケケク如キ蓋アリ  
器ノ内側ヨリ外側ニ遠ク

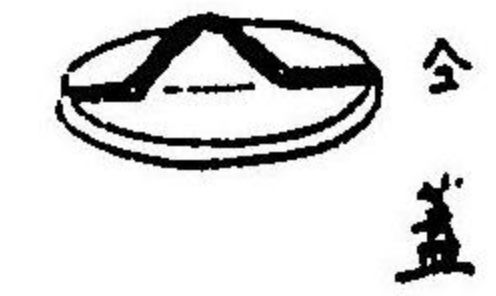
あめ色  
口ノ直径ニ寸二分 深サニ寸五分ナリ

あめ色  
口ノ直径ニ寸五分 深サニ寸五分ナリ

茶碗一個

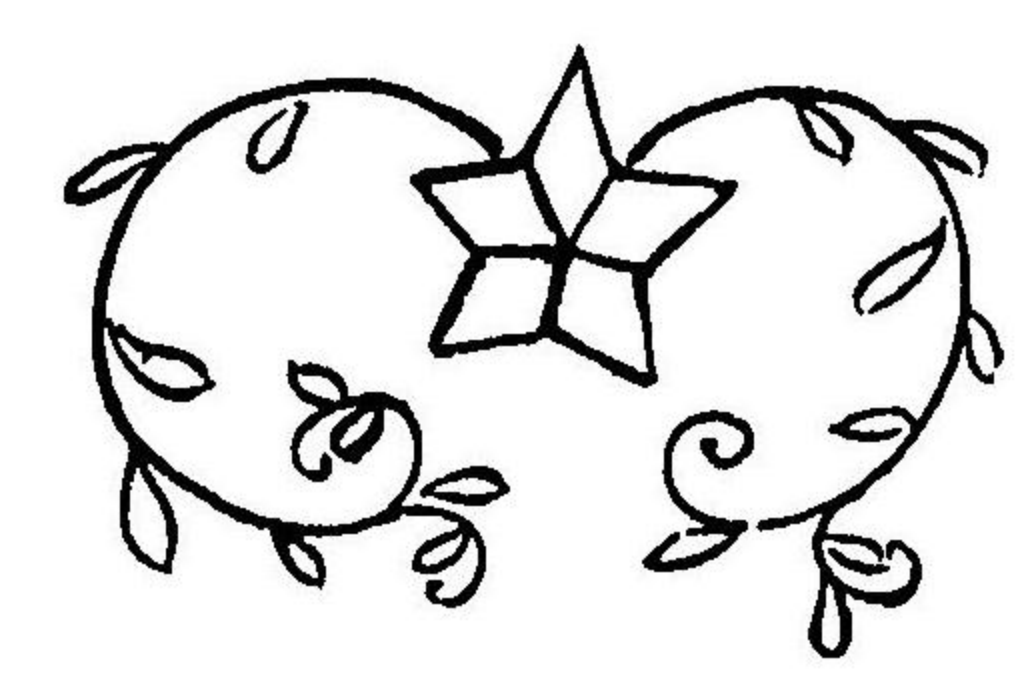


白ク垢染ニ免ル如キ地色ニシテ  
微塵埃ノ如キモノナリ



全蓋

蓋ハ割面ノ如ク木製ナリ  
茶碗ノ口ハ直径三寸五分  
深サニ寸二分位ニシテ外部  
ニ丸ノ如キ模様アリ



(一)ヨリ(九)迄ハ五寸ニ八寸角ノ(高サ五寸)箱ニ納メアリ  
箱ハモノノ見事ナル花物ナリ



父駿河守所領ノ外、新規田地五十五石ヲ領シ、親忠ニ仕ヘテ武功多シ、文祿元年壬辰三月朝鮮征伐ノタメ、諸大名出帆ス、光義元親ノ幕下ニ在リ、在韓ノ間城攻メ、合戦ニ軍功多シサレドモ之レハ記サズ、但シ元親コフイ、ナシツ、ト云フニ郡、請取リ之ヲ攻ム、コフイノ者共先達テ逃散ス、ナシツノ者共モ逃ケ散リ殘ル者共ハ殘ラズ之ヲ撫テ切ニシタリ、請取ル人數六千六人、鼻ヲ切リ擡演ニシテ役人ニ渡ス同四年歸朝ス、

大通院殿内ヲ巡覽シ、光義宅ニ於テ御一宿ナシ給ヒ光義ヲ召シテ仕ヘシメントス、光義懇辭再三命ヲ拜セズ、大通院殿之ヲ感ジ御歸城ノ後慶長九年甲辰正月十八日特ニ御書ヲ賜ハリテ褒賞ス椅原山島ヲ全領シ、公役ヲ免除ス、時ノ代金堀江木工右衛門亦書ヲ寄セテ曰ク椅原惣分山島物成八十俵有リ永ク之ヲ下シ賜フ、公帳之ヲ除ク全領知トスベキ者也竹巖院殿光義ヲ召シ、御直ニ仰セ渡サルルハ、今度大坂軍役ハ天下之大事ナル故諸大名殘ラズ將軍之御陣所ニ馳參ル、之ニ依テ國中軍民割符ヲ以テ召集レドモ高岡以西ノ十民未ダ到着セズ、聞クナラク津野家ノ遺民汝ヲ以テ表トス、汝ニ有ラズンバ主管スルコト能フベカラズ、汝義ヲ守リ仕ヘズト雖モ、大坂平均ノ間暫時ノ勞ヲ辭セズ、彼等ヲ主領シテ而シテ攝陽ニ至ル可シ、委曲ハ奉行共ノ指圖ヲ受ク可シト、殿命ノ越承畏恐レ入り奉リ候御下知次第出達仕ル可シト、御奉行中へ御請申上ケ直ニ諸勢ヲ揃ヘ出帆シテ不日大阪へ着陣ス軍中手柄多シ、維レ元和元年乙卯五月八日秀頼誅ニ伏シ、同月凱陣其後召出サレ大義トシテ金子許多拜領ス寛永十九年壬午四月廿三日椅原ニ卒ス 歳七十八 法名 一溪宗陽ト号ス、  
大通院ハ初代一豊公 竹巖院ハ二代忠義公ノ御事ナリ

### 那須信吾

那須信吾諱ハ幼名ハ虎吉長シテ信甫ト稱シ、後今ノ名ニ改メ脱藩後姓名ヲ變シテ石原幾之進ト稱ス、本姓ハ濱田氏、其先長會我部元親ニ仕フ、山内家土佐ヲ領スルニ方タリ、其國老深尾氏ニ仕ヘ高岡郡佐川村内原ニ住ス、信吾ノ父ヲ宅左衛門諱ハト稱ス母ハ金澤氏名ハ悦、信吾ハ其ノ第三子ナリ、文政十二年己丑十一月十一日内原ニ生ル六歳ニシテ父ヲ喪ヒ、兄金治諱ハノ教育ヲ受ク、其ノ兄ニ事フルヤ猶父ニ事フルガ如ク長ズルニ及ンデ相諭ハラズ、金治嘗テ郷間父兄ノ託ヲ受ケ家塾ヲ開キ公暇ヲ以テ其ノ子弟ヲ教諭ス、信吾常ニ之ヲ助ケ諫々倦マズ頗ル長者ノ風アリ然ルニ其狀貌雄偉身ノ長六尺強臂力人ヲ兼テ健歩馬ニ及フ其ノ性豪宕ニシテ氣節ヲ尚ヒ果決能ク事ニ堪ユ、最モ武事ヲ好ミ兼テ善クヌ初メ醫術ヲ山崎堂ニ學ビ、剃髮シテ信甫ト稱シ而シテ劍法ヲ古澤八左衛門ニ砲術ヲ那須橋三ニ學ブ其ノ銃ヲ執ルヤ好シク強藥ヲ裝シ立射モ姿勢ヲ變セズ、亦能ク命中ス、人以テ及バズト爲ス、然レドモ軒岐者流ニシテ糾々、武夫ノ事ヲ爲ス人或ハ之ヲ



喇叭、信吾之ヲ聞キテ嘔ツテ曰ク吾レ大七ヲ揮ヒ天下ノ病ヲ療セント欲ス何ゾ區々ノ一七ヲ拈僅ニ三分ノ錢ヲ貪ルコトヲ爲サンヤト 當時藥劑一包ノ價銀三分トス 人益之ヲ嘲リ以テ狂ト爲ス信吾以テ意ニ介セズ、蓋シ當時醫流多クハ邊幅ヲ修飾シ、婦女嫵媚ノ態ヲナシ流ヲ人ニ求ムル風アリ世之ヲ長袖者ト稱シ僧侶ト同視シテ曾テ大夫視セズ故ニ信吾此ノ言ヲナスナリ、是ヨリ先キ同郡藤原村ノ郷士那須俊平諱ハ男子ナシ信吾ノ人ト爲リヲ聞キ、其ノ女名ハニ配シ以テ嗣ト爲サント欲シ人ニ介シテ意ヲ金治ニ致ス金治則チ信吾ニ詢リ其ノ請ニ應ズ安政二年乙卯二月遂ニ婚ヲ結ブ爾來醫ヲ廢シ髮ヲ蓄ヘ信吾ト稱シ專ラ武事ヲ講ズ俊平老ユト雖モ尙ホ能ク家事ヲ理ス信吾高知ニ出テ岩崎甚左衛門ノ塾ニ入り槍法ヲ學ビ、日根野辨次ノ門ニ遊ビ坂本龍馬等ト俱ニ劍法ヲ學ビ餘暇ヲ以テ史書ヲ讀ム、其刻苦勉勵往々人ヲ驚カスニ足ルモノアリ、其左衛門深ク之ヲ器トシ未ダ數年ナラザルニ悉ク甚秘奧ヲ授ク蓋シ異數ナリ藤原ノ高知ト相距ル殆ンド二十里其間山坂多ク險路確概シテ二日程トス、信吾大劍行厨ヲ腰ニシテ長槍代而臂等試器ノ諸具ヲ肩ニシ朝ニ發シテ暮ニ達ス、練々猶ホ餘裕アリ往來以テ常トナス、初メ信吾森村ニ寓シ、一時醫業ヲ開ク、佐川森村ト相距ル八里許其ノ間謂ユル森坂アリ、上下約三里許、老樹蒼鬱午ニ日ヲ見ズ幽陰岑寂土人ト雖モ夜行スル者稀ナリ、信吾一日佐川ニ來リ歸途俊平ヲ留シテ森坂ヲ躡シ路傍一人ノ臥ス者アルヲ見ル信吾其ノ眠リヲ驚カサントヲ恐レ故ラニ徐行シテ村ニ還ル他日村人ト相會シ談偶々此ノ事ニ及ズ一人坐隅ニ在リ失笑シテ曰ク、僕嘗テ急事アリ佐川ニ赴キ、夜半森坂ヲ上ル半腹ニ到テ忽チ大入道ノ絶頂ヨリ下リ來ルヲ視ル、意ニ謂フ是レ天狗ナリト吃驚路傍ニ頓倒ス少間アリテ眼ヲ開ケハ入道既ニ過キ去ル、身蘇生スルガ如ク旬旬シテ逃レ歸ル爾來之ヲ思フ毎ニ滿身粟ヲ生ズ、君ノ談ズル所ヲ聞ケバ當時僕君ヲ以テ天狗ト爲セシナリト滿坐哄堂傳ヘテ笑談トナス、其ノ平生爲ス所人ニ異ナルモノ往々此ノ如シ文久元年辛酉九月武市半平太、河野萬壽彌等ト稱ス江戶ヨリ返リ始メテ尊攘ノ說ヲ唱フ、信吾、吉村實太郎等ト首トシテ之ニ應ジ東西奔走シ周旋最モ勉ム、二年壬戌三月浪士本間精一郎ナル者突然橋原ニ來リ實太郎ノ書ヲ信吾ニ傳ヘ面接ヲ請ヒ、且ツ半平太ニ寄スル別封ノ書ヲ附ス、是ヨリ先キ實太郎脫藩シテ防州ヲ過グ適マ精一郎ニ邂逅シ京攝問ノ近況ヲ聞キ即チ書ヲ作り精一郎ニ托シ本藩ニ渡說セシムルナリ、信吾其書ヲ受ケテ、之ヲ讀ムニ其略ニ云フ、時勢切迫スト雖モ、列藩因循義旗ヲ揚グル者ナシ、今日ノ事吾輩宜ク卒先身ヲ圖ニ致シ臣子タルノ本分ヲ盡ス可キノ秋ナリ願クハ速ニ同志ヲ叫合シテ京攝ノ間ニ來會スベシ、書外本間氏ニ接シ謀ル所アルベシト然ルニ藩法嚴ニ他藩人ノ國境内ニ入ルヲ禁ズ信吾竊ニ思フ事既ニ此ニ至ル如何トモナスベキナント乃チ密ニ精一郎ヲ家ニ留メ別封ノ書ヲ携ヘテ高知ニ詣リ半平太ニ事情ヲ告グ書ヲ傳フ、半平太之ヲ披キ見ル亦猶ホ前書ノ意ナリ、半平太乃チ萬壽彌ヲシテ信吾ト俱ニ行キ精一郎ニ會セシム、信吾乃チ萬壽彌ヲ伴ヒ家ニ還リ精一郎ニ應接ス、徹頭徹尾圖藩戮力寡君ヲ奉ジテ

勤王スルノ意ヲ以テス、精一郎縱橫抗辨スト雖モ信吾萬壽彌ト半平太ノ諭示ニ基キ前論ヲ執テ服セズ精一郎遂ニ去ル、萬壽彌モ亦高知ニ還ル信吾等々高知ニ赴ク途密ニ其ノ舊主深尾鼎ノ幽居ヲ訪フ初メ鼎贈從一位山内容堂舊幕府ノ隨ヲ蒙リ幽居スル事ニ關シ其ノ國老ノ臣家ナルヲ以テ佐川ノ館ヲ退隱シ領内ノ西郡長者村ニ幽居ス、信吾其ノ家宰兄金治ニ介シテ鼎ニ見ヘ告グルニ時勢ヲ以テシ且ツ他日復職一藩ノ爲メニ盡力アラントヲ願ヒ舊誼ヲ謝シテ別ヲ告グ退テ金治ト前途ノ事ヲ謀リ訣別シテ高知ニ抵ル而シテ半平太等ト大ニ計畫スル所アリ、當時參政吉田元吉藩政ヲ擅ニシ、國人皆ナ恨ム半平太尊攘ノ說ヲ唱フルニ方リ先ツ元吉ヲ見テ天下ノ形勢ヲ說キ、藩政ヲ改革シ勳王スルコトヲ勸ム、元吉暮旨ヲ遵奉シ管ニ王事ニ勤勞スルノ意ナキノミナラズ時ニ或ハ朝廷ヲ侮蔑シ黑齒ノ公卿何ニ事ヲカ成サン等ノ言アルニ至ル、有志士之ヲ聞ク者皆痛憤直チニ之ヲ誅シ藩政ヲ改革スルノ議熾シニ起ル然ニ事ノ重大ニ關スルヲ以テ敢テ發セズ百方計畫之ヲ論斥セントス、而シテ滿應皆ナ元吉ノ黨ニシテ如何トモ爲ス能ハズ、遂ニ誅除ノ議ニ決ス是ニ於テ信吾、安岡嘉助、大石圓藏等三人刺客ノ撰ニ當リ相共ニ連日元吉ノ舉動ヲ窺フ、四月八日夜其ノ退城ノ期ヲ途ニ要シ信吾刀ヲ拔キ呼ンデ曰ク、元吉今夜國人ノ爲メ汝ニ一刀ヲ喫セシムト進ンデ之ヲ擊ツ是ノ夜適々降雨刀鋒其傘ニ隙ヘラレ創淺クシテ斃レズ元吉刀ヲ拔テ抗ス、凡三四合、嘉助、圓藏加功シテ之ヲ斃ス、信吾其ノ首ヲ截リ刀ヲ渠水ニ洗ヒ首ヲ提ケ徐々去テ城外思案橋畔ノ觀音堂ニ抵ル、同志三五人來リ待ツ、則チ首ヲ付度シ三人裝ヲ變シ亡命ス、伊野ノ渡口ニ抵ル時已ニ丑牌ヲ過グ、四顧寂寥人ナク船橫ハル則チ津戸ヲ叩キ給イテ曰ク、長濱雪蹊寺灌佛會ニ喪シ知ラズ識ラズ此ニ至ル幸ニ一舉手ノ勞ヲ辞スル勿レト津人諾シ來リテ舟ヲ操ル三人川ヲ渡リ加茂村六社前ノ堤上ニ到レバ則チ天明ク此所ニ小憩シ互ニ衣上血痕ノ有無ヲ檢シテ發シ女川村ニ到リ一店ニ入り又給イテ曰ク、横倉神祠ニ詣ラントスト、乃チ朝飯ヲ喫シテ發シ太平村ヲ經テ御嶽絶頂ニ登リ舊郷佐川ヲ瞻望ス、山間ノ晚櫻山頂ノ殘雪ト相映ジ、其景頗ル美ナリト雖モ心樂マズ、森坂ヲ躡ヘ昔時往來ノ事ヲ思ヒ、森村ニ達ス、村ニ舊知多シ訪ハント欲シテ能ハス、野店ニ午餐シ、高瀬村ヲ經テ潛行シ、別府、徳道ノ關門ヲ出テ、黃昏伊豫國岩川ニ達シ一宿ス、此ノ日經ル所垂ント三十里許、十日久萬町ニ宿シ、十一日馬ヲ借テ松山城下ニ午後飯シ、未牌後三津ノ濱ニ達ス、恰モ便船將サニ發セントス、即チ附搭シテ發ス、風潮惡キニ會ヒ諸所ニ泊シ、十五日周防國三田尻ニ着ス、十六日下ノ關ニ轉ジ白石正一郎ヲ訪ヒ、時勢ノ如何ヲ問フ、正一郎曰ク、薩摩侯ノ實父島津三郎上京數日前此ノ所ヲ過グ舊例ハ陸路ヲ用ユ、今回ハ乃チ海路火輪船ヲ用ユ、且ツ儀從全ク軍備ノ式ニ準ズ、長藩士モ亦之ト前後既ニ發ス、君輩即時追隨ストモ尙ホ恐クハ機會ニ投ズルヲ得難カラシ、但海上風潮ノ使否ニアルノミト、信吾等爽然自ラ失シ空ク滯スルコト兩日、十九日便船ヲ得テ發ス、海上風波惡ク廿四日讃岐國多度津港ニ入りテ泊ス、信吾等夜ニ乘シ象頭山神祠



ニ詣リ、便風ヲ轉リ、廿五日朝船ニ歸ル則チ便風ヲ得テ帆ヲ揚ゲ廿七日曉、攝津國和田港ニ入ル、則チ上陸シ、湊川ノ古戰場ヲ一覽シ、楠公ノ墓ヲ拜シ、皇運ノ挽回ヲ禱リ、其夕大坂ニ抵ル、抵レバ則チ廿三日伏水一擧ノ事既ニ敗レ薩長有志四散寅太郎宮地宜藏等縛セラレ、ヲ聞キ、大ニ失望シ、住吉神祠ニ詣リ夜ニ乘シ本藩陣營ノ同志士ト垣ヲ隔テ、密語シ、京攝間ノ近況ヲ詳ニシ、即チ旅亭ニ潛匿ス、事既ニ在營俗吏ノ探知スル所ト爲リ、密ニ追捕ヲ議ス、翌早同志士密ニ之ヲ報知ス、即チ大坂ニ歸リ形ヲ變シ夕ヲ待テ淀川ニ乘シ京師ニ上ル翌日長藩久坂玄瑞、佐世八十郎、後前原ノ寓ヲ訪ヒ事情ヲ話ス、二十ノ周旋ニヨリ其ノ藩邸ニ潛匿シ姓名ヲ變ジテ石原幾之進石ハ石休場原ハ橋原ト稱ス、初メ元吉ノ政權ヲ弄スルヤ、滿應皆其黨ニシテ住吉陣營モ亦同志二三士ヲ除ク外信吾等ヲ追捕シテ己レノ功ヲ立テント欲シ探偵城モ密ナリ、信吾等長藩邸ニ在ル勿餘、早ク俗吏ノ知ル所ト爲リ福富健次其部下五六十人ヲ率キ長藩邸ニ迫リ捕縛セントス、同志士之ヲ玄瑞ニ報知ス、玄瑞乃チ薩藩士海江田武次後信吉井中助後友ト信吾ヲ保管スルヲ謀リ、五月十六日信吾等玄瑞、八十郎、堀真五郎ニ誘ハレテ武次ノ旅寓ニ到ル、信吾等武次ニ向ヒ其ノ厚意ヲ謝ス、武次曰ク今者ハ則チ探索定メテ嚴密ナラン萬一追捕此コニ及ブアラバ余亦一死以テ與ニ防禦スベシ、未タ其期ニ至ラズ宜シク心ヲ安ニスベシト乃チ新衣ヲ給シ故衣ニ換ヘシメ野猪ヲ羹ニシ酒飯ヲ饗ス、信吾等其ノ待遇ノ感懃ニ驚ク寄主奴婢ニ至ルモ皆善ク待遇シテ尊敬ス、蓋シ武次ノ戒ムル所ナリ、廿二日武次、中助事ヲ以テ江戸ニ赴ク、廿三日信吾等錦小路薩藩邸ニ移ル武次ノ東下セントスルヤ信吾等ノ旅寓ニ留ルヲ願慮シ之ヲ藤井良節ニ委託シ去ル故ニ邸吏時々來リテ慰問ス其禮佳賓ヲ遇スルカ如シ信吾日夜史書ヲ讀ミ消遣ス七八月ノ交本藩ノ同志平井収二郎等山内土佐守ニ屬シ京師ニ出ル者往々密ニ來リ訪ヒ相與ニ時事ヲ謀ル初メ信吾心ヲ脫藩ニ決シ家ヲ出テ高知ニ赴クヤ事ノ機密ニ涉ルヲ以テ父妻ニ告ケス俊平其脫藩ヲ聞キ且ツ恨ミ且ツ歎ス既ニシテ大ニ感懃シ書ヲ作り槍術秘傳一軸ヲ添ヘ信吾ニ寄送シ今後身ヲ以テ國ニ報シ父妻ノ事ヲ意ニ介スル莫ラシム信吾書ヲ得テ感泣是ヨリ屢々書ヲ俊平金治ニ寄セ京師ノ形勢ト交際ノ愉快トヲ報シ一ハ以テ其ノ老父ノ情ヲ慰シ一ハ以テ國藩勤王ノ實効ヲ奏センコトヲ勤ム三年癸亥二月吉村寅太郎本藩ヨリ來リ信吾ヲ薩邸ニ訪フ寅太郎去歲縛ニ就キ護送セラレテ土佐ノ獄ニ在リ客冬大赦放免セラレ乃チ暇ヲ乞ヒ京師ニ上ルナリ相與ニ臂ヲ執リ郷里ノ事情ヲ談シ天下ノ形勢ヲ論ス是ヨリ先キ侍從中山忠光深ク王室ノ式微ヲ憂ヘ朝野ノ間ニ奔走シ頗ル有志者ノ望ヲ得タリ寅太郎屢其門ニ出入シ大ニ其ノ知遇ヲ得信吾モ亦時々寅太郎ト與ニ入テ相謀ル所アリ忠光攘夷ノ先鋒ヲ爲サント欲スル久シ八月十二日車駕大和ニ行幸シ神武ノ陵ヲ拜シ伊勢大廟ニ於テ親征ヲ議セントスルノ詔ヲ諸藩ニ傳フ朝野愕然信吾寅太郎藤本津之助名眞金等ト相謀リ期ニ先タテテ忠光ヲ首領ト

爲シ義兵ヲ大和ニ舉ケ乘輿ヲ奉迎シ以テ親征ノ先鋒ヲ爲サンコトヲ誓フ十四日其徒五十人餘忠光ヲ奉ジ夜ニ乘ジテ京師ヲ發ス十五日朝大坂ニ達シ常安橋坂田屋ニ憩フ同志ノ相約スル者前後來リ會ス薄晚川口ヲ發シ舟中各自髮ヲ截テ海ニ投シ血ヲ嗽テ盟ヲ爲ス夜半和泉國堺港ニ入り陸ニ上リ旅亭ニ投シ結束シテ河内ニ赴ク信吾時ニ軍監タリ十七日五條代官鈴木源内ノ館ヲ襲ヒ源内及ヒ部下五人ヲ戮シ其首ヲ梟シ不庭ノ罪ヲ鳴ラス遠近爲メニ震懾ス將ニ進ンテ大ニ軍勢ヲ張ラントス十九日忽チ京師ノ報ニ接ス曰ク昨日朝議一變親征ノ議頓ニ寢ミ中納言三條賢美等七卿西奔長藩ニ投ス幕府紀伊藩堂井伊及ヒ隣國ノ諸藩ニ令シ忠光ヲ討セシムト軍勢ニ大ニ沮ス廿日信吾忠光ノ命ヲ奉シ高取城ニ入り城主植村駿河守ニ説クニ鞍馬二頭米百斛槍銃甲冑大小刀各百箇ヲ徵スルヲ以テス駿河守答テ曰ク小藩薄力即時命ヲ奉スル能ハズ、但馬二頭銃槍自衛聊以テ赤心ヲ表ス米百斛轉テ當サニ獻スベシト信吾其ノ證書ヲ帶ビ馬銃鎗ヲ取り還テ復命ス忠光大ニ悅フ是ノ時ニ方リ諸藩ノ大兵來リ攻ム忠光陣ヲ諸所ニ轉シ防キ戰フ信吾常ニ長槍ヲ揮フテ奮闘シ勇名一時ニ冠タリ九月七日紀兵三百餘天野ニ陣ス信吾久留米ノ士酒井傳次郎ト與ニ農兵三十許ヲ率キ夜ニ乘ジテ之ヲ襲ヒ、火ヲ陣頭ニ放チ之ヲ擊ツ紀兵狼狽シテ敗走ス此夜銃器彈藥ヲ得ル最多シ然ニ我カ兵創ヲ病ム者日ニ多ク糧食亦乏シ而シテ敵ハ則チ長圍持久ノ策ヲナス乘寡遂ニ敵シ難シ忠光乃チ衆ト相議シ一旦遁レ去テ後陣ヲ爲スノ策ヲ決ス、二十三日兵器行李ヲ點檢シ其ノ大半ヲ燒キ各々輕裝夜雨ヲ冒シテ伯母谷ニ入ル、廿四日信吾等四十餘人忠光ニ陪シ伯母谷ヲ發シ和田ヲ經テ鷺家口ニ抵ル時已ニ暮夜各天誅ノ二字ヲ以テ暗号ヲ定メ暗ヲ突テ進ム山ヲ繞リ水ヲ渡リ高所ニ到リ下シ瞰レバ則チ無數ノ炬火燭光天ヲ燭シ銃劍ノ影閃々タリ蓋シ井伊藤堂ノ兵要衝ヲ扼スルナリ忠光以下相與ニ死ヲ決シ先ツ銃ヲ發スル三四九短兵直下縱橫亂擊吶喊ノ聲山嶽ニ震フ、敵兵之カ爲メニ披靡ス我兵勢ヒニ乘シテ之ヲ殺ス宛モ草ヲ難クカ如シ丸盡キ刀折レ繼テ木石ヲ擲ツ敵ノ死傷無算我カ兵モ亦大半ヲ喪フ此戰ヤ信吾井伊藩ノ隊長大館孫右衛門ヲ四條屋某ノ店前ニ斬リ進ンテ碓屋喜助ノ門外橋畔ニ到ル井伊藩士佐藤良三郎碓屋ノ戸隙ヨリ銃ヲ以テ狙撃シ、信吾ニ中ツ信吾重傷ヲ負フト雖モ尙ホ良三郎ヲ追フテ碓屋戶外ニ抵リ遂ニ斃ル年三十有五此際同志一人名不馳セ來リ手槍ヲ揮ヒ良三郎ノ右肋ヲ刺ス創淺クシテ死セス逃レテ屋後ニ出ツ偶マ其ノ家人等亂ヲ避クル爲メニ用キタル所ノ小梯ヲ遺ス板扉ヲ踰ヘ危急ヲ免レ去ル信吾ノ戰沒スルヤ其ノ衣襟ニ姓名ヲ標スル小布片ヲ貼シ且ツ金百兩許ヲ懷ニス悉皆井伊藩兵ノ収ムル所トナル九月廿八日井伊藩其ノ首級ヲ京師町奉行永井主水正二送ル其ノ支體ハ村吏之ヲ法全寺山隅ノ楡林中ニ埋ム村人等哀慕崇敬ノ餘一片ノ碑ヲ建テ其ノ魂ヲ慰ス遠近來拜スル者多ク香花常ニ絶エス其翌秋暮吏來リ見テ大ニ噴リ墓ヲ毀テ碑ヲ河中ニ投セシム其ノ後一士人來リ從僕ニ命シ碑ヲ水底ニ搜索シテ之ヲ舊處ニ復シ一書ヲ留メテ去ル其ノ文ニ云フ今日墓碑復立ノ舉固リ村吏ノ闕スル所ニアラス西國ノ士人來テ之ヲ爲ス十



二月十八日高木左京ト明治元年信吾ノ姪田中光顯京師ニ在リ悲田院某關スル賊吏ナリ。ニ就テ大和義舉士ノ首級洛西ノ刑場ニ瘞埋シ在ルヲ知り官ニ請ヒ五月廿四日某ヲ以テ導トナシ其地ニ抵リ竹林中ニ入ル死骨累累堆ヲナシ或ハ血痕未ダ乾カサル者左右ニ狼藉タリ慘澹ノ狀視ルニ忍ビズ陰風惡臭ヲ吹キ來ル夏ト雖モ寒粟肌ニ生ス鼻ヲ掩フテ行ク數十歩傍ニ數片ノ瓦ヲ排置スル所アリ某指シテ曰ク即チ是ナリト光顯試ニ瓦片ヲ執テ之ヲ見ルニ裏面ニ某々ノ姓名ヲ朱書ス中ニ那須信吾ト署スル者アリ、之ヲ撥ケバ一小甕ヲ得タリ甕口地面ト均シ甕中一小木片ヲ置キ又姓名ヲ墨書ス而シテ白墨ト食鹽トヲ混和シ之ヲ密填ス徐々之ヲ剔抉シ去リ始メテ首級ノ髣髴ニ至ル髣髴亦木片ヲ付シテ姓名ヲ識ルニ遂ニ甕ヲ出タシ首級ヲ傍流ニ洗滌シ之ヲ熱スルニ死後六星霜ヲ經ルト雖モ顔容宛然生前ニ異ナラス但其ノ異ナル所ハ血色ヲ失フノミ而シテ髣髴稍ヤ長ス亦以テ連日連夜苦戰死ニ死ニ至ルノ狀ヲ想見スベシ則チ此ノ日ヲ以テ洛東靈山ニ改葬シ更ニ碑ヲ建テ不朽ニ傳フ十四年五月朝廷勅シテ靖國神社ニ合祀セシム、十八年八月同志相謀リ南海忠烈碑ヲ高知縣大島神社ノ側ニ建テ其ノ姓名ヲ碑陰ニ勒ス、皇上特ニ金ヲ賜ヒ其ノ費ヲ助ク廿四年十一月十七日特旨ヲ以テ從四位ヲ贈ラル嗚呼信吾初メ其ノ志仁術ヲ以テ人ヲ醫スルニ在リ後チ長槍大劍ヲ以テ國ヲ醫スルニ在リ不幸ニシテ其ノ志ヲ得スト雖モ死後屢々恩榮ヲ辱クス謂ハユル身ヲ殺シテ仁ヲナス者其レ亦恨ミナカルベシ

### 吉村寅太郎

吉村寅太郎名ハ重郷土州ノ士ニシテ勇剛ノ壯士ナリ、天保八年四月十五日ヲ以テ全國高岡郡芳生野村ニ生ル父ハ太平野村ノ大庄屋母ハ雪ト云フ、寅太郎ハ實ニ其長男ナリ幼ヨリ才器人ニ勝グ、漸ク八歳ニシテ全村ノ郷士長山十次郎ノ門ニ入り文學ヲ學ブ弘化四年十二歳ニシテ始メテ全部北川村庄屋ヲ命ゼラレ、安政元年全部須崎郷浦庄屋ニ全三年全部下分村庄屋ニ全四年全部橋原村番人大庄屋ニ歷任ス、然ルニ嘉永癸丑、安政甲寅ノ際ヨリ外患屢々切迫シ殆ンド我國家ノ大典ヲ破ル是ニ於テカ坂本龍馬、其他天下ノ志士ト交リテ力ヲ時事ニ致ス、時ニ文久元年三月八日高知ヨリ歸リテ「我今藩命ヲ受ケテ薩藩ニ差立テラル」ト稱シ酒肴ヲ設ケテ親戚故舊ト訣別シテ橋原ヲ出立ス、全夜豫州土居村ニ到リ矢野氏ニ泊シ翌日八幡濱ニ出デ、此處ヨリ便船ニ乘ジテ大阪ニ向ス、既ニシテ大阪ニ上陸ス爾後京阪間ヲ往來シテ諸藩ノ志士ト相交リテ國事ニ盡粹セリ全年五月突然藩吏ノ爲メ京師ニ捕ハレ、直ニ高知ニ護送セラル續テ獄ニ投ゼラル、全年十二月二十五日罪ヲ

赦サレテ出獄ス即十月橋原ニ歸ル、文久二年正月四日再ビ脱藩シテ諸藩ノ同志ト四方ニ奔走シテ國事ヲ謀ル、時ニ京師ニ藤本眞金ナル者アリ天下ノ義士ヲ招キテ酒宴飲ノ間ニ胸襟ヲ披キテ相共ニ時事ヲ談ジ武事ヲ論ジ終ニハ協心盡力以テ君國ノ爲メニ盡サントス、寅太郎即京師ニ詣リテ眞金ト共ニ同志ヲ叫合シテ尊攘ノ實行ニツトム、又屢々德大寺、一條ノ諸公卿ニ伺候ス、適々文久三癸亥年八月朝廷大和行年及夷狄親征ノ議ヲ決スルヤ寅太郎「先ヅ奸邪ヲ除キテ君臣ノ名分ヲ明カニシ然シテ後ニ外夷ヲ攘フベシ」トノ眞金ノ議ヲ贊シテ遂ニ「續三十三本」寅太郎等軍司トナリテ同志三十八人ト共ニ侍從中山忠光卿ヲ奉ジテ元帥トシ京都ヲ脱シ十四日夜ニ乘ジテ淀川ヲ下リ十五日大阪ニ達ス大阪ヨリ河内ヲ經テ全月十七日大和ニ入り、寅太郎自ラ槍隊ノ隊長トナリ、砲隊長半田門吉ト與ニ同志數人ヲ率テ五條代官所ニ侵入リ代官鈴木源内以下五人ノ奸吏ヲ襲ヒ、且ツ財寶ヲ納メテ近郷ノ細民ヲ賑恤ス、以テ義兵ノ首途ヲ祝ス、衆爲メニ初躍ス、翌十八日討幕ノコトヲ公言シ、源内以下ノ首ヲ梟ス、且ツ近郷ノ里吏ヲ召集シテ曰ク「我等ハ義兵ヲ擧ゲテ皇軍ノ先驅タラント欲ス故ニ先ヅ奸邪ヲ誅シテ出征ノ血祭ヲナシタルナリ、今日以後ハ暴政ヲ改メ年貢ヲ半減スベシ汝等歸テ此ノ山ヲ百姓ニ懇諭シテ安堵セシムベシ」ト里吏皆之ヲ德トシテ感謝ス、此日和州ノ士、乾十郎等馳セ加リ、一日モ早ク大道ニ出デントラス、ム、數日ニシテ諸方ヨリ來リ應ズル者殆ド千人ニ近ク、爾後近畿諸藩ノ兵ト戰フテ勝タザルコトナシ、世稱シテ天誅組ト云フ、近畿ノ奸吏邪黨爲メニ戰粟シテ怒ヲ逞スルモノナシ、己ニシテ朝議一變(薩會)ノ兵中川宮ノ令ニヨリ有栖川宮ニ發砲シ續長藩御守宮城守衛ノ任ヲ解キ、大和行幸ノ儀モ亦御見合セトナリ、三條卿ヲ初メ七卿京師ヲ落給フト聞キ、暫ク十津川郷ニ籠居シ、機ヲ見テ四國九州ニ出デ潛ニ再舉ヲ圖ラントセシガ、既ニ十津川ノ郷兵逃散セルヲ以テ果サズ、全廿一日天ノ辻ニ屯ス、寅太郎、那須信吾ト共ニ津藩ニ使シテ其隊將ヲ諭ス、數日ニシテ高取城主植村駿河守答テ曰ク「我小藩ニシテ使命ヲ全フスル能ハズ今謹テ軍馬二頭ト兵器若干續三十三本」トヲ獻ズ「ト又高野ノ山徒モ一心ナク應援スベシト返答アリ、我軍再ビ津ノ隊將ニ諭書ヲ送ル、彼其書ヲ得テ大ニ怒リ井伊、藤堂、紀州、郡山ノ諸藩ト兵ヲ牒合シ、天ノ辻ニ迫ル皆謂ラク、此ノ戰ヤ必ズ大事ナリ、然レモ事安ニ及ブ終ニ免ルベカラズト總督中山忠光ニ説キ去ツテ西南諸州ノ義徒ト力ヲ戮セテ再舉ヲ計ラシム、忠光聽カズ、是ニ於テ寅太郎、眞金等ト兵ヲ部署シテ奮闘激戰ス、全月廿八日我軍高取城ヲ攻撃ス、十津川ノ兵、暗中敵ノ哨兵ト覺シキ者數十人ノ來ルヲ認ム、近ヅキ見レバ馬上提燈ヲ提ケ威風凜凜乎タル一將アリ、寅太郎謂ラク實ニ得難キ好敵ナリト、進ンデ槍ヲ捻リ戰ヲ挑ム、只一突ニテ馬ヨリ落シ猶突クコト三回ニ及ブ鮮血淋漓タリ、然レモ非凡ノ勇將ナリ忽チ太刀ヲ振ツテ寅太郎ヲ撃ツコト數刀、兩雄互ニ鎗ヲ削ルコト少時ニシテ敵將ノ力ヤ盡キニケン將ニ寅太郎ノ爲メニ



首ヲ搦カレントス其一殺那敵彈忽來ツニ寅太郎ノ腹下ヲ貫ク、傷重クシテ甚危篤ナリ此時、中垣小川ノ二士ハ敵兵ヲ追撃シテ火ヲ土佐町ニ放タントス折節吉村氏ノ負傷ヲ聞キ勿々引返シテ互ニ之ヲ救助ス、翌廿九日親籠ヲ履フテ五條ニ退キ療養ヲ加フ、漸クニシテ僅ニ死ヲ免ル、ヲ得、遂ニ二三士ト相携ヘテ天ノ辻ニ退シガ我同志輩盡クルニ垂トシテ潰散セリト聞キ吉野郡鷺家村ノ民家ニ於テ自殺ス時ニ文久三年九月廿二日、年ヲ享クル二十有七寅太郎ノ遺詠多シ今左ニ其二ヲ示サン

逸題

櫻樹未開柳眼昏  
○快心呼友酒終宵  
○一家一同何足惜  
○宜使本朝為本朝

題しらす

曇りなき月を見るにも思ふ哉あすはかばねの上にてるやと、

題しらす

ほととぎすかへれくどなく聲ははるかに北の雲井なりけり、

鷺家村にて血戦の砌

秋なればこそ紅葉はもちらすなり、わが討太方の血げぶりを見よ

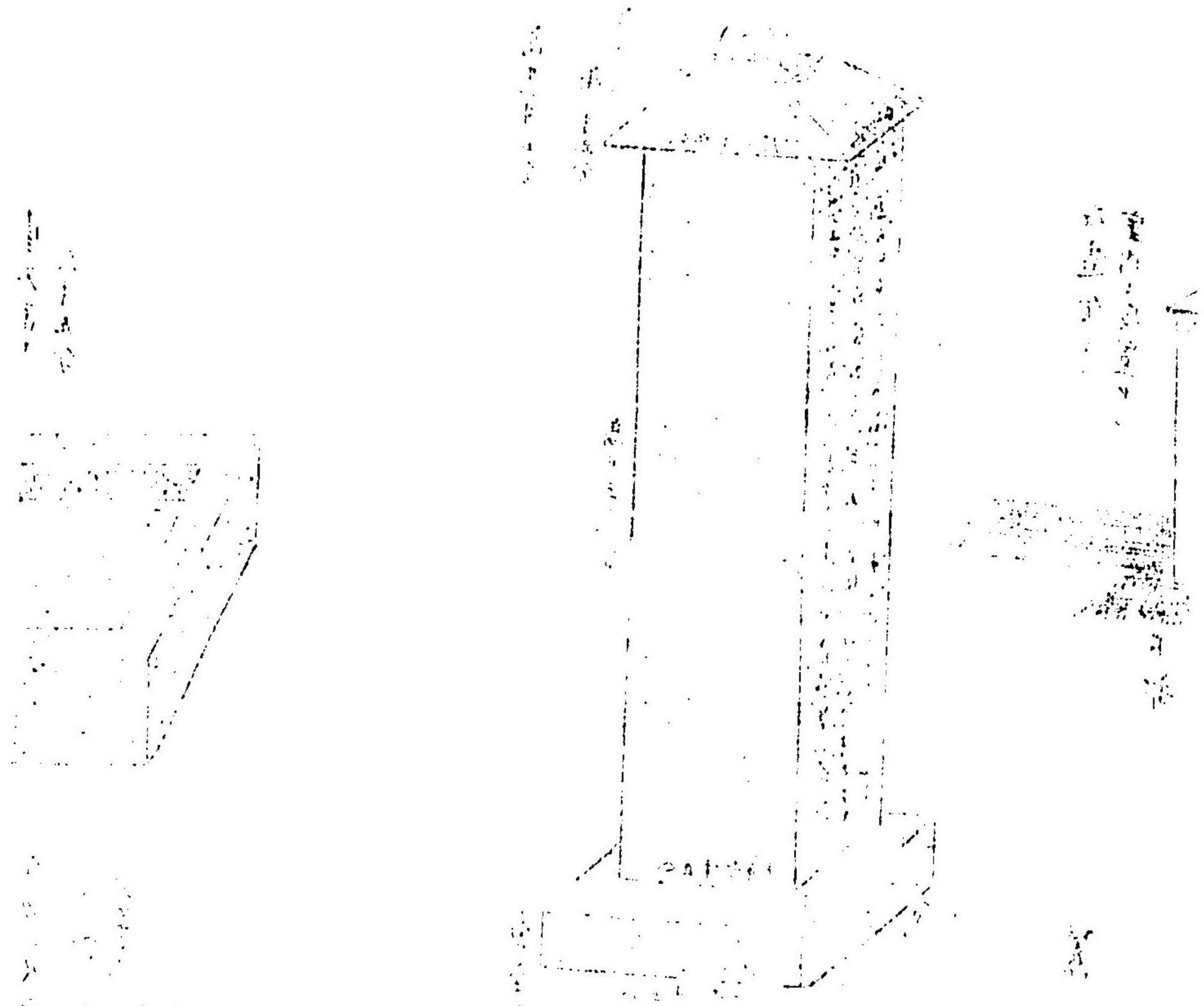
### 吉村氏考案ノ石造金庫

吉村寅太郎ハ經濟ノ才ニ長シタル人ナリ嘗テ橋原ニ里正タルヤ石造金庫ヲ工夫シテ財ヲ集ムルノ法ヲ示シ民ノ貯蓄心ヲ養ヘリ予昨已未之季冬國轉邑牒來此地以後召百姓示貯財謀不平也後開橋原里正徃々貧而貧民甚者國民之聚財故里人云大里正者盜也不絶慙惡以造石櫃重圖欲立聚法後人可慎勉之亦無使後人圖爲此謗矣

文久元辛酉五月造 里正 吉村 於菟謀言

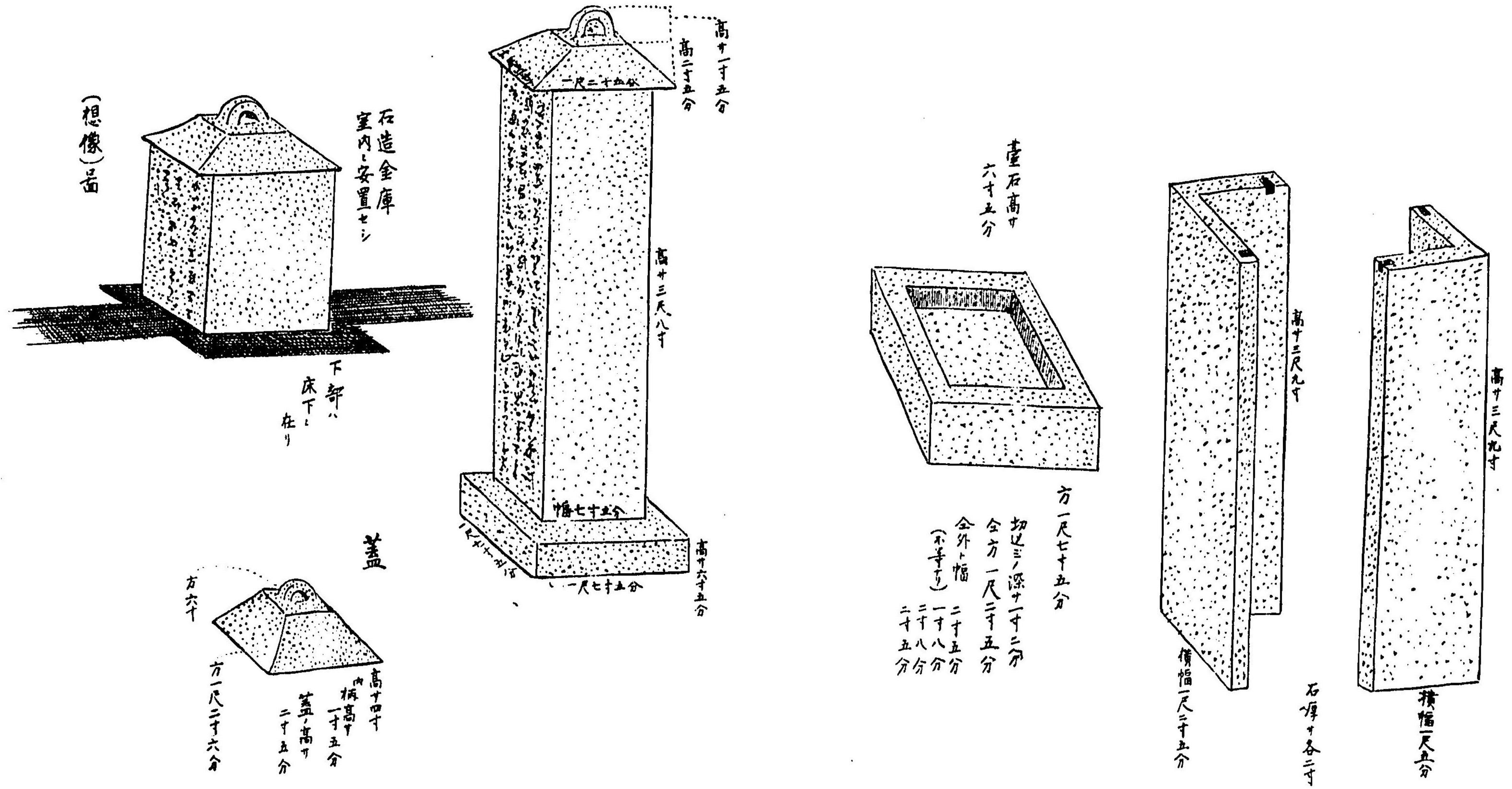
右ノ文ハ寅太郎自ラ金庫ノ側面ニ刻セシメタルモノニシテ口内ノ文字刻字磨滅シテ讀ミ難キモノ或ハ疑ハシキモノナリ。

金庫(各藩蔵分)圖





圖(合組部各)形全





前田繁馬

前田繁馬ハ天保六年五月ヲ以テ高岡郡松原村ニ生ル全村庄屋前田是助ノ孫ニシテ父ヲ廣作ト稱ス繁馬ハ其ノ長子ナリ幼ヨリ學ヲ好ミ祖父是助ニ就テ學ブ年十八ニシテ全郡橋原村郷士那須俊平ニ從ヒ劍術ヲ學ブ文久三年全郡北川村郷士前田常五郎三男要藏ノ臨時御用ヲ以テ上京ノ命ヲ受クルニ及ビ要藏ニ固請シテ其ノ從者トナリ上京ス、在京中吉村寅太郎那須信吾其他諸藩ノ志士ト交通シ、後要藏ハ御用濟ヲ以テ歸國セシモ、繁馬ハ猶ホ止マリテ益々勤王ノ志ヲ立テ寅太郎等ガ中山忠光卿ヲ奉ジテ大和ニ義兵ヲ舉グルヤ繁馬モ亦其軍ニ加リ各所ニ轉戦シテ數々殊功ヲ建ツ文久三年九月廿日藤堂兵ニ追撃セラレテ奮闘激戦大ガカムルト雖、衆寡敵セズ遂ニ初瀬町ニ於テ戦死セリ明治三十一年七月四日特旨ヲ以テ正五位贈ラル、

中平定雄

(晩年專龍之助ト稱ス)

中平定雄ハ天保十三年寅四月三日ヲ以テ高岡郡橋原村ニ生ル、幼名ハ喜代次後龍之助ト改ム脱藩後姓名ヲ變ジテ本山勝八ト呼ブ舊高知藩ノ地下浪人ニシテ祖父ヲ八内定房父ヲ左平定好ト云フ母ハ中越氏名ハ定雄ハ其ノ長子タリ幼ニシテ文武ニ志シアリ、十歳ニシテ全村大庄屋松山馬藏後柿右衛門ノ門ニ入りテ讀書ヲ學ビ十三歳ヨリ全村郷士那須俊平ニ就テ劍法ヲ修ム、此時ヨリ名ヲ龍之助定雄ト改稱ス、又正哲ト稱スノ門ニ入りテ讀書ヲ學ビ十三歳ヨリ全村郷士那須俊平ニ就テ劍法ヲ修付キ藩士中平保太郎定晴ニ其御供ヲ命ゼラル、龍之助請フテ其從者トナリ全年六月廿八日出發翌月十二日着阪八月廿五日京都ニ達ス、然ルニ全年十月三條實美卿攘夷御催促ノ御勅使トシテ江戸表ニ御下向ニツキ、定晴等ニ同卿ニ扈從スベシトノ命下ル即龍之助モ亦從フ、之ヨリ先キ諸藩勤王ノ士併起リテ尊攘ノ議ヲ唱フルヤ、龍之助モ既ニ其班ニ在リ則江戸滞在ス、遂ニ同志片岡盛重、松山鶴助、中平保太郎、市川次平、中平龍之助、片岡左太郎、谷脇清馬、片岡團四郎、全孫五郎、千屋菊次郎、全金策等ト相謀リテ「速ニ尊攘ノ實ヲ舉ゲラレンコトヲ藩主ニ建白スト雖、容易ニ容レラザルノ模様アリシカバ全年十一月三日飯宅シ密ニ武具ヲ用意シ一通ノ書ヲ鏡櫃ニ遺シ置キ、田所壯輔、尾崎幸之進、安藤眞之助等ト與ニ脱走シテ伊豫土居村ニ到ル偶井手正章ニ會ス、即後事ヲ談ジテ別ル、全八日伊豫坂石ニ宿シ、九日長濱ニ達ス、十日此處ヨリ便船ニ塔シ十四日防劬三田尻ニ上陸、十六日茶屋殿ニ投ズ偶々事アリ龍之助ヲ密使トシテ伊豫ノ國土居村ニ差立テラルル則、全村矢野杏仙ノ邸ニ抵リ井手正章ヲ呼ブ、正章直ニ大雪ヲ犯シテ來ル即「長劬不日大舉ヲ謀ルノ事情ヲ告グ、猶ホ在藩ノ同志ハ益々努力周旋セヨ、又止ムヲ得ザルコトアラバ速ニ長劬ニ來ツテ共ニ事ヲ講ゼヨ」ト告グ此時那須俊平、中



平保太郎ニ書リ送リテ近況ヲ報ジ併テ脱藩ヲ云ム、定雄ハ歸リテ復命ス其後三條實美卿以下七卿長州ニ下ラセ給フアリ  
此時定雄ハ長藩主ノ引見ヲ辱シ、且ツ三條卿御殿讀ヲ命ゼラル、或時三條壬生修兩卿ヨリ御自筆ノ和歌ヲ賜ル依テ之ヲ一  
書ニ添ヘテ郷里ノ父母ニ贈ル、元治元年六月十六日ノ夜防州三田尻出帆全廿一日浪花ニ着、全廿三日ノ夜流船ニテ廿四日  
ニ漸ク山崎ニ上陸、八幡宮ニ參籠シ黃昏寶寺ニ移ル此ノ夜忠勇隊ノ半隊天王山ニ出張、全廿五日忠勇全隊天王山ニ引移ル、  
全年七月十九日京師ニ押寄セ堺町御門ニ會藩ノ兵ト戰フ、時ニ我軍利ヲ失ス、奮戰中重傷ヲ被リテ遂ニ鷹司殿中ニ於テ割  
腹ス時二年二十三、明治十四年八月別格官幣社靖國神社へ合祀ヲ仰セ出ツレ、全三十一年七月四日特旨ヲ以テ正五位ヲ贈  
ラレタリ、

文久三年十一月脱走セシトシテ遺書ヲ認メ其末尾ニ和歌ヲ記シテ云ク  
知理定由久阿幾乃古能半波久津流登毛麻多來流波流乃米久美麻多那牟

掛橋和泉

掛橋和泉ハ那須常吉ノ次男ナリ、母名天保十四年三月高岡郡橋原村ニ生ル幼名ヲ順次ト稱ス全村神職掛橋因幡ノ養子トナル  
好シテ文武ノ道ヲ講究ス、嘉永五年正月ヨリ橋原村郷士那須俊平ノ門ニ入りテ益文武ヲ勵ム、養父因幡ノ死後ハ其職ヲ襲  
フテ家政ヲ執ル、時恰モ尊攘ノ論稍熾ニナリ勤王ノ士四方ニ起ルニ會フ、和泉亦大ニ時勢ニ感ズル所アリ同志非出正章、  
那須俊平ト俱ニ相携ヘテ脱藩ヲ約ス、既ニシテ養母ノ覺ル所トナリテ果サズ、然レモ亦同志ニ義ヲ破リ且ツ勤王大志成ラ  
ザルヲ且歎キ且恨テ遂ニ自殺ス時ニ文久二年六月二日ニシテ年二十八明治三十一年七月四日特旨ヲ以テ從五位贈ラル

中平定晴

中平定晴ハ通稱保太郎ト呼ブ、土佐國高岡郡橋原村郷士專平時親ノ嫡子ニシテ天保六年十一月廿九日ヲ以テ生ル幼ニシテ  
文武ノ志アリ嘉永元年三月年甫メテ十四高知城下ニ出デテ楠山庄助ノ門ニ遊ビ漢籍ヲ修ム同三年十二月郷里橋原村ニ歸リ  
同村那須俊平ニ從ヒ柔術其他劍術ノ術ヲ學ブ安政六年四月山田喜三之進ヨリ兵法ノ傳授ヲ受ク、文久元年二月父專平卒ス  
ルニ依リ、其家督ヲ襲ヒ郷士職ヲ繼ギ食田拾石余ヲ領ス、是ヨリ先キ尊王攘夷ノ說四方ニ喧シク、本藩ニ在テハ武市半平  
太等卒先此說ヲ唱フ、定晴密ニ心ヲ傾クルト雖モ未タ志ヲ通ズルノ期會ヲ得ズ文久二年二月親友吉村寅太郎ノ脱藩スルヤ、  
志愈決シ進テ諸有志ト結ビ、時事ニ盡力セントス、時ニ友人那須重民モ亦同年四月ヲ以テ藩ヲ脱ス、茲ニ於テ定晴感憤措  
ク能ハズ廣ク交リテ諸有志ニ結ビ武市半平太、廣瀬健太、松山深藏其他諸有志ノ士ト意ヲ通ジ、毎ニ相往來シテ時事ヲ談

ズ、初メ重民ノ脱藩スルヤ事秘密ニ屬スルヲ以テ其意ヲ父ニ告ゲズ、故ニ重任重民ノ脱藩スルヲ知ルヤ且ツ怒リ且ツ恨ム、  
定晴行キテ慰諭スルニ重民ノ父ニ告ゲズシテ脱藩セシ顛末ヲ以テテス、重民大ニ感悟シ是ヨリ后ハ常ニ相往來シテ互ニ時事  
ニ勤ム、全年六月藩主山内公上京ニ付三人扶持金拾兩ヲ賜ヒ、其供奉ヲ命ゼラル、中平龍之助ヲ從ヘテ上京ス、滯京中全  
年拾月敕使三條中納言姉小路少將ノ兩卿關東へ下向セラルルニ際シ命ニ依リ矢野川龍右衛門、久松喜代馬、三原兎彌太、  
島村衛吉、柏原頼吉、田邊榮次郎、山本喜三之進、小笠原保馬、筒井米吉、浪越肇、楠瀬六衛等ト共ニ之ニ扈從シ、全年  
十月京師ヲ發シ、關東ニ下リ事終テ全年十二月歸京シ、全三年正月藩主山内公ニ從ヒ歸路ニ上リ全年三月郷里ニ歸着ス、  
全年七月藩論因循決セザルヲ慨シ、片岡盛藏、松山鶴助、市川次平、谷脇清馬、高橋俊助、片岡左太郎、同團四郎、同孫  
五郎、中平龍之助、千屋菊次郎、全金策等ト共ニ藩主ニ向ヒ俗論ヲ排シテ決然攘夷ノ實ヲ舉ゲラレンコトヲ且長藩當時外夷  
ノ攻ムル所トナルガ故ニ、早ク援兵ヲ差向ケ朝命ヲ重ズルノ意ヲ表シ、信ヲ天下ニ顯ハサントコトヲ、藩廳若費用多端ノ場  
合ナルガ故ニ許ス能ハズンバ吾等進テ其衝ニ當リ自費ヲ以テ事ニ從ハント云フノ意ヲ上書セシモ藩廳之ヲ許サズ、全年九  
月廿一日松山深藏、千屋菊次郎等長藩ニ走ラントシテ重任ノ家ニ來ル、其夜其家ニ泊ス、翌日之ヲ家ニ迎ヘ酒肴ヲ設ケ  
且ツ酌ミ、且ツ時事ヲ談ズ、其夜重任ト共ニ之ガ行ヲ送テ國境ニ至リ袂ヲ分テ歸ル、廿四日上岡藩治重任ノ家ニ來リ、藩  
論大ニ變ジ諸有志ヲ摺斥シ其說ヲ容レザル而已ナラズ、武市半平太等ノ獄ニ投ゼラル、ノ變ヲ告グ且ツ已ノ脱藩ニ決意セ  
ルヲ語ル、重任之ヲ不可トシテ、曰ク此際脱藩セバ必ズヤ割腹ヲ恐ル、ノ諍ヲ受ケン、如カズ從容死ニ就クノ勝レルニハ  
ト、定晴モ亦之ヲ贊成ス、膽治曰ク徒ニ俗吏ノ手ニ死センヨリハ寧ロ一時ノ辱ヲ忍ビ、他日快ク王事ニ死セント懇談熟議  
遂ニ膽治ノ說ニ決シ、其行ヲ送ル、翌元治元年那須重任ヨリ淺山一傳流柔術ノ免許ヲ受ク、全年九月復藩主山内氏ニ從ヒ、  
上坂シ、全二年正月歸國ス、慶應元年五月海防小頭並ニ津野山郷諸藝取立役ヲ命ゼラル、後邊堀小頭又郷兵小頭ト名目替  
ヲ命ゼラル、明治元年土州藩ノ京都御警衛ヲ命ゼラルルニ際シ迅衝隊十一番隊第二分隊教導トナル、先ヅ讚州高松城ニ向  
フ、同藩降服スルヲ以テ上京ス、間モナク東征ノ命アリ、依テ二月十四日京都ヲ發シ、甲州勝沼、野州安塚、今市其他各  
所ニ轉戰ス、皇軍連戰連勝、全年八月廿三日會津ニ入り連日若松城ヲ攻メ終ニ之ヲ陷ル、全年十月、二本松ニ於テ休兵ヲ  
命ゼラル同十一月歸藩ス、同二年正月中隊長ヲ命ゼラル、全年六月軍功ヲ以テ御留守居進メラル、全年八月高岡郡第  
十中隊司令ヲ命ゼラル、全十二月第六大隊第十二小隊司令ヲ命ゼラル、全三年正月解隊ニ付キ職ヲ免ゼラル、爾後居村ニ  
在リテ學區取締並ニ郵便局長ヲ命ゼラル、或ハ戶長トナリ、用係リトナリ、數回去就セシガ終ニ明治廿二年三月十二日戶  
長奉職中病ヲ以テ長逝ス時二年五十五



那須重任

那須重任ハ俊平ト稱ス、文化四年卯正月二日土佐國高岡郡橋原村ニ生ル、長ジテ同村郷士那須忠篤ノ養子ナリテ食田九石五斗ヲ領ス、平生武技ヲ好ミ、槍術ヲ山田喜馬太ニ劍法ヲ三本廣作ニ學ビ、數年ニシテ皆其瀧奥ヲ究ム、稱シテ皆傳ト云フ、來リテ其門ニ學ブ者甚ダ多シ、重任不幸ニシテ男子ナシ、將ニ佳婿ヲ擇ビ女爲代ヲ以テ配セントス、而シテ同郡左川村此處ニハ本藩ノ老臣深尾氏アリ、濱田充美ノ弟ニ重民ナル者アリ長身強力最モ武ヲ好ムト聞キ請ヒテ養子トナシ、女ヲ配而シテ近郷皆深尾氏ノ領邑タリ、濱田充美ノ弟ニ重民ナル者アリ長身強力最モ武ヲ好ムト聞キ請ヒテ養子トナシ、女ヲ配ス、一家全齊、重任大ニ喜ビ重民ヲシテ高知ニ往來シテ專ラ武事ヲ研究セシム、重任老ユト雖尚ホ善ク家事ヲ整理ス、重民因テ内顧ノ憂ナシ、高知ニ在ルニ八九、文久二年壬戌四月八日重民脫藩ス然レドモ事機密ニ屬スルヲ以テ初メヨリ未ダ會テ父ニ告グズ、重任其脫藩ヲ聞キテ且恨ミ且歎ク、乃歌ヲ作ツテ曰ク

津麻胡遠毛須津流太米志波茂乃々布乃奈良比斗志利且曾且波奴禮津々、ト  
同月廿二日郡廳ニ詣リ、重民ノ脫藩ヲ告グ、家ニ歸リテ又和歌ヲ詠ズ、曰ク

乃胡志於久布太利乃麻胡遠知加良爾豆、於比奴流古斗遠和須禮胡會須禮

同村中平保太郎、重民ガ脱藩ノ事ヲ聞キ感憤ノ餘、交ヲ諸有志ノ士ニ結び、往々力ヲ國事ニ盡ス、又度々重任ヲ慰問シテ時勢ヲ語リ、且ツ重民ガ父ニ告グズシテ脱走セル事ノ顛末ヲ懇諭ス、重任乃大ニ感悟ス、是ヨリ諸有志ト相往來シ相與ニ時事ヲ謀ル、既ニシテ保太郎藩主山内土佐守ニ恩從シ京師ニ趣カントス重任即チ書ヲ載シ槍術皆傳書一卷ヲ添ヘテ保太郎ニ託シ密ニ重民ニ致サシメ且故郷ノ事ヲ以テ意ニ介セズ大ニ國家ニ盡スベキ旨ヲ傳ヘシム、重民書ヲ得テ大ニ喜ビ爾後屢々書ヲ寄セテ音信ヲ通ズ、故ニ重任京師ノ事情ヲ知り且ツ益諸藩ノ有志ト交リテ力ヲ時事ニ致ス、全三年癸亥九月廿一日同志深山深藏千屋菊次郎ノ兩人將ニ長藩ニ脱走セントス、來ツテ別ヲ告グル會フ、便チ留メテ酒ヲ酌ミ一宿セシム、翌廿二日又々中平保太郎ノ家ニ就テ別飲シ、全夜兩人ヲ送ツテ伊豫ニ出デシム、此ノ時ニ當リ藩論大ニ變ジ頻リニ有志ヲ擯斥シ、其說一モ容レラズ、是ニ於テカ有爲ノ士、奮然藩ヲ脱走スル者相續デ出ツ、重任心自ラ安ンゼズ、而シテ重民ノ亡命後幼孫二人ヲ養育スルヲ以テ進退心ニ任セズ、乃チ國ニ留テ從容死ニ就カント決シ、和歌ヲ詠ジテ之上岡勝治ニ贈ル其歌ニ曰ク

於保幾美乃美古斗加志古美津加倍奈牟美波須太爾與志佐加留斗毛、ト

全月廿四日突然上岡勝治來リテ去ル廿一日武市半平太投獄ノ變ヲ報ズ且ツ其脫藩ノ意ヲ述ベテ別ヲ告グ、重任即チ以爲ラ

ク、實ニ好期ナリ、然リト雖モ今脱藩セバ必ズヤ割腹ヲ恐ルルノ謗ヲ免レジ「如カズ、從容死ニ就クノ勝レルニハ」ト膽治重任ノ意ヲ察知シ、重任ニ與ニ脱走セントヲス、メ、且ツ曰ク「徒ニ坐死シ或ハ俗吏ノ手ニ死スルモ何ノ功アラン、寧ロ一時ノ辱ヲ忍ビテ他日快ク王事ニ殉ズルニ如ズ」ト適中平保太郎モ亦來ル、三人懇議スルコト稍少時ニシテ遂ニ勝治ノ說ヲ可決ス、而シテ重任金若干ヲ贖シテ之ヲ送ル、已ハ未ダ發セズ元治元年五月三十日井出正章ト謀リテ千屋孝成ヲ脱走セシム、藩廳之ヲ知リテ重任、正章ヲ捕ヘテ獄ニ投セントス、當ニ捕吏ノ來ラントスルヲ探知ス、是ニ於テカ二人相議シテ曰ク「今日ノ形勢國ニ在テ事ヲナスノ途ナシ而シテ又俗吏ノ爲メニ空シク死スベキ時ニアラズ聞ク長州不日大舉ヲ圖ルト速ニ藩ヲ脱シテ之ニ投セン」ト、時ニ捕吏既ニ迫リテ二人家僅ニ十丁許ヲ距ツルモ各正路ヲ往ク能ハズ故ニ正章夜半人靜マルヲ俊ツテ山路ヲ迂迴シテ重任ノ家ニ微行ス、抵レバ重任既ニ旅裝シテ妻女、初孫貳人ト訣飲ス、正章モ之ト同席シテ後事ヲ語ル、互ニ獻酬四更ニ及ブ、即共ニ出足ス、別離ニ臨ミ幼孫妻女只一滴ノ涙ヲ垂ルモノナカリシト云フ、時ニ文久元年六月五日ナリ、全六日豫州中井田ニ全七日八幡濱ニ宿シ、八日喜津ニ達ス、全夜船ニ乘リテ翌日未明ニ出帆シ全十日三田尻ニ達ス、全十二日宮市ノ天満宮ヲ拜、全十四日招賢閣ニ入ル、既ニシテ久坂玄瑞、真木和泉等ノ山崎天王山ニ據ルヤ、重任忠勇隊ノ伍長トナリテ之ニ從フ、七月十九日京師ニ入テ堺町御門ニ會津ノ兵ト戰フ、我ガ尼崎幸之進奮進長槍ヲ振ツテ敵陣ニ突入ス、重任モ亦之ニ次テ槍ヲ舞シテ邁進ス、敵兵爲メニ靡ク、我兵勢ニ乘シテ奮擊ス敵軍乃却ク既ニシテ薩藩ノ兵モ亦加リ來ル、是ニ於テ我兵利ヲ失シ我將、兵大半戰死ス、重任モ亦衆寡敵セズシテ遂ニ花々敷ク戰死セリ時年五十八、朝廷其忠勳ヲ追賞シ給ヒ明治卅一年七月四日特旨ヲ以テ正五位ヲ贈ラル

西村治家

西村治家ハ通稱ヲ廣歲ト呼ブ、土佐國高岡郡大谷村野島助八ノ男ニシテ文化九年申五月十日同地ニ生ル、天保十亥年高岡郡橋原村農西村治太平ノ養子トナル、幼年ノ頃ヨリ武藝ヲ好ミ、嘉永二酉年二月郷士トナリ、十七石五斗ヲ領ス、西川楠彌太ニ就キ馬術ノ皆傳ヲ受ケ、山田喜三之進ノ門ニ入リテ槍術中傳ノ免許ヲ得、又劍ヲ那須俊平ノ門ニ學ビテ其ノ皆傳ヲ受ク、文久二年尊攘ノ論大ニ起ルニ及ビ、諸有志ト相往來シテ時事ヲ談ズ、同年十二月ノ頃同村竹村猪之助、中平菊馬、前田要殿等ト共ニ上京セント欲シ、乃城下ニ到リテ是ヲ願フ、藩廳許可セズ、是ニ於テ止ムナク歸郷シ空シク時ノ至ルヲ待テリ、文久三年亥正月廿七日臨時御用ヲ以テ上京ノ命ヲ受ク、乃上京ス、在京中吉村寅太郎、那須重民等ト意ヲ通シ大和ノ義舉ニ與センコトヲ約セシモ病ノ故ヲ以テ果サズ、幾モナクシテ三條中納言殿御守衛ヲ蒙ル勤務ノ餘暇常ニ諸藩ノ有志ト



時事ヲ談ズ、同年八月十八日三條以下六卿ノ方々長州ニ下向セラル、ニ及ビ、治家モ亦扈從ス、長藩ニ滯在中病ニ罹リシカバ同年十月廿一日三田尻ヲ出帆シテ飯途ニ就ク、土方楠左衛門并其弟山本兼馬ノ兩士付添ヒトシテ橋原村宮野々口御番外親族西村新彌ノ宅マデ同伴シ來リ、此處ヨリ長藩ニ引キ飯レリ是ニ於テ治家ハ藩廳ヘ詳シク認メタル飯宅療養ノ伺書ヲ差出シタリ、藩廳直ニ之ヲ許ス、治家乃チ飯宅ス、在郷ノ同士時々往テ時勢ノ變遷ヲ語ル、治家之ヲ聞テ以テ唯一ノ樂トナシ、日夜療養ニ力メシガ終ニ其効ナク明治三年四月廿四日死去セリ、時ニ年五十七

竹村猪之助

竹村猪之助敬義ハ土佐國高岡郡橋原村ノ郷士竹村健七ノ長子ナリ、性勇敢果斷ニシテ細事ヲ意トセズ、幼ヨリ甚ダ武技ヲ好ム、同村那須俊平ニ就キテ文武ノ道ヲ講ジ、特ニ劍ハ淺山流、槍ハ高木流ノ奧義ヲ極メタリ、夙ニ勤王ノ志ヲ抱キ、文久二年十月同志、西村廣藏、前田實藏、中平菊馬(今ノ中平定純)等ト共ニ上京シテ事ヲ圖ラントス、藩廳ノ止ムル處トナリ果サズ、翌文久三年癸亥正月臨時御用ヲ仰付ラレ、御國許出立、立川通リ上京シ、練兵小頭トナリ、徳大寺中納言卿ノ御守衛ヲ命ゼラレ、次テ正親町卿ノ御親兵ニ轉ズ、全六月十六日長州ヘ御勅使ノ御供トシテ差遣ハサレ、御近習役相勤ム、全十月卅日無事京都ニ歸營ス、此時正親町少將ヨリ慰勞金トシテ黄金五兩ヲ、天朝御卓式物、御盃ニツ、御扇子五本、御煙草入一具、拜領仰付ラレ全十一月四日御用濟ヲ以テ御暇ニナリ、同日京都出立十二月一日歸國ス、明治元年戊辰正月十三日京都御警衛仰付ラレ、立川通リ上京ス、同二月十四日京都ニ於テ東征軍ニ從軍ヲ命ゼラレ全地ヲ出發ス、三月甲州勝沼城戰争ノ節ニハ甲府城ニ於テ輻重守衛ニ任セラレ、四月廿二日野州安塚ニ戰闘シ、同廿九日瀬川戰争ノ節、今市驛外ニ輻重守衛トナリ、閏四月廿六日今市驛附近ニ、同廿七日奥州白川金正寺山ニ、全六月十二日奥州湯本街道ニ戰闘シ、全廿五日再ビ金正寺山ニ七月朔日又湯本街道ニ戰ヒ、同廿八日鶴生、追原附近ニ巡邏ス、八月廿日會津討入ノ節、中山街道横川切拂村ニテ戰闘シ同廿一日横川ヲ進發シ晝夜兼行シテ會津城ニ向フ、尤モ母成時、稻苗代等ニ暫時休足シ、同廿三日會津城攻撃、同夜銃劍守衛ヲナス、同廿四日清水ニ指向ハセラレ、同廿九日手負ノ守衛ヲ申付ラレ、清水ヲ出發、白川ニ向フ、九月四日命ニヨリ白川ヨリ若松ニ歸營ス、此間守衛ニ戰闘ニ幾多ノ辛酸ヲ嘗メ、數々勲功ヲ建テレガ、全月廿二日會津落城シテヨリ奥羽ノ諸賊相次テ歸順セリ、是ニ於テ敬義等ハ二本松ニ於テ御暇ヲ賜ハリ、十月下旬京都ニ凱旋セリ、時ニ敬義等特別ノ御思召ヲ以テ皇居ニ召サレ、行政官ヨリ慰勞トシテ酒肴ヲ下賜セラル、而シテ全十一月歸國ス

土州兵隊

久々軍旅殊ニ苦戰盡力之段連ニ被 聞召叙感不淺候此度東京御駐紮之折柄歸陣ニ付不取敢爲慰勞酒肴賜候事  
但東北一先平定ニ至候トイヘ其前途  
皇國御維持之義深ク御苦慮被爲遊候ニ付尙此上紀律嚴重ニ相守リ誠實ヲ旨ニシ緩急可達奉公旨御沙汰ニ候事

辰十月

行政官

今般奥羽平定ニ付彼表ヨリ致凱陣候戰兵朔日午半刻  
皇居ニ被爲召旨被仰付候事

但東山道ヨリ進軍候兵隊ニ限候事

明治二年己六月十七日藩府ニ於テ東征ノ軍功ニヨリ格式新御留守居組ニ進メラレ、四人扶持ヲ下賜セラル

御用之筋有之候ニ付麻上下用意ヲ以來ル十六日迄致出府居候様被仰付候尤病氣等ニ而出府難相調候ハハ類續之中可能出候

右之通り被仰付候條各被得其旨出府早速於宿本紙面に相記當役場へ可被届出候以上

六月十日

申渡 覺

山田 儀平

竹村 猪之助

右者去春出兵來數月之間不厭辛苦屢致勇戰遂ニ成功候段深御満足被思召依之新御留守居組入被仰付四人扶持被下置旨被仰出之 以上

己六月十七日

此ヨリ敬義ハ養子敬鶴(實ハ敬義ノ弟、即今ノ竹村敬凡ノ父ナリ)ニ世ヲ讓リ自ハ家ノ傍ニ一ノ道場ヲ設ケテ廣ク青年子弟ノタメニ専心劍術ヲ指南セシガ明治十六年四月十一日途ニ病ヲ卒ス、時ニ年五十四、

中平定純

定純ハ弘化元六月十日ヲ以テ土佐國高岡郡橋原村ニ生ル幼名ヲ菊馬ト稱ス父ハ中平專平時親ト稱シ母ハ全郡北川村富岡官



藏ノ女ナリ、家世々郷士ニシテ山内家ニ事ヘ祿八石七斗ヲ食ム、椿原村庄屋松山祐右衛門ニ從ヒ文學ヲ修メ、同村那須俊平ノ門ニ入リテ槍劍ノ術ヲ修業ス、是ヨリ先藩内ニ尊王攘夷ノ論頻ニ起リ武市半平太ヲ以テ謀主トシ同志百余名相盟約シ四方ニ奔走ス、文久二年同志河野万壽彌等五拾名上京ス、定純適病アリテ與ニ行クヲ得ズ全年十一月同志竹村猪之助、西村廣藏、前田要藏、上岡勝治等ト與ニ上京セント欲シ藩廳ニ懇願ス、許サレズ、獨リ上岡氏ハ幸深尾丹波之同勢ニ加ヘラレテ上京ス、文久三年正月上京ヲ命ゼラレ全月廿九日宮地宜藏、西村廣藏、竹村猪之助、前田要藏等ト同行シ上京ス既ニシテ川原町妙心寺ニ着ス勤務ノ余暇同藩脱走ノ志士ヲ訪ヒ時事ヲ談ズ、次デ德大寺中納言卿ノ守衛ヲ命ゼラル、全年八月十八日京都ニ變動起リ俄然三條中納言、德大寺中納言ヲ初メ正義ノ公卿方殘ラズ藩内御差留トナリ堺町御門ヲ警衛シタル長州藩兵ノ退散ヲ命ゼラル是ニ於テ秋澤清吉、安岡格之助等ト與ニ意見ヲ德大寺中納言ニ言上セシモ聞カレズ却テ翌九月飯國ノ命ヲ受ク、然レドモ病ト稱シテ猶暫ク滯京シ諸藩ノ志士ト交通ス同年十一月故アリテ飯國ス、其後明治戊辰ノ役ニ迅衝隊ニ加ハリ五月十一日ヲ以テ出足高松城ニ向フ、未ダ于戈ヲ交ヘザルニ賊軍降服ノ報ニ接ス、乃高松ヲ發シテ上京ス、既ニシテ東山道先鋒トシテ東下ヲ命ゼラル、爾後兩毛、地方ニ轉戦シヤウヤクニシテ會津城下ニ追ル、其間幾多ノ辛酸ヲ嘗メ數々軍功ヲ建ツ、會津落城スルニ及ビ二本松ニ於テ凱陣ヲ命ゼラレ歸國ス、全二年六月軍功ニヨリ格式御留守居組ニ進メラレ、爾後高岡郡内ニ於テ小隊司令官トナリ、又村長トナリ、明治十二年三月高岡郡書記ニ任ゼラル、全廿六年七月五日郡書記非職トナリテ郷里椿原ニ歸リ、川西地ニ閑居セシガ、世未ダ氏ニ閑靜ヲ假サズ、數年前ヨリ郷黨ニ推サレテ名譽村助役トナリ、今猶恪勤村治ニ挾シツ、アリ、氏ヤ今年當ニ六十四歳齡髮殆ト全ク白シト雖モ鑠鑠尙壯者ヲ凌グ然カモ常ニ謙讓ニシテ始終邦家ニ報ヒントスルノ熱誠ニ至ツテハ何人モ毎ニ敬服スル所ナリ。

贈正五位那須翁招魂之碑 明治三十一年七月四日贈位

那須翁招魂碑

翁諱重任稱俊平父坂本重隆出嗣那須忠篤後家世仕高知藩住高岡郡椿原村翁少勵精文武最善槍劍鄉閭皆師事之屢蒙藩主賞養余叔父濱田信吾翁爲子以女配之文久二年信吾翁脫走翁壯其志自奮竭力尊攘元治元年藩論主佐幕翁知事不可爲亦走投長藩爲忠勇隊伍長與長軍入京七月十九日在應司第薩越二藩兵來攻翁提槍出戰誤墮溝中爲敵遂刺乃殞年五十八初翁脫藩藩籍其家明治中與悉復之又勅合祀靖國神社但未詳其埋葬處後知在烏邊野改葬落東靈山而鄉里未有所表識頃者門生故舊相議建招魂碑於先塋之次徵余銘銘曰

生稱偉人死爲忠臣永賜祭祀厥志不渝山蒼水綠海南故園呼嗟魂兮庶來盤桓

明治廿八年八月

宮内次官議定官陸軍少將正三位勳一等子爵田中光顯撰并書

贈從四位那須君招魂碑

贈從四位那須君招魂碑

君諱重民稱信吾高知藩士濱田光章君第三子爲人慷慨義烈身長六尺臂力過人幼學醫長嗜武當曰一七醫人孰與長槍大劍醫國那須重任養爲子文久之初君與武市瑞山等唱尊攘之論時奸臣擅權力排正義君乃慨然斬奸奔京藩勢爲振起三年八月與同志者推侍從中山忠光爲將君爲軍監舉兵大和將迎軍會朝議一變幕府令諸藩來討君孤軍奮鬪數破敵兵九月廿四日與查根藩兵戰於鷲家口斬隊長爲敵所狙擊而死年卅五番正傳首京尹士人瘞屍於寶泉寺爲建碑後六年光顯

抵京索君首級葬於靈山明治中興 勅合祀靖國神社贈從四位配重任女生一男一女今茲乙未親戚故舊謀建招魂碑於高知縣高岡郡西津野村囑余文乃紀其槩以傳後云

明治廿八年八月

宮内次官議定官陸軍少將正三位勳一等子爵田中光顯撰并書

上岡勝治並ニ吉村寅太郎ノ事

上岡勝治未亡人ノ語

明治四十年三月廿八日高岡郡東津野村字北川楠本氏ニ到リテ故吉村、上岡二士ノ事ヲ上岡勝治未亡人ニ聽ケリ左ニ記シテ參考ニ供スヘシ  
私ノ以下私トハ未 夫ト寅太郎ノ事デアリマスカ、先ツ祖先ノコトカラ寅太郎ホドノ事ヲ御話致シマセウ、私ハ上岡ト云ツテ居マシタガ此頃楠本ト改メマシタ、ソレモ祖先ガ楠本實ハ楠本氏ナリデアリマシテ、元龜天正ノ頃天下麻ノ如ク亂レ群雜各地ニ割據シ皇室ノ御式微ハ其極ニ達シ、公卿四方ニ流浪シテ僅ニ余喘ヲ繼ゲル頃當國ニ下リ一條公ノ客分トナリテ幡多郡上岡下岡ノ兩邑ヲ食ンデ居リマシタガ、後、一條公後嗣ノ事ニ關シテ功ガアツタサウデ長曾我部元親公ニ召シカ、エラレテ高岡郡ノ北部テ四十五石ヲ食ンテ此ノ北川ニ移リ住ミマシタ、此ノ人ガ即チ私ノ家ノ先祖テ上岡幸馬之丞正久ト申スモノデアリマス。



正久ヨリ十五代ノ孫ヲ遇造ト申シマシテ其遇造ノ一子ヲ際治正利ト申シマシテ私ノ夫デアリマス、妻ハ此ノ東津野村芳生野ノ庄屋吉村太中ノ女デ吉村寅太郎ハ妻ノ弟デアリマス、妻ガ此家ニ嫁入ツテ來タ頃ハ上岡ハ故アツテ庄屋ヲヤメテ居リマシタ、夫(贈道)ハ初メ幅多郡入野村ノ同姓上岡東作ニ就テ醫術ヲ學ビ傍ラ漢籍ヲモ修メマシタガ後ニハ大津ノ醫師鎌田氏ノ門ニ入ツテ醫學修了後此處(北川)ニ醫師ヲ開業致シマシタ

生家ノ父(名ハ太平)ハ故アツテ庄屋ヲ止メテ居リマシタガ、弟ガ十二ノ年(弘化四年)新規ニ北川ノ庄屋ヲカウモリ、其後諸方ハ轉任シテ參リマシテ安政四年ニ橋原ノ庄屋ト更ツテ參リマシタ或年ノ(文久元年)二月二十八日ニ弟ガ此家ヘ參リマシテ「御姉サン今日ハ高知ヘ參リヨリマスガ三月ノ節旬ニハチト橋原ヘ御出デナサイ、私モ近々ノ内ニ歸ツテキマスカラ」ト申シマシテ出高シマシタ、妻ハ節旬ノ日橋原ノ方ヘツトメニ參リマシタ其ノ留守ヘ弟ガ歸リカ、リマシテ(高知ヨリ橋原ハ北川ヲ通ラ)夫ニ脱走ヲススメテ置テ橋原ヘ歸ヘツテ來マシタ。翌六日ニナリマス親族縁者ヲ案内マシテ「今度急ニ御用掛リテ他國スルコト、ナリマシタカラ」ト云ツテ門出ノ宴ヲ開キマシタ其節旬ノ人々ハ歌ヤ詩ナドヲ書テモラツテ居リマシタカラ「妻ニモ何か一ツ」ト云ツテ扇子ヲ出シマシタ、スルト、

をのこなら酒もあらふに  
 ト書イテ呉レマシタ、妻モ亦  
 櫻花

時まちて今や開かん桃の花

千歳をかけて末は榮ゆる

ト歌トモ何トモツマラスモノヲ扇面ニ認メテヤリマシタ、スルト弟ハ之ヲ讀ンデ余程喜ンデ其意ヲ得タカノ様子デ之ヲ持ツテ起ツテ舞ヲ舞ヒマシタ、十分興ヲ盡シテ後多クノ人々ニ送ラレテ本村(橋原ノ庄屋)ノ西ノ入口マデ參リマシテ「いくら行つても果がない、もうどうか皆さん御歸へり下さい、實に難有う存じました、それでは愈御別れ申します、」ト挨拶シテ別レマシタ、ソシテ續ケ様ニ鞭ヲアテ、「ごなたも御機嫌よふ云々」ト云フテ大急ギデ駆テ行キマシタ見送りノ人々ハ何レモ異様ノ感ヲ致シマシタ、ソレモ其管デ思ヒ合シマス此ガ勤王ノ同志ヲ薩長諸藩ニ叫合ノタメ脱走スルトコロデ勿論生還セズト盟ツテノ旅立デアリマス。

妻ガ翌日吉村カラ歸リマシテ夫ニ「寅太郎ハ斯様々々ニシテ發足致シマシタ、ドウモアレハ脱走ヲ致シマシタヨ」ト申シマスト夫ハ唯「左様カ」トバカリ聴流シテ居マシタガ少時シテ妻ヲ夫ノ居間ヘ呼ビ入レマシテ、マヅ大刀ヲ抜テ切尖ヲ深ク妻ノ前ニ突立テ、大府改タマツテ「ワシモ近々ノ内ニ脱走シテ寅太郎ト共ニ王事ニ勤メル積デ寅太郎トハヤ約束ヲシテ

居ルガ御前ハ何ト考ヘルカ」ト聞カレマシタガ、妻ハスグ「あい、それは誠に結構な事でございます、どうか君のため國のため充分に御つごめ下さいませ」ト申シマシタ、夫ハ又「それならお前は、あの多くの子供はごうする考か」ト首ヒマスカラ妻モ大ニ決心シマシテ「なに子供柄のことは一切御心配はいりません妻が一生懸命働きました親御様には充分の孝養をつくし、子供は立派に教育しますから御安心下さいませ」ト申シマシタ夫ハ之ヲ聞テ満足ノ容子デアリマシタ。

其後幾日デアツタカ日ハ忘レマシタガ、雨フリノ日、那須(信吾)サンガ竹刀ヲ肩イテ「高知ニ參リヨリマス」ト云ツテ一寸ト御寄ニナリマシタ、之モ後ニ聞キマス勤王組ガ團ヲ抽キテ夫々役割ヲ定メマシタ結果弟ハ長、薩ノ方ヘ行キ那須サンハ或ル佐幕姦吏(藩ノ參政吉田元吉(東洋ト号)ノコトナリ)ヲ暗殺スル役トナツテ、此時ガ其行掛ケデアリマシタ此ヨリ五六日立ツテ、森山(當時北川ノ庄屋)ノ家内ガ妻ノ内ヘ參リマシテ「唯今(文久二年四月八日)夜ノコト」城下デ吉田元吉サンガ暗殺セラレマシタ、ソシテ下手人ハ何所カヘ逃タソウデ、其詮義ヲセヨ」トノ御回文ガ參リマシタト暗ニ諷シタ様ナコトヲ申シテ來マシタ、

其後五十人組トイフモノガ出來テ京都ヲ守護スル人ヲ確定シマシタ節夫ハ郷士デナイカラ之ノ組ニ入ルコトガ出來キマセシ、ト一ノ修業ノタメ京ヘ行クト云ツテ五十人組ニツイテ行キマシタ。ガ間モナク夫ハ五十人組ト一緒ニ早追デ國ヘ歸リマシタ、此ハ時勢カ急ニ一變シテ土佐ノ兵ガ京師ヲ守護スルコトヲ禁ゼラレマシタカラダソウデス。

妻ハ少々感ズルコトガアリマシテ、夫ノ留守中ニ自分ノ貯ヘ金三兩ヲ夫ノ金入レエソツト入レテ置キマシタ、夫ハ歸リマシテ後ニモ一向之ヲ知ラヌ容子デアリマシタ、或日夫ガ橋原ヘ參リマシタ留守ヘ庄屋カラ「御用之れ有り來る廿九日御目附方ヘ出頭すべし」トノ令狀ガトキマシタガ夫ハウムノ、首ヅイテ見テ居マシタガ其翌日此ノ御用デ城下ヘ參ルカラト云ツテかごでラシマシタ殊ニ「別レノ益」ヲ取り交シテ後出發シマシタガ、新田ヘ參リマシタ時半山ノ庄屋千屋三平ノ次男菊次郎(同志ノ士ナリ)サンカラノ進人ニ出遇ヒマシテ、スグ此ノ使ト共ニ宅ヘ引返シマシタ。此ノ手紙ノ内ニ「我々同志ノ五十人組ノ内十二人ノ者ハハヤ大半捕ヘラレテ上リ屋ヘ投ラレタカラ足下モ充分其邊ノ御注意ヲナサイ」トノ意ヲ認メテアリマシタ、夫ハ使ノ者ニ返事ヲ與ヘテ歸ラシマシタ、此時妻ハ夫ニ

大君の爲めなればちれ紅葉は  
 外の嵐にちるなるまじ  
 ト、ロズサミマシタ、夫ハ之ニコタヘテ



君の爲ならなげかすもがな

トヨミマシタ、ソシテ妾ニ申シマスニ「此の度の事は既に露顯してかく同志がはや入牢したからは、わしも今日城下へ参れば必ず上屋ものだ、今脱走すれば、容易く出来るが、それは如何にも同志につけてすまぬから、深く刑に服せようと思ふ」トノ話デアリマスカラ、妾ハ「夫は一應御尤もな御話で御座りますが、目下の場合同志が一時にみなく入牢しましたとて、御上の爲めには少しもなりません、上屋さままで居れば、これからすぐ脱走して最初の御目的通り錦の御旗の下花々しき御働をなさるゝことを願はしう存じます」ト吳々願タリ、諫タリシテ、ヤウヤク夫モ、シカラバサウ致サウト申スコトニナリマシタカラ、其日一日ハ内へ閉籠ツテ居テ日ノ暮ル、ヲ待チ兼テ家ヲ出シマシタ、其ト入チガヒニ土地ノ百姓惣八ト申ス者ガ來マシテ「壇那樣ハ何地へ御出になりましたか唯今大府御急ぎで前のまがり御通りでしたよ」ト申シマスカラ、妾ハハット思ヒマシタガ左アラヌ駭デ「いやそれは誰か人間遠であらう夫は早朝御呼出して御城下へ御出になつたもの」ト申シマシタ、惣八はケゲンナ顔デ「しかし何と考ても壇那樣でありましたよ」ト半バ疑ツテ居ル様子デアリマシタ、時ニ夫ハ四十二歳デ妾ハ二十四歳デアリマシタ、夫ハ首尾ヨク脱走シテ長州ニ参リツキマシテ其後度々手紙ヲ越シテ呉レマシタ（其ノ時分ノ手紙ハ皆大切ニシテ仕舞ツテアリマシタガ其後妾方ノ家運ガ次第ニ傾マスニツレテ少々アツタ什寶ヤ此等ノ書物類マデ諸方へ出シテ仕舞ツテ宅ニハ一ツモ無イ様ニナツテ居マス、實ニ残念デタマリマセン）ソレカラ其後ノ事ハ檜原ノ百姓惣十ノ口傳ニヨリテ承知致シマシタ、此ノ男ハ實ハ惣十郎ト申マシタガ人ガミナ惣十々々ト申シテ誰知ラス道樂者デ、妾ノ内ナドへハ始終出入シテ居マシタガ、時々錢ノ無心ヤ米ノ時借ヲセラレテ、困リマシタ、此男ガ或日参リマシテ「私は當地に居りまして面白くありませんから壇那樣の御在になる長州へ参りまして壇那樣に遣つて御もらひしようと思存じます、これから脱走しますが何なりと御用事が有りますれば御届致しませう」ト云ツテ呉レマシタガ此ノ男ノ爾來カラ考ヘルトドウモ一々實トモ受取レス併シ彼ノ性質トシテ或ハ脱走スルカモ知レヌト思ヒマシテ若干ノ金子ヲ旅費ニ與ヘテ夫へハ色々ト詳シキ傳言ヲ頼ミマシタガ、惣十ハトトト彼地へ参リ着キマシテ以來夫ニ附キキツテ用足ヲシテ居マシタガ、丁度三條公初メ七卿ガ長州カラ奉勅始末ノタメ御歸京遊バサレルト云フ時デアリマシテ即、夫ハ其御供ヲシテ惣十ヲモ連レテ京ニ下リマシタガ、御所へ御願ヒ申スコトガアリマシテ參内シ様トスル際御所警衛ノ會津ノ兵ニ取り圍マレテ手痛クヤラレマシタ、トトト御花畑デ討死致シマシタ、此時同志ノ人々モ大底討死シマシタガ那須（信吾）サンハ銃丸ニ中ツテ討死シ中平龍之助サンハ手ヲ斬ラレテ一人デハ叶ハンカラ、此ノ惣十二手傳ツテモラツテ切腹

シタソウデアリマス。

此戦後ノコトデアリマスガ、或夜鶴鳴ノ頃裏口ノ雷戸ヲ頻ニドク「トタタイテ」唯今歸リマシタ、惣十デ御座リマス」ト申シマスカラ、飛起キテ行ツテ内ニ案内シ、早速夫ノ身上ヲ尋ネマシタ、スルト惣十ハ脱走以來ノコトヲ委細ニ語リマシタ、夫ハ初メ手ノ指ヲ大層傷ケマシタガ夫レニハカマハズ益々奮闘激戦ヲシマシタ、其内ニ味方ハ段々少クナル、自分ハ多クノ手ヲ負フト云フ風テ到底働ケナイ、トテモダメダト云フコトニナツテ御花畑ノ側デ立派ニ切腹ヲシテ、惣十二酌マシタ水ヲ飲ンデ相果テタ相デアリマス、又千屋菊次郎サンヤ松山信藏サンナドモ其夜暗ニ乗ジテ切腹シタソウデアリマス。

龜十ハ此ノ最期ノ有様ヲ見届ケテ妾ヤ中平那須ノ兩家へモ夫レ「此ノ次第ヲ知シヨウト云フ考デ、大刀ヲ突立テ、フミ台トシ御園ノ櫻ノ木ニヨヂ、ソレカラ御塚ヲ乘リ趣ヘテ夜ヲ日ニ次イテ歸國シタノデ大府疲レテ居マスシ、又人目ニ觸ル、恐ガアリマスカラ其翌日ハ終日宅デ閉籠ツテ快ク寝マシタ。

其日妾下モハ平日モノ通り平氣デ仕事ヲシテ居リマスト庄屋（森山氏ナリ尤モ當時ハ西添ト稱シタリキ）ノ家内ガ宅へ参リマシテ「生花ニスルカラ南天ヲ呉イ」ト申シマスカラ快ク、ソレヲ與ヘマシタ。ソシテ色々ト話ヲシテ中々一寸ト歸ラウト致シマセン、此時龜十ハ何ト思ツタカ少シ隙子ヲ開ケテソツトノゾキマシタ處ガ、龜十ガ京カラ歸ニ城下ニ居ル同姓上岡ノ内へ立寄ツテ此度ノコトヲ知ラセタ、ソレカラ緒ガ附イテ追手ガカ、リ庄屋ノ方デハ鶴ノ目鷹ノ目デニランデ居ル矢サキデアルカラ、ソレナラ（北川ノ）上岡ノ内ニ居ルガ龜十ダロウト云フノデ大勢ノ捕手ガ宅へ押寄せマシタ、然シ龜十モサルモノデアリマスカラ、ナカ「其手ヲ喰ハナイ、裏口カラ出テ後ノ山ニ入り之ヲ越ヘテ檜原ノ方へ参ツテ夫々使ノ用ヲ果シマシテ其後ハサツバリドウナツタカ分ランコトニナリマシタ。

龜十ハコレデ宜ウゴザリマシタガ御蔭様デ妾ハ大府ヒドイ目ニアヒマシタ、丁度此時妾ハ三十五才デ有ツタト思ヒマスガ龜十ヲカクシテ居ツタト云フコトデ御上へ大府御掬介ヲカケマシテ横目様ナドモ數回御出張ニナリマシテ御取調ヲ受ケマシタ結果三年ノ間宅デ謹慎ヲ申シ付ケラレマシタ、地下カラハ、常ニ二人ノ番ガ付キ切ツテ居マシタガ三十六ノ歳何カ御上ノ御祝ガアリマシテ罪ヲ赦サレマシタ。

妾ノ長男デアリマスカ、楠本正朋ト申シマシテ政黨ノヤカマシカツタ時分國民黨デ働テ居マシタガイカニモ明治廿三年舊正月十五日デアリマシタ佐川デ討死シマシタ

長孫ハ今年十五デ正種ト云ツテ大坂ノ會社デ十二三回取ツテ居リマス



又妻ノ二男ハ吉村稀淵ト申シマシテ今ハ長崎ニ居リマス、弟ノ相續人が他ニアリマセンカラ、之ヲ弟ノ相續人トシマシタ  
外ニ二人ノ娘ガアリマシテ何レモ他家へ縁付テ居マス。

ハイ、此ノ山ノ上ノアノ破レタ社ガ寅太郎ヲ祀タ宮デアリマス山ハ瓢箪山ト云ツテ(楠木氏ノ直グ西ニ三)此ノ村ノ人ガ先  
年弟ノ名ヲ後ノ世ニ遺シタイトカ云フコトヲ建設マシタガ今ハ朽崩レマシテ殆ンド見ル影モアリマセン云々

附記 夫人ハ老ヒタリト雖モ言語舉動快活ニシテ流石ハ上岡氏ノ未亡人ダト感ゼザルヲ得ナカッタ話ハ當時ノコト  
カラ、今日ノコトニ及ンダカ、余ガ聞カント欲シタ所ノモノハ上記ノ部分デ、全リ本編ニ關係ノナイコトヤ、重  
語ヤ解シガタキ言語ハ取捨シタ所モアルガ大體ハ話其儘ヲ記ス考デ書タノデアアル、ソコデ世ニアル記録ノ相違ス  
ル点ガ少ナル様ナケレドモ之ハ先ヅ其儘記シテ置タカラ其積デ御覽ヲ、又話ノ中ニ夫トハ上岡磨治、弟トハ吉  
村寅太郎ノコトデアアルカラ、申添テ置キマス。

### 岩津野神社

津野親忠ハ彼ノ吾川郡長濱村天市寺山上ニ永遠ニ眠レル老英雄從四位下少將秦元親ガ第三子ナリ天正十年ノ頃元親ノ質子トシテ  
京都ニ送ジレ長ズルニ從ツテ武勇ハ譽高シ、嘗テ朝鮮征伐ノ時父ニ從ヒテ渡海シ諸所ノ戰ニ功アリ然ルニ關原戰後弟盛親  
ノ狂暴途ニ親忠ヲ殺スニ至ル、世親忠ノ死ヲ悼ミ且其靈ヲ慰センガタメ其ノ配所タリシ香美郡岩村舊神通寺部ニ祠ヲ建テ  
之ヲ祀ル、乃チ岩村ノ津野神社ニナリ、親忠ノ木像ヲ以テ神體トナシ、毎年陰曆正月十五日ヲ以テ其大祭ヲ營ムトイフ、  
岩村ノ津野祭ハ所謂岩村ノ一般ノ春祭ニシテ、年々近郷ヨリ參拜スルモ  
ノ非常ニ多ク余リ廣クモアラヌ境內ノ人山ヲ以テ雜沓ヲ極ムルガ常ナリ

### 靈通山孝山寺

岩村津野神社ノ西隣ニ靈通山孝山寺アリ此ノ寺ハ元靈巖寺ト稱シ竹林寺ノ末寺ナリシガ故ニ眞言宗也慶長五年親忠ノ此處ニ自殺  
セシヨリ其法名ヲトツテ今寺名ニ改メシモノナリ、寺ニハ其木像、位牌、津野家士分限帳等ヲ藏セリトイフ、當時ハ隨分相  
應ノ寺院トシテ知ラレシモ維新以後次第ニ頽廢ニ趣キ今ハ唯、一宇ノ大師堂ヲ存スルノミ其後方ニ三坪許ノ竹藪アリ、叢  
中葛蘿蒼然タル間一基ノ五輪塔ヲ見ルベシ、之レ即津野親忠ノ墓ナリ、其傍ニアル數基ノ小塔ハ其臣下ノ墓ナリト云ヒ傳  
フ、然レモ何レモ文字消テ見ルベカラズ、此ノ外境內ニハ念佛橋ト稱スル所アリトイフ。

### 須崎津野神社

高岡郡須崎町ノ東端漁家部落ニ瓦葺ノ小祠アリ津野神社ト云フ、即親忠ノ靈ヲ祀レルモノナリ、蓋シ津野氏ハ高岡郡ノ四  
百八十餘町ヲ領シ、四千貫ノ領主トシテ此ノ地ニ恩威ヲ施クコト久シク且ツ大ナリ則遺民其報恩ノ一手段トシテ先年之ノ  
祠ヲ興セシ所爲ナリ

### 吉祥寺ノ法會ノ話

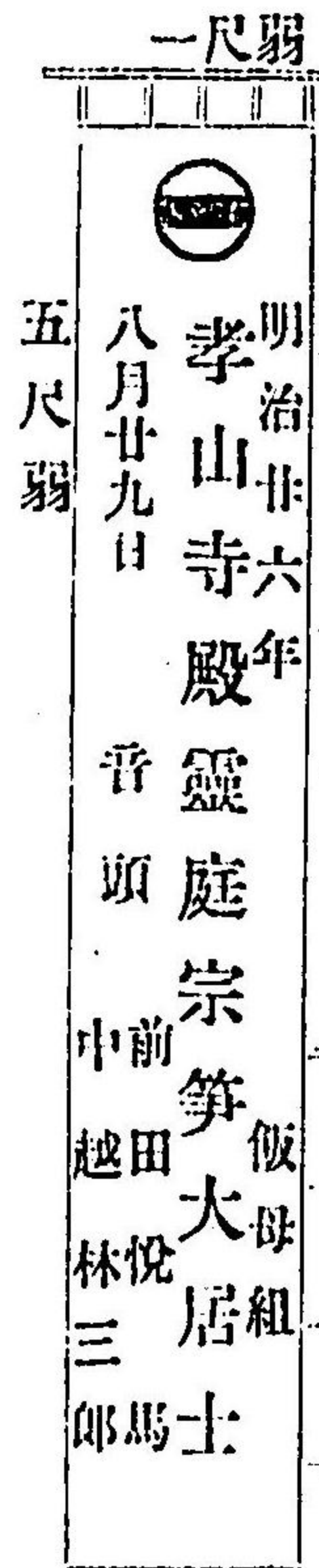
明治四十年三月十九日西津野村飯母部ノ古老中越孫次氏ニ就キテ吉祥寺ノ法會ノ大畧ヲ聽ケリ、今左ニ其大畧ヲ記サン。  
昔何時ノ頃ナリシカ連年風害水難打續キテ近郷饑寒ニ苦ミシカバ遂ニ津野孝山公ノ靈ヲ祀リ村內ノ繁昌、五穀ノ豐熟ヲ祈  
願セリ、爾后例トナリテ今日ニ至ルマデ其式ヲ守リ怠ルコトナシトイフ

孫次氏ハ十八歳ヨリ音頭ヲトリシガ此ノ二三年前ヨリハ子息ニ之ヲ譲リ居ルモ物知リトシテ今モ不相變、祭ノ時ハ何異レ  
ト世話シヤル山ナリ、抑モ、此祭ハ橋原一昧ノ執行スル所ニテ飯母、川西地、大郎川、本村ハ小幡ヲナス、其ノ式順ハ左ノ如シ

- 一、庭掃……花探踊ニ似タルヲナス
- 二、念佛
- 三、小幡 (初禮トイフ)
- 四、狂言 (此ハ余興ナリ)

即チ三、ノ時ニ相勤ムルナリ、而シテ  
大藏谷ねり。後別當、神在居庭掃ト各其部落落ノ受持ノ役ヲ務ムコトトナリ居ル故、小幡ヲナス組ニハ各音頭役ア  
リテ、豫テ本村ノ中平氏宅ニ打集リテ種々ノ打合せヲナシ、ネリ組、歌組等各十四、五日ノ兩日、四、五回ハ必ズ稽古ヲナ  
シテ、陰曆八月廿六日ニ中平氏ノ所へ笠揃トテ各部落ヨリ一同打集リテ總稽古ヲナシ、全廿八日ハ潮祭ヲナシ、翌廿九日  
所謂津野祭ヲ執行フナリ、其時踊子ハ、各手拍子、截付ケ、向手、掛帶、櫛(タスキナリ)、腰旗ニツ等ヲ裝ヒテ總勢百二  
三十人モ打揃ヒテヲドル、尤モ棧敷ハ一千人ノ樹ナリトイフ、

腰旗ノ圖





サテ。小踊ノ唄ハ廣島、吉野博多、三日月、キゾー、カイフ、山雀等數多ケレドモ悉ク演ズルニハアラズ只いれはどひきはトハ必ズ演ズルノ例ナリ、此ノ小踊ノ間ヘオネリト稱スルモノヲ入レテ演ズ、此モ亦此式ニハ必ズ缺グベカラザルモノナリ今左ニ小踊、唄、ネリノ大畧ヲ示サン。

小踊の唄

高須貝 (最初ニ演ズルモノニシテいれはトイフ)

一番 物憂いものよ。磯の千鳥に波の打つ音と。夜明の鐘で目を醒したぞよ。女方。

二番 此處ハどこぞよ。女方。こゝは住吉の御前でござる。いざや若衆達身をぞ、きよめて神へもすゞしみの身をまいらすせや女方。

三番 松のひまより 海面 ふみづらを見れば霧に交はる淡路の島山 こぎくる船が面白ぞや女方

高麗國 (式ヲ終ル前ノモノニシテ ひきはト名ヅクルモノ也)

高麗國の陣所は何處や。名護屋、筈ぐに。壹岐、對馬。高麗國は皆な陣所。

筒千挺に、筒千挺、弓をも千挺かたがして高麗國を從へて

日本の神々およろこび、こゝなんばを手にすゑて、勇みに勇で船に召す、日本へはるかに押し渡す、日本の神々をよろこび

よーこれの御庭で遊びして、遊の車をひく程にさき思うこまつ程に門をあけさせ、若衆達。

三番叟、遼

左ハ大藏谷、明神重固ノ家ニ秘藏セル三番叟遼重寶記ノ全文ナリ、今回、本誌編輯ニ際シ全氏ハ喜ンデ掲載ヲ諾セラル蓋シ本誌ノ趣旨ニ太ク賛同ノ意ヲ表セラレタルニヨルナリ、

三番叟

一番 あごの太夫

二番 おきな

三番 黒さじよふ

三人共右ノ手に扇子を持ちあごの太夫はおきな箱を目八分めテ携ヘ各柏子木につれ出る上みてに禮服着にて箱を受取此

時あごの太夫片足突て露を拂又前面に立ならびて三人一度に露を拂各々席に着  
アドノ太夫

君が代は千代に八千代にさ々れ石のいわをさ成りて苦のむすまでまんさいらくノ  
どふくたたりやノノノ

大小唄に貳遍廻り中、直り(アイヤノノ、ハア、)の聲にて袖を巻き(ア、ノノノノ)の聲で順に大小二遍廻  
る中、直り露を拂ひ座に直る

ヲキナ諾

さあしていたれどもまいろうれんげやとんごふやノ

千早振る神のひこさの昔しよりこのごころ久しかれとぞいはい天下泰平國土あんなんの今日の御祈禱なり

およそ千年の鶴は羽がいにくそ納めたり

まあた萬歳の池の龜は甲に三玉戴いたり

悦びの舞なれば一トさしまおふよまんざいらくノ

鳴は瀧の水日のとてるとも絶ずともノヒヤアノノノアイヤヒヤの聲にて袖を巻柏子木につれ踏む

アイヤア、ノノノノの聲にて順に大小二遍廻り露を拂ひ座に着く

黒さじよふ

ハアアイヤア、ハノノノノ

全詞

おふさいやれノ我れ此處に悦びあれ外へはやらじランモマア

ヤツヲ、ハの聲にて申にて踏むアイヤア、の聲にて下モにて踏む上にて踏み中にて踏み笛の聲にて戴き露を拂ひ下モ  
に直る此時アドの太夫上みへ進む

黒さじよふ

詞

あゝらめでたや物に心得たるあごの太夫殿にぞつとげんぞふ申す  
アドノ太夫







旅ノ笛

いまをはじめの旅ごとも

全三人

いまをはじめのたびごろもひもゆくすゑ久しき

全

抑々是は此所はじめての事にひが

全

まあたとふざのゆうらんにてひが

全

いかさま謂れのなき事はひまじ

地之人

仰の如く古今のしよに

全

是は此所はじめての事にてもひわす

全

まあた前々より是なき事にてもひわす

全

昔しこの所の主人をば

全

津野の何某と申ひ

全

かの由命日今日にあい當る祭禮なり

旅三人

扱ノ、夥しき事ひや

全

さためてあぼだいの爲まかりケ程にはひまじ

全

くわしく承り度こそひへ

地三人

不審尤なりさりながら

全

先きの津野の太子孝山大居公は古今無双の弓取なれども

全

おん代繼のなき故跡絶へ餘り無念さに

全

とふ家のすへく

全

或は體代のごもがら

全

子孫冥加の爲とい

全

または主君の事なれば

全

子孫繁昌民安全

全

富貴豊かに榮るも。ひとつは。この祭禮の功德なりけり

旅三人

おもしろや。戌亥辰巳の隅よりも。物こそいづれ朝日山。影を受んぞめでたけれ



旅の笛

惠美須は魚をつらんとて

三人

あひすは魚をつらんとて。しろかねのさをに。こがねのねりをはりかけてめでたき魚をそ釣たりけり

旅の笛

そふの時大黒進んで出。ヤア其時大黒進み出で。うつでの小鏡を大どり出し。大地を丁度うつかとすれば。數

大黒

しまいか

濠子

ハアと答へ 四聲笛にて歸らしむ一番大黒二番惠美須三番旅の濠音頭より順に立續て地の濠音頭より順に立

終りて崩し笛にて納む夫より六人同時に禮拜し旅の笛より順に立續て地の笛より立終る

千 秋 萬 歳

橋原三島神社

本記卷末ニハ「後々末代大藏谷ヨリ興行スベキモノ故書遺シ置クモノ也明神昇筆採」トアリ又其下ニ「明治十六年孟夏良

日 橋原村大藏谷ノ住人明神爲吉」ト附記セリ作者ニ至リテハ未ダ詳ナラズ、從ツテ之ヲ作リタル時モ未詳ナリ、

川西地ニ在リ、毎年六月十五日、九月廿九日ニ例祭アリ、祭神ハ御所大明神、天満天神ニシテ御神躰トシテハ神鏡九面木

棟札上梁三島大明神、天神靈祠之爲道聰明正直和光同塵如絲如倫其功所及仁恕恩惠四海無限護法護是以治主福祿駢發武幹愈盛億

千方歲奕葉泰々永壽斯民精祈所慮再拜敬白地頭藤原瑠璃麻呂修造司長谷部了珍長祿三巳卯十一月吉日

社記ニ云當社ハ延喜年中伊豆國ヨリ勸請ス云々(南路志ニヨル)

橋原庄屋附三島神社例一卷ニ曰

田地ニ係ル三島神社例一卷ニ曰

當三嶋神社ハ津野公延喜年中ニ伊豆國大三島ヨリ御勸請有リ祭祀領田御寄進有リ社人給迄相渡シ候處家中之上下武運長久

子孫繁榮冥加ノ祈念御載ヲ并正月二日武射御的之儀式御神事御祭禮之供物粉箸等夫々仕成指上ル御酒田七ヶ所ヲ七子神田

ト唱へ御供ハ御神前七ヶ所枝葉ノ假ぶきヲ以テ炊キ献上候處大雨ノ節指間候ヲ以テ、銘々居宅ニテ炊キ献上ルコト、ナレ

リ、今モ七ヶ所枝葉屋ト唱へ候、又供物ヲ炊キ作ルニハ七五三繩ヲ引廻シ、御供米ヲ作ル地ヲおはけ田ト申古例ニ御座候

三島宮御式事

一、御歳夜 御年米神主幣主ヨリ

御七五三 前田地

御鏡餅 那須總之亟勤ル

白米 那須總之亟勤ル

御酒 那須總之亟勤ル

一、正月二日御的 前田相摸、掛橋越中勤ル

御雜煮餅 南田……玉川善右衛門

御鏡餅(射手ノ祝ト云)市ノ内……白谷龜之亟

御的組地左ノ通リ



子ノ年一番 前田地 玉川善右衛門  
 丑ノ年二番 新開地 右 同人  
 寅ノ年三番 立道地 右 同人  
 卯ノ年四番 馬場地 奈呂伴之丞  
 辰ノ年五番 小太夫地 中平 榮次  
 巳ノ年六番 常法地 玉川善右衛門  
 午ノ年七番 坂本地 清右衛門  
 未ノ年八番 下仲洞地 村中ヨリ  
 申ノ年九番 山子地 下元武助、與三藏  
 酉ノ年十番 的場地 飯母、文五  
 戌ノ年十一番 和田地 和田 文五郎  
 亥ノ年十二番 八郎太夫地 清右衛門

一、御神事 六月十五日、九月廿九日

七枝葉屋

立道地、馬場地、坂本地、精進地、上古味地、中屋地、南地  
 右七枝葉屋ヨリ一膳ツ、御膳差上ル尤モ御酒モ持寄一舛ツ、相添候

七神田

窪田地 御酒六舛、神田 御酒八舛、大平 御酒六舛、宮向 御酒三舛、白谷 御酒六舛、白谷神田 御酒六舛  
 坂本 御酒六舛

以上ハ寶永六年ノ書附ノ概要ナリ、

三嶋神社御の格式

子一番 前田地 子ノ年 丑二番 新開地  
 寅三番 立道地 卯四番 馬場地  
 辰五番 小太夫地 己六番 常法地

午七番 坂下地 未八番 下仲洞地  
 申九番 山子地 酉十番 的場地  
 戌十一番 和田地 亥十二番 八郎太夫地

右之通り延喜十三年ヨリ以來正月二日於御神前無解怠勤番全無違犯所之狀如件  
 新曆元年九月 日 中平 兵部

右之書附兵部代ニ相改置所也依之右太夫代先年之寫扣共有之候勘太夫方ニ而本紙失ニ就キ扣ヲ以唯今書出所也向後跡々先  
 例之通り相違有間敷候當人へ神主ヲ觸之儀極月朔日に可申届者也 中平 兵左衛門判

貞享三年壹月朔日

三嶋宮 四之太夫殿

此ノ外享保十七子年極月廿八日中平兵左衛門ヨリ社人者中ニ宛テタル書物アリ此ニハ、十二的地ヲ十二支ニ配スル順序ヲ  
 示シ古來ノ格式ヲ中興ノ儀相記セリ大体貞享三年ノ書付ト同ジケレバ此處ニハ省クコト、セリ(今傳ルハ前田筑後ノ寫セ  
 ルモノ也)尙三嶋宮謂書ニモ此等ノコトヲ(中平兵部、全兵左衛門等ノ書附モ上ニ記セル格式等モ)詳ク誌シテ卷末ニ  
 右ノ書附中平先生御所持成ヲ掛橋之任御望ニ廣瀬定義惡筆ヲ不恥寫之進ゼシモ御他見傳御無用ニ御座候已上  
 寛政六甲寅六月末十日 花 押

トアリ、如斯此ノ神社ノ祭禮ハ古來ノ儀式ヲ嚴肅ニ執行スト雖當事者以外ニハ可成秘密ニナセリトゾ、今モ猶其風ヲ受  
 ケテ之ヲ知ル人甚ダ稀ナリ、  
 以上數多ノ書類ハ橋原ナル考古家中平定宗氏(今ハ墨國ニ在リ)ガ親シク余ノ爲メニ與ヘラレタル所ナリ、猶全氏所藏ノ  
 古書簡中ニ左ノ如キコトアリ記シテ參考ニ供ス、  
 中平(名記サレズ)氏ヨリ(何ノ年ナルカ不明)戌三月四日玉川甚五右衛門ニ宛テタル手紙ノ中ニ  
 一、竹の藪之三島宮を凡俗に御姉宮と申すは誤なり津野氏御勸請之節掛橋志摩御勸請に參り竹の藪に一泊せり後世此地に  
 三島神を祀りて川井より松谷まで西川筋之惣鎮守とす  
 此時の御與の御錦を以て御神木と奉仰なり、  
 一、御年越儀式御の初め、御神祭等大様橋原三島宮に同じ  
 一、三島宮之御供米を作る地をたはげ田と云ふ、後世數ヶ所に有之は不便故十二ヶ所にまどめ、廻りを以て作り差し上ぐ



ることせり  
トアリ

壁路山城攻之事

此ノ壁路山城攻、以下四万川天満宮ノ事ニ至ルマデハ四万川茨木包政氏所藏ノ益古語傳集ト云フ書ニアリシ事共ナリ、中ニハ如何シキ所モアレモ参考トナルベキコトモ亦少ナカラズ仍テ茲ニ其ノ全文ヲ轉載ス、讀者之ヲ諒セヨ  
伊豫長谷河美濃守内縁之者成カ去ル京都下向ノ砌確執ヲ結ヒ弘治三丁己三月長谷河軍卒西境ニ貴寄ル山城ニ駐進ノ者有リ  
信高聞之安會峯ニ立石數千是宛宛ノ術ナリト石毎ニ大成大細ヲ懸ケ足輕之様ニ見セ其後ニ備ヲ立テ又、コ、ノ木梢、カシ  
コノ岩ノ隙ニ火ヲカケシカバ其勢三千余騎モ柝籠ルラント見エシ敵是ニ僻易シテ不戦シテ引退ク元龜三年ニ至リ小田軍右  
衛門三間曾左衛門等長谷河カ兵ヲ引率、西ノ森陰ニ陣ヲ張ル、サレ共過ツル立石ノ謀ニ落城兵大勢ナルベシ力貴ニハ叶フ  
マジ城中エカ、ル用水堀放ナバ麓ノ流ヲ汲ミ出ヅベシ、其時一人ヅ、討トラント謀畧ス城中是ヲ悟テ白米ヲ以テ馬ニカケ  
水ノ乏シカラヌ様(射トアリ)ヲ見セケレバ寄手案ニ相違シテ、サラバヒタ責ニ攻メヨトテ無二無三ニ攻メ寄スル信高嫡  
子藏人尉信秀、弟長山善三郎、家老森部左馬亮、高橋在連弟源左衛門等防戦ス、寄手ノ大將小田軍右衛門真先ニ進テ貴近  
ク信秀森部指詰メ引キ結メ散々ニ射立テシカバ寄手貴メアグンデ見エシ所中岡與介貞安、黒ノ大駒ニ打乘リ群ル敵ノ真中  
エ駆込ミ大長刀ヲ閃メカシ縦横無盡ニ難立シカバ寄手是ニ僻易シテ右往左往ニ敗走ス森部在連、源左右衛門逃グル追テ、  
アマサジモノト追テ行ク透間ヲ伺ヒ小田軍右衛門城際ニ忍ヒ寄リ火矢ヲ射テ駆出ヲ長山善三郎取テ押ヘ備前兼光ノ刀ニテ  
指殺シ首ヲ録ニ貫キ城ヲ砒度着上レバ早一片ノ煙ト燃上リ城女中悉下屋舖エツホム、左馬亮ハ強敵ヲ追散セトモ城ニ火掛  
シヲ見テ主人モ切腹マシマスラン、後レジモノト、主従七人岡崎ニテ切腹ス藏人與介ハ大敵ヲ追退ケシカドモ城焼崩ルル  
ヲ見テ直ニ下屋舖ニ驅籠ル。

鳴ガウ子古城

是ハ肥前守隠居城也

四万川トハ右之古城嶋カウネヲ四万河ト文字改四万川ト申之由語り傳也

四万十川中野川局屋舖

根元長橋藏人分限タリシヲ豫松山之内久万ヨリ何某ト云者仕居配分地ト云々  
右藏人廟ハ局屋舖ニ在リ

壁路山ノ麓深入之名有リ

城責ノ時敵方ヨリ「深入スナ」ト其名殘リシト也

釜ノ久保、遠見カ石、大ユウニ有是ニ寄手遠見スルト也

又曰遠見カ石ヨリつづけくトサイハイシタル山ツ、ケユツノ名有リ  
唐ヒツ遠見カ石 是ハ城ノ者遠見スルト也

壁路山四万川天満宮由來

吉田新三郎光照卿京都而御秘藏之金團御家之寶物ナリシカ唐土國王是ヲ望ミ數十將ヲ以テ向ト開シカハ光照卿思召ニハ此節(方トアリ)何處ヘナリトモ落テ下リナバ不戦シテ勝利ナラント御圍ハ御身ニツケサセラレ、土佐國四万川ニ下着シママヒシガ山深ク人家少ク是宛宛ノ忍所ト思召、アル山家ノ門ニ立寄リ、ウカヒ給フニ夫婦之翁都鳥ヲ愛シ居ルテイ、不  
思儀ニ思召御尋ネ有ケレバ翁語テ申ケルハ我等之元モ都者昔時中岡甲斐祐ト申者此山ニ下リ年フル松ヲ迎ヘシト語りケレ  
バ扱ハ甲斐祐ノ子孫トハ、イブカシシ元ハ同流ノ末モ亦廻リ旋ルノ甲斐アリテ一所ニ社ト御喜ヒ直ニ翁ガ一子ヲ中岡右京  
ノ進貞吉トテ御結約有リ御歸京ノ思召立モナク所々ノ招民、人里ノ地ニ成サン事ヲ御樂ミ幾歳ヲ重ネサセラレシカ或時御  
不例ニテ御保養ノ驗ナキ時右京ヲ召シ我此度大病、アツカイニモ不叶今逝去フ覺我所持ノ鍔太刀長刀汝ニ讓ル又金團ハな  
きからトモニ壁路山麓ニ送リ納メヨ、神ト化シ永ク家名ノ守護、開里ノ氣隨フ願サント御自筆

南無威徳天満大自在天神ト書留メサセラレ

右京ニ渡サレ御逝去、光照卿ノ事ハ天子甚惜給萬壽年中御迎ノ使者紀伊守三十四人ヲ供シ、土佐國四万川、泉ニ御下着、  
右之次第具ニ聞召サレ、否御裝事ヲ改メ、紀伊守御廟ニ向給命ノ趣具ニ述給フ時ニ御廟ユルギ火烟レキケトシテ風立、  
首ニ白玉入タル蛇三筋願ル、紀伊守威儀ヲ正シ御暇乞被仰事終テ件之蛇御廟ニ入給フ紀伊守、泉へ御歸右京ヲ召サレ新三  
郎殿義常ナラン博學知仁勇之達人是マテ天子ノ御情再ビ歸京ヲ被爲招程之人ナレバ此所守神ト成給フ事氣隨願レウタカイ  
ナシ急ギ御廟之所ニテ宮建立有御邊神主ニテ尊敬有レトテ御使者御歸郷ニモ右京肩衣ニ去ツル三ツノ蛇願レ御見立、  
夫ヨリ三羽之白鳥ニ化シ虚空ニ飛去ルカト見シカ御廟ノ上ニ舞下リ玉フト也

右木紙立紙長三尺二寸許十二行ニ書タル者也

四萬河三嶋宮初リ語り傳テ曰

神主 中岡左兵衛貞親所持寫是



天正年中頃津野孫次郎親忠深川ニテ土佐勢過半討死スデニ危ウカリシ時、伊豫ノ大三島ニ御キセイ勝利有ニヨリ土佐エ七社祝ハレ玉ヒ、右七社ノ内一社ノ三島宮ト申傳也

五十四

寛文年中頃右三島天満ノ社ニ守移一所ニ祭禮勤行仕右三嶋社所後而庄屋廣瀬作之丞隠居屋舖ニ仕度由地頭長橋半左右衛門弟源五右衛門ニ相談仕處神サヘ御構ニ無是候ハ菟角モト申ニ付右三嶋神天満宮ニ守移シ奉リ式目祭禮仕候也  
否右社所作之丞作事相調隠居仕居候處不思議哉哉自狩衣ニ烏帽子着テ六尺有余ノ翁夜ナク來リ、夜着ニモタレテ曰ク我ハ三嶋神ナルガ今天神ノ守ニ守移シ我社ヲ汚セシハ奇怪ナリ、トリ殺サントノ玉フ亦同ジ姿ニテ老翁入り交ツテ曰ク我レハ天満ナルガ我殿ニ三嶋神ヲ守移シ、我社ヲ狹バメ、奇怪ナリ神傳思ヒ知レト曰フ、作之丞ハツト恐レ目ヲ開キ見レバ姿ハ消テ見ユザリケリ、シキリニ恐ロシキ事共ニテ神ニ御託ビ申直ニ兵太夫ハ東川宮谷ニ引籠ル其跡六七尺掘ステ宮建立有、否三嶋神ヲ天満宮ヨリ守戻シ奉祝ノヨシ申傳也  
今ノ三嶋ノ杉ハ都而延寶年中源五右衛門ノ植木也、

右於上宮ニ兩社一所ニ神祭有之節ハ上氏子八人下モ氏子八人都合十六人宛兩日ニ神祭仕由  
後兩社ニ祝ハレ候テモ三島宮神祭ニ上氏子客中ニ參リ、上ノ宮神祭ニハ下氏子客中ニ參リ相調ル處寛保年中ヨリ相談之上格中ニ相成  
右兩社共泉東甲斐地分限ノ内ニ有  
兩社神主先年ヨリ泉屋舖ヨリ相勤ル

四万川天満宮棟札記

凡 梵天帝尺天長地久主願圓滿願王現世安隱子孫繁昌在所安全萬民和合 大工長谷太郎左衛門 神人藤原氏 新衛門  
社 奉上棟天満大自在天神御本地三万燃燈佛御法建立 大願主長谷部信貞右兵衛尉 神主藤原氏與三左衛門  
建 四大天天十方三世神祇來輪影向其時天文二十三年甲子歲霜月上旬七日 小工 刈五郎

小旦那 太郎左衛門

彌左衛門

日本國土劬高岡郡壁路山四万川天神御寶殿立初テ凡五百年

二郎兵衛

長衛門

巳前壬 甲歲至テ 三島之鳥居 百四歲之處 今天文廿三甲子歲建立

梵天帝釋天長地久御願圓滿願主氏子子孫繁昌萬民和合

所庄屋 作之丞

稱 宜 市太夫

神 主 長橋利兵衛

中岡文右衛門

奉上棟天満大自在天神御本地三万燃燈佛御社建立  
四大天王十方三世神祇來輪影向其時寛永十二乙亥年九月十五日

日本國土劬高岡郡壁路山四万川天神御寶殿 敬白



梵天帝尺

所庄屋

廣瀬 佐丞

奉棟上天滿大自在天神御本地三万燈明佛御寶殿建立

神主於泉屋敷 中岡市良右衛門

四大天王

万治貳年<sub>巳</sub>亥霜月上旬八日

本願主  
大工

長橋利兵衛  
岩本又介  
並ニ亦市

日本國土芴高岡郡四万川天神御寶殿

敬白

梵天帝尺

天長地久

奉上棟天滿大自在天神御本地三万燈明佛御寶殿建立

大工  
庄屋  
大且那

中岡 文之丞  
中平 左之丞  
長橋 傳之丞

四大天王

寛文三<sub>庚</sub>卯秋九月吉日成就

社僧  
鍛治

別當書之  
在所角平

日本國土芴高岡郡四万川天神

敬白

梵天帝釋

天長地久

奉棟上天滿大自在天神御本地三万燈明佛御寶殿建立

大工  
庄屋  
横目  
神主

左 太郎  
中平才之丞  
廣瀬勘介  
中岡文右衛門

四大天王

寛文十一年十一月中旬十九日

長橋平左衛門  
長橋彌右衛門  
長山家ヨリ來ルニ  
中平 甚之丞

此ノ行不明

此御寶殿御社殿横殿鳥居也

寛文三<sub>庚</sub>卯九月成就仕處寛文六<sub>丙</sub>午七月三日ヨリ四日洪水ニ社床流破  
下ニ宮三嶋大明神ニ寛文十一年霜月中旬ニ此宮山社所觀上仕也

此節兩社一所ニ奉祝也



梵天帝尺 天長地久

奉上棟天滿大自在天神御本地三万燃燈佛御社建立

四大天王 寶永七庚寅九月吉日

庄屋 廣瀬 五介  
神主 中岡市良右衛門  
社僧 圓明寺

日本國土芴高岡郡四万川天神御寶殿立初テ凡六百八拾年卜有

今按天文二十三ニ五百年ニシテ寶永七迄六百廿九年ニアタル哉

梵天帝尺 天長地久

奉上棟天滿大自在天神御本地三万燃燈佛御社建立

四大天王 享保十九庚寅九月吉日

庄屋 廣瀬 五介  
社人 長谷部 攝津  
神主 藤原氏中岡佐兵衛  
社僧 圓明寺

日本國土芴高岡郡四万川天神御寶殿

敬白

梵天帝釋 天長地久御願 圓滿願主氏子現世安隱

子孫繁昌在所安全万民和合

奉上棟天滿大自在天神御本地三万燃燈佛御社建立

四大天王 十方三世神祇來轡影向其時

大工 平八  
庄屋 廣瀬 五介  
信貞十一世孫長橋嘉信  
神主 中岡佐兵衛貞親  
神人願主 長谷部河内  
小工 源太郎

天文二十三<sup>甲</sup>子年信貞公建立仕玉<sup>甲</sup>安永三<sup>甲</sup>午歲迄二百廿五年

幸作 熊之丞

弥曾次

京之助

日本國土芴高岡郡壁路山四万川天神御寶殿立初テ凡七百二十四年 敬白

安永三年改

平兵衛 傳會藏  
與會藏 茂次郎  
清次郎



一、本村ノ方言 著シキモノ二三ヲ左ニ示サン  
 ワテ(岡ノコト) デヨイモシ(火) ダンム、ゴネンガイリマシタ(種々ナル品ヲ頂戴イタシマシタ) ワシシタ(私方)  
 イタクラ(菴) ゴンシタ(來ラレマシタ) コンコ又ノオチラン或ハコーセン(黍ヲ煎リテ粉トナシタルモノ) タコーラ  
 (竹原) ケンガク(ケレドモノ意) ハエル(始メル、初メル) メンヲシコフ(御飯ヲコシラヘル、又ハ御飯ヲ仕掛ケル)  
 (チ(他處ノ義))

四万川、地質、氣候産物等

一、四万川地質 非常ニ肥沃ニシテ四万川兩岸ノ地ハ殊ニ年僅少ノ肥料ヲ施シテ多量ノ收穫アリ  
 然レドモ冬季ノ  
 一、四万川氣候 寒烈ニシテ積雪數尺ニ及ビ且ツ其季間非常ニ長キガ爲メニ收穫ヲ減少セラルルハ残念ナル次第ナリ  
 一、四万川産物中主要ナルモノハ三極(製紙原料) 茸類(舊作法ノモノ) 茶等ナリ  
 一、特ニ四万川ノ地ヨリ、ならしめじト稱スル茸ヲ産ス、此ノ茸ハ八月頃、すゞ竹ノ林中ニ生ズルモノニシテ、高サ四寸  
 傘ノ直径三寸四五分、柄ノ間サ六寸程アリ、干シテ貯フニ適セズ、唯生ヲ料理セルモノハ香味共、美ニシテ一度ビ味フ  
 モノハ忘ルル能ワズト云フ。  
 又昔ハ大野ヶ原ノ頂上ニアル蘇根ヲ堀リ取りテ藥種店ニ賣捌ケリト云フ、普通ノ蘇ヨリハ非常ニ小ニシテ又非常ニ高價  
 ナルモノナリシガ、漢法ノ醫術捨タルト共ニ今ハ之レ有ルヲ知ル人モ無キ位ニナレリトイフ。

茶 堂

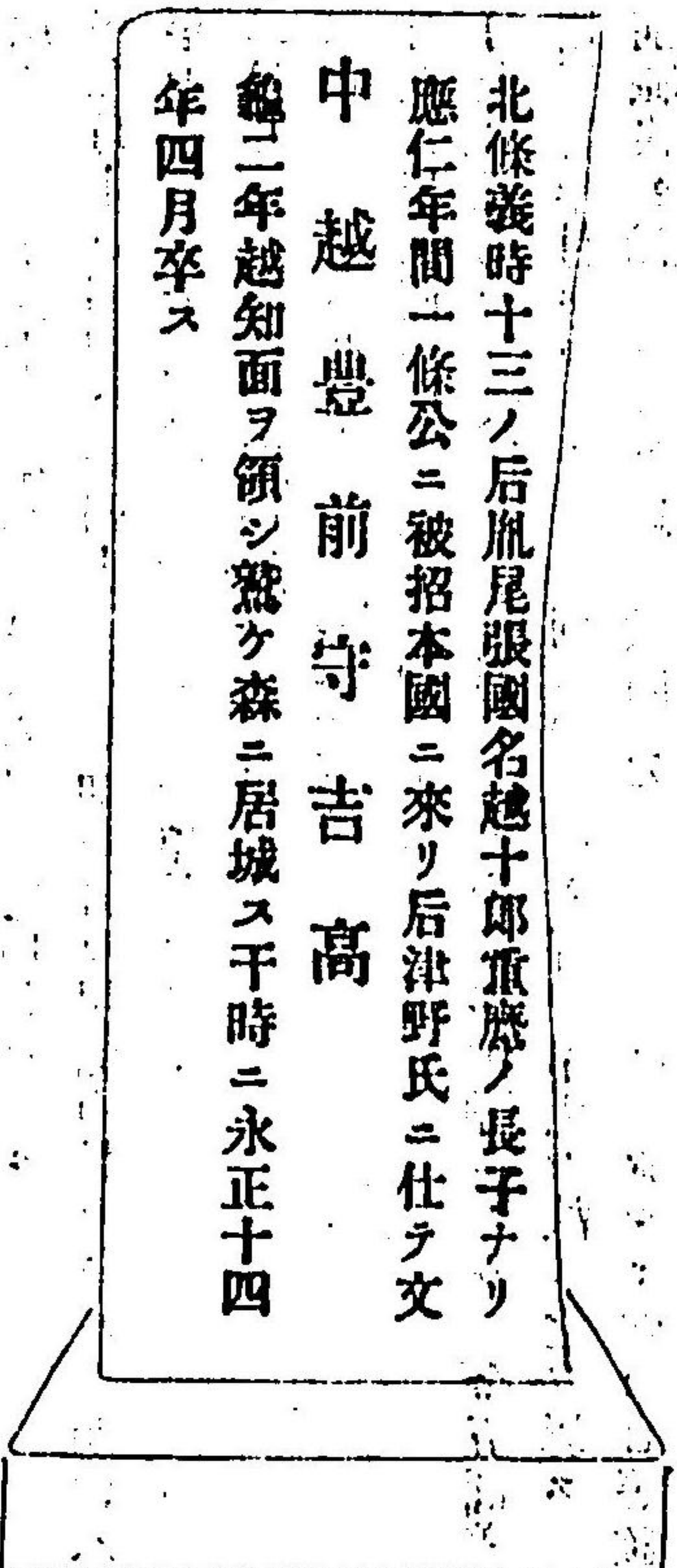
東西津野村ノ各部落ノ入口ニハ必ズ茶堂ト稱スル一個ノ建物アリ、概ネ二間四方位ノ草茸ノ板屋ナリ、而シテ必ズ一方ノ  
 上段ニ地蔵尊、觀世音等ノ石像ヲ數株立テ並ベテ傍ニ爐ヲ設ケタリ此レハ冬時行旅ノ雪宿リ、休憩等ニ備ヘ、又夏時旅客  
 ノ休息所、宿所等ニ供センガ爲メニ設ケタルモノニシテ特ニ盛夏(凡三十日間)ニハ部落毎ニ順次當番ヲ定メ日々毎戸一  
 人ツゞ此ノ堂ニ出張リテ各自費ヲ投ジテ行旅ノ苦ヲ慰センガ爲メニ茶ヲ煮テ客ヲ待ツ客到レバ則チ懇ロニ慰リ茶ヲ出シ豫  
 テ用意セル團子、餅、菓子ナドヲス、ム、實ニ珍シキ良風ナリトイフベシ。

檮原ノ寺址

檮原ニハ古キ寺ノ趾非常ニ多シ南路志ニヨレバ  
 宮之野ノ明龜山長命寺ハ禪宗檮原吉祥寺末、本尊地藏、初瀬ノ萬福寺ハ本尊藥師、全西壽寺ハ本尊文殊、全福壽山大養寺  
 ハ本尊彌陀、全寶積山善應禪寺モ本尊阿彌陀ニシテ以上何レモ寺退轉後本尊ノミ殘レリ、又、中平ノ中平山海藏寺ハ禪宗  
 吸江寺末、本尊ハ十一面觀音ナリ一度廢滅ニ歸セシマ夢窓國師中興セリトイフ。

中越吉高ノ碑

中越吉高ノ碑ハ越知面ニアリ  
 三島神社ノ前ヲ東ニ進ムコト約三町許ニシテ左側ヲ高ク三十段程登ル石階アリ



之ヲ登レバ道路ヨリ三間位ノ高所ニ上圍ノ如キ自然石ノ碑アリ、此處ハ稍々廣キ平地ニシテ左側ノ五畝歩許モ有ラント思  
 ハル、細地ヲ豊後屋敷ト稱ス、即吉高ノ邸趾ナリト云フ。  
 碑ハ高五尺、巾二尺以上モアル自然石(水成岩)ニシテ、其台石ハ高サ七寸ニ、巾三尺四方ノモノト、高サ七寸巾六寸ノ切  
 石ヲ一間四方ニ築キテ、此ノ周圍ニ高二尺五寸ニ二間四方ノ欄垣ヲ建テアリ(國枝氏ノ撰文ト聞ケリ)

中越神内

中越神内翁ハ吉本元仙等ト與ニ近代ノ人物トシテ夙ニ世ニ知ラル令息中越中氏ニ誦ヒテ翁ノ畧歴ヲ得タリ則左ニ掲グ  
 一、父ハ中越治左衛門トイフ(文久二年戊閏八月十日死)  
 一、母ハ草トイフ(死去年月日不詳)  
 一、出生年月日 文政元年二月十四日



一、子供時代 別ニ記スベキ程ノコトナシ

一、修學時代

- 1、九歳ヨリ十一歳ノ春迄大野見村市川權平ヲ師トシ當時ノ普通學科ヲ學ブ
- 2、十一歳ノ春ヨリ三年間高知市帶屋町某ニ就キテ當時ノ普通學科ヲ修業ス
- 3、十四歳ヨリ十六歳迄須崎町古屋造作ヲ師トシ書ヲ學ブ

一、職務

- 1、天保十年國境唐岩口番人申付ケラル(明治三年閏十月十日迄勤務)
- 2、安政三年越知面村庄屋下年寄申付ケラル(明治六年九月十日迄)
- 3、明治三庚午年閏十月十日第八等官唐岩口守關申付ケラル
- 4、明治六年九月十日高岡郡第四十二區越知面村々用係申付ケラル(明治八年十一月三十日迄)
- 5、明治八年十一月第十三區第六小區戶長申付ケラル
- 6、全年十二月廿五日學校周旋係兼務ヲ申付ケラル
- 7、明治十二年三月七日改革ニ依テ職務差免
- 8、全年五月五日越知面小學校周旋係申付ケラル
- 9、全年全月全日元第十三大區六小區戶長勤務中職務勉勵賞トシテ金五圓差遣ハサル
- 10、爾後村用係等申付ケラレタルモ別ニ記スベキ程ノ事ナシ故ニ之ヲ畧ス
- 11、明治以前職務勉勵ノカドヲ以テ數回賞金ヲ差遣ハサレタルモ年月日等確カナラザルヲ以テ之ヲ畧ス

一、嗜好 家業タル農業ハ素ヨリ此外舊書詩歌俳句園藝等ヲ好ミ酒亦好愛セリ

一、性質 快活ニシテ万事ニ拘泥セズ閑アラバ小兒ト共ニ喜戯シテ時ノ移ルモ知ラザルガ如キ有様ナリキサレモ何事ニ

一、号 白翁ト號シ後又一ノ字ヲ加ヘ一白翁ト號ス又別ニ越路山ト云フ其故ハ誰レモオデサンノトイフニヨレリト

一、死去年月日 明治三十三年閏八月十三日(原文ノ儘)

實業家 川上宗吉

氏ハ西津野村越知面永野農某ノ息男ナリ性機敏ニシテ實業ニ志シ殊ニ三ツ又製作ニ熱心ニシテ能ク其業ヲ成功シタルノ人ナリ村民氏ニナラシ始メテ三ツ又事業ヲ起スト雖モ其成績未氏ニ及ブモノナレトサレバ村民ハ氏ヲ三ツ又ノ元祖ト崇敬シテ止マズ氏ハ明治三十一年縣第四回勸業品評會ニ白三ツ又ヲ出品シテ褒狀ヲ得タリ爾後益熱心ニ同業ヲ勵ミケレバ今ハ村ノ大實業家トナルニ至レリ

三ツ又製作經歷談

一日川上氏ヲ其邸ニ訪ヒテ三樞ニ關スル經歷談ヲ聽ケリ左ニ其ノ大略ヲ記スベシ

三ツ又製作ニ着手シタノハ明治十九年デシタノ年ハ試作ノ事トテ僅カバカシクデシタガ翌二十年ニハ苗一本ヲ一厘五毛ノ割デ一千五百本ヲ買求シテ植付ケマシタ之ハ三ツ又トイフモノハ植付ケノ年ヨリ三ヶ年以上ヲ經スト採リ入ル、コトガ出來マセンノデ乃明治二十三年ニ至リ刈トリ製作シタ白三ツ又五貫五百目アツタノデス(其頃ハ近頃ノヨリニ削リ器ガナイノデ竹ノヘラニテケツリマシタ)其レヲ一九代價四十錢(目下ハ一九三圓内外ナリ)ノ割合デ賣却シマシタ

少シ話ガ後ニ戻リマシガ明治二十一年ニハ靜岡縣ヨリ種實五合ヲ六十錢ニ購求シ自ラ苗ヲ作ツテミタノデスガ其種實ガ不良ナ爲メデシヨ一僅ニ三千二百本餘バカリ生ヒ立ツタノデス之ヲ植ヘ付ケ三ヶ年ノ後刈リ取り之ヲ白ニ仕上ゲ高六九位アリマシテ代價三圓餘ヲ得タノデス其次ハ八十錢ニテ種實一斗ヲ買ヒ入レ苗ヲ作リマシタトコロガ二萬本以上ヲ得マシテ之ヲ例ノ通り植ヘ付ケ例ノ通り刈トリテ白ニ仕成上額二十四九餘ガデキマシタ十二圓五十錢ノ代價ヲ得マシタノデス之レヨリ種實ハ自分ニトリテ一切外カラ買ヒ入レスコトニシテ一年ノ毎ニ多額ノ植ヘ付ケヲシマシタトコロガ明治三十一年縣第四回勸業品評會ヘ出品シテ以外ニモ谷河縣知事閣下ヨリ褒狀ヲ賜フノ榮ヲ得タノデ私一家ノ幸福之ニ比スモノハアリマセンデシタ

其レヨリ後益國家ノ爲メト思ヒ一家舉ツテ精勵ニ精勵ヲ加ヘテマイリマシタノデ之ノ頃デハ毎年白ノ六七十九ハ取得スル事ガデキルヨリニナリマシタ (中越弘衛氏投稿)

横貝部落ノ祖河上主殿頭

(中越氏投稿)

河上主殿頭ハ伊勢國多度郡ノ内一万石ノ領主ナリシモ、慶長五年關ヶ原ノ役ニ西軍ニ屬セシガ、敗北後ハ家老大田内藏助ヲ從ヘ、伊豫國道後ニ没落シ、其後遂ニ七佐國高岡郡越知面長谷ニ來リ津野領主ヨリ居屋敷等ヲ拜領シテ此處ニ居住セリ男子三人アリシモ不幸ニシテ何レモ早世シ、續ヒテ妻モ死亡セシカバ其後再ビ妻ヲ迎ヘテ三人ノ男子出生セリ

太郎兵衛、次郎兵衛、三郎兵衛ハ即チ主殿頭ノ後妻ノ産ムトコロニシテ長子太郎兵衛ハ長谷ニテ父ノ後ヲ繼ギ次子次郎兵衛



衛ハ横貝ニ三子三郎兵衛ハ大野見村大又ニ兄弟三人各其所ヲ別ニシテ能ク其部落ノ開拓ヲナセリ、其レヨリ子孫次第ニ繁榮シ横貝ノ如キ今ヤ戸數十六戸ヲ有スルニ至レリ、而シテ太郎兵衛ノ墓ハ長谷ニ、次郎兵衛ノ墓ハ横貝部落ノ中央ニアリ、近頃ニ至リ川上萬彌氏ハ石碑ノ上ニ屋根ヲ設ケ以テ雨露ヲ防グリ、(碑面ニ治郎兵衛トアルハ次郎兵衛ノコトナルベシトイフ)

太田家老ノコト

太田内藏助は生國伊勢國那可多度郡之郡主川上主殿頭の家老にして武田の庄一千石を知行す、然る處慶長五年に石田治部少輔逆心の時美濃國關ヶ原にして主君主殿頭打負て西國に没落之節四國土佐國津野山之内長谷へ没落して其後幡多郡植塚村に居住して漸く星霜を経る予が生國書留置候也

是慶長十二丁末歲二月十二日書之

太田内藏助正繼判

右ハ太田内藏助自筆ノ經歷書ノ寫也

川上萬彌氏ノ住宅

川上萬彌氏ノ住宅ハ今ヲ距ルコト約二百七八十年ノ昔即川上次郎兵衛時代ノ建立ニシテ最モ古風ノ構造ナリ

川上家ノ寶物

川上家ノ寶物ハニアリ、一ハ川上柳太郎所藏ノ主殿頭ノ鎧(別圖ノ如キモノ)一個、一ハ川上馬藏氏秘藏ノ主殿頭自筆ノ系圖之ナリ、

山下木工並ニ竹村氏

山下木工ハ元信為政訪ノ人ナリ、藤原經高ノ旗トナリテ、土佐國高岡郡半山村ニ住セリ、初メ延喜十二年經高關東ニ罪ヲ得ルヤ、潛ニ豫忍管生山ニ下リテ時ノ到ルヲ待テリ、翌癸酉年三月赦免ニアフ、則土佐ニ移リ津野庄司ト職フテ其領地ヲ畧取シ、越知ノ城ニヨル、同十四年椿山ヲ伐リ開キテ椿山村ト號シ、居所ヲ床鍋ト稱ス、同十五年上洛シテ津野庄一圓ヲ拜領シ、之ヨリ津野藤藏人經高ト稱セリ、木工ハ實ニ此時信為ヨリ經高ニ從ヒ來リシモノナリ、斯クテ當國高岡郡半山ニ來リテ杉山ヲ伐リ開キテ居所トナシ杉ノ川村ト名付ク、其頃津野氏ノ東ニ境シテ大平相模守ト云フ守繼アリケリ、其族下ニテ、左川山分ノ森、西森、和田、洞林トイフ四士、度々津野領、西半山、赤木等ニ亂入シ財寶ヲ掠メ取リ、民家ヲ燒

クナド乱暴狼藉ヲ極メシカバ、木工僅ニ二十二卒ヲ卒テ黒川峯ニ登リテ彼等主從廿五人ヲ陣ノウネノ小ウチト云フ所ニ要撃シテ之ヲ壓シ且ツ其首ヲ姫之野ニ梟ス、然ルニ此事忽相摸守ニ聞ケレバ大平大ニ憤リテ「國司ノ下知モナク黒川峯ヲ越テ左川分ニ踏入り、斯クモ無法ヲ能クモ働キシコトヨ、イザ々々津野殿ニ物見セテ參ラセン」ト戰備ヲナセリ、サル程ニ矢野幡磨守、經高ガ迷惑ノ程ヲ察シ申裁トナリテ木工ノ職ヲ奪ヒテ浪人トナシ大平ニ謝シケレバ大平モ許容アリテ事ナク治マリケリ、コレヨリ木工ノ家ハ永正年間迄十三代ノ間浪人シテ代々、杉川尉之助ト稱セリ  
十三代尉之助子無シ、竹村弥平次ヲ養テ子トナス、弥平次武勇アリ津野氏ニ召出サレテ弓大將トナリ十五石ヲ食ム、之即現今、半山橋原等ニ在ル竹村家ノ祖先ナリトイフ。

竹村彌三兵衛信忠

竹村弥三兵衛信忠ハ竹村氏第十六代ノ祖ナリ、父佐信故アリテ知行並ニ士職ヲ返上シ、杉川村庄屋役ヲ勤メ居リシガ、元龜元年庚午十二月廿九日ノ夜信忠ハ佐川山分ノ侍、西森源内ノ兄弟三人ヲ討取リシ軍功ニヨリ盛狀(巻頭掲グルモノ)之ナリ)並ニ本領日浦、中野ニ於テ二十石ヲ賜ハリ士トナリテ、父ノ指上ゲシ士職ニ復シタリ翌年申正月八日津野山口押七十五人ノ組ニ入りテ相勤メタリ、後老年ニ及ビテ楠木神母ケ奈呂ニ隱居ス、年八十九歳ニテ卒ス

竹村助左衛門尉正信

竹村助左衛門尉正信ハ信忠ノ嫡子也元祿十一年豫州ノ合戰ニ津野藤藏人ト名乗リ丸ノ内ニ一ノ字ノ紋ヲ免サレタルコトアリシガ、遂ニ津野氏ヨリ安藝ノ國毛利元就ノ許ヘ人質トシテ遣ハサレ、小早川隆景ニ從ヒテ嚴島ニ住セリ、其後九年ヲ經テ天正四年ニ放テ許サレテ國ニ歸ル、慶長五年九月廿九日津野親忠切腹シテ主家斷絶スルニ及ビ、其遺物ヲ東照公ニ獻納ス、即信正ハ其使者トシテ中平掃部ノ下知ニヨリ藤堂和泉守ニ至ル

和泉守ヨリ掃部ニ與フルノ書ハ左ノ如シ  
貴墨令被見候親忠切腹有之シ付キ領内之内大野見ハ古屋越前守濱崎十ヶ條ハ今橋藏之進半山ハ竹村助左衛門津野山九名ハ其方支配シ郷村之司主申付段一々令聞知達シ上分御感不斜候猶悉曲之儀ハ追而可申付者也  
慶長五年十月 日

中平掃部 どの

藤堂 和泉守



後上記ノ如ク半山郷ノ司主トナリテ特ニ七年間ハ年貢軍役等ヲ免セラレタリ、此時藤堂隆虎ヨリ受領セシ脇差ハ家寶トシテ珍蔵ストイン、四十九歳ニシテ浪人シ、八十二年、日浦ノ隠宅ニ卒ス時ニ寛永九壬申年正月八日、法名ヲ春岳常秀禪定門ト號ス

竹村家ノコト

西津野村大藏谷部ノ竹村家ノ祖ヲ竹村甚右衛門敬信トイフ、敬信ハ津野經高ノ旗下山木工ガ十七代ノ孫彌三兵衛ノ三男ナリ半山郷ノ川村ニ住セリ二代宇右衛門ヨリ四代甚右衛門迄三代、年數凡百ケ年間安積(清右衛門)家ノ支配役ヲ相勤ム甚右衛門ノ時願ニ依テ名字帶刀共儘ヲ以テ御町浪人仰付ケラレ城下北奉公人町ニ住セシガ須崎浦ニ扣地等アリシヲ以テ同地ニ移住シ六代竹村健七ニ至ル迄全地ニ住居セリ、健七ハ文政十亥年勝手筋ヲ以テ橋原村ニ引越シ居住シ、天保八酉年五月六日御郡奉行橋原村御廻見ノ節、健七ヲ御呼出シニ相成リ「先達而中平村四万川村痘流行ニ付地下人共難澁ノ場合米錢相與へ候趣奇特之至ナリ」トノ御褒詞ヲ蒙リ、又同九亥極月廿一日御郡方御切紙ヲ以テ申渡シニ「當年大藏谷組頭治左衛門家内痘煩之節晝夜共立テ入り懸ニ世話致シ痘中地下用差間之節厚ク引受ケ當用不差間様取斗他村共入組ノ節時々内治致取扱諸人ノ爲メニ相成リ其餘家内隣家類共睦マシク相交ル旨奇特ノ至也」依之御褒詞ノ上御吸物御酒等ヲ頂戴仰付ケラレタリ、天保十三年寅五月廿三日(地下浪人相立ツル)ト三代年數凡九十六ケ年)同郡與津村渡邊儀左衛門職分並ニ領知四十四石五斗七升物成米五石五斗四升七合共讓受ケ郷士ニ召出サル、七代猪之助敬義(本書別ニ敬義ノ傳アリ就テ見ルベシ)ハ幼ヨリ文武ヲ講シ長ズニ及ンテヨク王事ニ勤ム、明治維新后藩廳ヨリ東征ノ功ニヨリ新御留守居組ニ進メラレ、四人扶持ヲ下賜セララル、弟敬鶴ヲ養子トシテ家ヲ嗣ガシム、八代敬鶴ハ明治十二年二月ヨリ全廿二年マデ相次デ松原、橋原、初瀬、中平等ノ各村戸長並ニ學務委員ニ舉ゲラレ明治二十二年六月ニ新村西津野村収入役ニ全二十五年七月ニ全村助役ニ舉ゲラレテ終始一貫勵精治ヲハカリシカバ治績見ルベキモノ亦少カラズトイン、九代竹村敬凡氏モ亦久シク西洋野村助役トシテ夙ニ令名アリシガ(明治四十年)昨年ハ撰バレテ縣會議員トナリ、現ニ全議員並ニ縣參事會委員トシテ縣治ニ盡クサレツ、アリ、

關所

藩政時代ニハ諸藩相競フテ境ヲ守リ、各所ニ關ヲ設ケテ行旅ヲ監ス、之ヲ關所トイフ、南路志ヲミルニ

一、關所 橋原口豫州境番人上下二人扶持前務米九石、酒屋壹軒、玉川善右衛門。山子口内番所番人下元武助

一、關所 宮ノ野 與州境番人 二人扶持一石二斗銀百目  
一、關所 中平 與州境番人上下二人扶持所務米四石二斗  
此等ノ關所モ今ハ何處ニアリシカ知ル人サエ少ナキ様ニナレリ

橋原

橋原ハ又橋原トモ書ケリ延喜式兵部條ニアル五橋、丹治川ノ五橋ハ今ノ橋原ナルベシ此ノ地ハ昔津野氏ガ來レル時ニ一面ニ橋ノ木生茂レリシカバ斯ク名ケシナリトイフ。

津野家ノ記録

津野家ニ關スル記録ハ  
津野家古語拾遺(橋原、中平氏ニ藏セリトイフ)  
津野家年表錄 (全 上)  
津野氏家系考証 片岡直二郎藤原藏人輯 片岡勇之進藤原直前考等ハ最モヨキ讀物ナリ。

那須家

重宗氏ノ妻ハ銘 此ノ間ニ幸(在東京ノ渡邊氏内室)、義ノ二女アリ而シテ全家ノ相續者ハ義女ナリトイフ今、四万川ニ住ス、  
那須氏ノ記録トシテハ唯田中伯爵ノモノセルモノヲ重宗氏ノ妹貞子ノ夫、川西地ノ掛橋義信氏ガ所持スルノミナリトイフ。

天徳山吉祥寺

天徳山吉祥寺ハ西津野村橋原川西地ニ在リ元、禪宗吸江寺ノ末寺ナリシガ明治廿九年千住院ト改メ曹洞宗ニ移レリシヲ明治三十三年再興セルモノナリ今モ曹洞宗ノ末寺タリ津野孝山公ノ菩提寺トシテ有名ナルコトハ別項ニ記スルガ如シ、例ノ南路志ニ記スル所ヲ左ニ示サン

天徳山吉祥寺ハ禪宗吸江寺末ニシテ本尊ハ大日、開山ハ天徳祐和尚、津野殿時代寺領三石三斗有之大般若經百八十卷虫喰寫本、半本書物四十八部有リ、恒泉寺與院ト申漣ノ根岩穴子安觀音ト申傳諸人參詣ス、



治謀記事曰、親忠ハ慶長五年盛親所追番我美郡岩村孝山寺にて自害せらるる法名孝山寺と云ふ、孝山寺は親忠の菩提寺也  
舊津野山にて今に至る迄其靈を祭ると云津野山九ヶ村有、船戸、北川、芳生野、越知面、四方川、橋原、初瀬、中平、  
松原也是にても祭る橋原本村十五ヶ村ハ一所に祭る、青祥寺といふ、禪寺にて祭といふ、津野山、大野見、須崎にて祭  
るは八月より十一月迄の内九日、十九日、廿九日此内を祭るとして祭と云又七月卅日の間接待す奈呂山より津野山百石分  
所々にて接待す、或は薬師或は地藏を主として昔より今に至る迄不絶祭るといへり孝山寺の爲とて君徳の余慶なるべし。  
此ノ寺ノ西北ニ橋原寺通トイフ處アリ、又相隣リテ鐘ツキ堂趾アリ、然レモ橋原寺ノ事今ハ知ルニ由ナシ

津野山六ヶ寺

- 橋原 吉祥寺
  - 船戸 金光寺
  - 芳生野 願成寺
  - 北川 号泉寺
  - 越知面 善福寺
  - 四方川 圓明寺
- 昔ハ以上六寺ヲ津野山六ヶ寺ト稱シ何レモ臨濟宗ナリキ  
何レモ山内一豊公御長男湘南傳法(吸江寺住職)ノ開山ナリ

泉のから松

橋原ノ中原利運氏ノ庭園ニ珍シキ木一本アリ高サ殆ド二丈餘、根元ノ回り六尺餘モアラント思ハルル松柏科ノ高木ナリ、  
其樹表ハ一見五葉松ノ如ク、又樅ノ如シ、技葉ハ樅ニ似タレモ葉ニ於ケル樹脂道ノ位置、球狀果ノ大形ナルコト等ハ  
他樹ニ見ルベカラザル特徴ニシテ葉ノ厚ミハ幅ニ二倍シ、其ノ横断面ハ菱形ヲナセリ  
此ノ樹ハ中平氏ノ祖先ガ征韓ノ軍ニ從ヒテ大功ヲ立テ凱旋ノ際、諸種器物ナドト共ニ彼ノ地ヨリ分捕シ來リテ一ヲ氏神  
ノ境内(橋原三島神社境内ニ存ス上記ノ者ヨリ稍大ナリ)ニ植エ、一ハ邸庭ノ中島ニ植エヲキシモノナリトイフ、サレ  
バニヤ、此ノ木ノ名ヲ知ルモノナク、唯から松ノトノミ稱シ來レリ  
余中平氏ニ到リテ其一枝ヲ請ヒ、持チ歸リ之ヲ調ベシニ其學名 Picea Pollio Carr. ハリモミ、或ハばらもみ等稱シテ松

柏科ハリモミ屬ニ属スルモノニシテ我國ニテモ東北(信笏ヨリ奥羽)地方ノ深山ニ産スト云フ  
蓋シから松トハ「韓土の松」ノ意ナラン。

橋原本村ノ七不思議

七神田、七枝シ葉屋、龍の駒、子安の觀音、疫屋敷、疫野、觀音石  
文明ノ今日、其不思議ヲ云フハ野暮ナリ依テ贅セズ。

善之進暴風雨

中平善之進ノ命日舊七月廿五日夜ヨリ廿六日ナリ、此兩日ニアル暴風雨ヲ善之進じけトイフ。

鷲ヶ森城趾

一、鷲ヶ森城趾ハ越知面木村部中央三寶山頂ニアリ文龜二年北條義時十三世ノ孫中越十郎重磨ノ長子中越豊前守吉高越知  
面ヲ賜ハリシ此城ヲ築キシト云フ今モ尚堀ノ跡ナドハ明ニ認め得ルナリ  
現今ハ三寶神ヲ祭レル社アリ

越知面ノ三島神社

一、郷社三島神社ハ越知面田野々部最東部ナル宮原ニアリ中越三河守吉長阿蘇藩田ノ合戦ニ敗軍シ遂ニ豫劔三嶋迄退陣セ  
リコ、ニテ長曾我部元親ノ軍ニ會タリ故ニ三嶋大明神ニ祈願ヲ籠メ再陣シテ大ニ戦ヒ遂ニ勝ツ此ノ大願成就セルニ依テ  
三嶋大明神ヲ奉迎シ宮原ニセリト時ニ天文十七年九月ナリキ  
南路志ニ云、三嶋大明神正躰ハ鏡三、木像五、祭禮六月十五日、九月十九日、太夫吉門民部太夫同義太夫也社領地檢帖  
ニ三嶋神領ト有

木像五尊ノ内一尊之裏ニ天文十七年中平菊月良辰願主長谷部朝臣中越吉高欽白  
此の神像を里人鬼子神と云ふ長六尺五寸偏ニ鬼の如し故に鬼子神といふ。

越知面ノ地形ト地質

越知面ハ東西 里南北 里ノ一小區ニシテ東ハ芳生野、北ハ伊豫久万山、西ハ四方川、南ハ北川ニ何レモ高山脈ヲ以  
テ界シ僅ニ西南ノ一方ノミ開ケテ橋原後別當ニ接セリ處々ニ支脈ヲ出シ其間ニ田畑アリテ平且ノ地少シ然レドモ田野々本  
村ハ稍平地多クシテ田畑最モ多ク永野長谷ハ嶮ハシク且高クシテ冬季ハ寒氣甚シ



飯落ハ本村田野々、永野、井ノ谷、大田戸、横貝、長谷ノ七個ヨリ成リ其内最大ナル本村最小ナル長谷ナリ  
川ハ東ヨリハ大田戸川ト横貝川ト相合シテ流ル、モノニ大郷川ノ加ハルアリテ本村川トナリ之ニ永野川ト井ノ谷川ト相合  
シテ廣瀬川トナリテ南流スルモノト富原ニテ相合シ尙西流シ西端ヨリ流レ來ル田野川ト相合シ始メテ橋原後別當ニ入ル

越知面特産物ノ事

一、特産物トシテ舉グル程ノモノハナシ然レモ多額ニ産スルモノハ栲、三ツ又、茶、椎茸、柿等ニシテ、麻大根等ハ永野  
井ノ谷等ニ最良ナルモノヲ産ス而シテ茶、椎茸、麻等ハ愛媛縣ニ輸出シ栲三ツ又ハ須崎佐川等ニ賣リ出ス稀ニハ伊豫ニ  
輸出スルコトアリ

越知面特有ノ風習

一、七月念佛 中越長左右衛門正友、津野親忠弘法大師ノ慰靈祭ニ行フ一種ノ藝ニテ、シナーモ一ミ。ドーバイト言フテ  
踏ムナリ昔ヨリ今日迄傳ハリオルナリ  
俗ニ曰フ人死シテ迷途ニ往クヤ煽魔王ハ先頭第一ニ越知面ノ七月念佛ヲ舞シヤ否ヲ問フト呵々  
二、農夫ノはゞき(方言ナラン)ヲ用ユルコト之レハ蒲トイフ植物ノ莖ヨリ製セル一種ハ脚神ニシテ昔ヨリ農夫ノ山畑等ニ  
出ヅルハ又雪ノ日外出スル時ニ用ユル風習今ニ依然タリ  
三、お茶酌ミ 陰曆七月中ハ所々ノ道傍ノ茶堂ニ(一小堂ニシテ必ず地藏菩薩ヲ祭レリ)各戸順番ニ茶菓子ヲ持チ出テ通  
行ノ旅人ニ之ヲ進ム故ニ之ヲお茶酌ミトイフ起因何時代ナルカ知ラズ  
或ル所ノ茶堂ニ「八月ハサジ空腹カロー地藏様」トアリシト蓋シ地藏様ニハ茶菓ヲ献ズルニヨルナラン  
(上記二、三項越知面部落ノミニ非ズシテ本村一般ノ風習ト稱スベキモノナリ)

津野定勝公墓碑

ハ橋原上成組字松谷ノ五勝庵ニアリ近年有志ノ建テシモノナリトイフ、定勝ハ親忠ノ養父ナリ初メ泰元親ト戰フテ勝タズ  
遂ニ和ヲ請ジ親忠ヲ納レテ子トナシ、已ハ退ヒテ松谷ニ居ルト、又定勝ハ文武ヲ兼タル良將ニシテ諸藝ニモ通ゼリ、昔テ  
飛鳥井雅量ニ蹴鞠ヲ學ビ終ニ鞠道八足ヲ授ケラレシコト或書ニ見ユ、

田植歌

津野氏ハ累代高岡郡西部ノ領主トシテ恩威ヲ布キ、其遺澤永ク後世ニ及ビ風流韻事ノ今猶ホ人口ニ膾炙スルモノ多シ、左

ニ示セルハ何モ皆永正年間、津野元實ガ一條勢ニ擊破ラレテ惠良沼ニ戦死セルコトヲ歌ヘルモノナリ  
津野殿の召しの肖さいたる花は八重菊。  
津野殿の出し其の日の夕暮に物の哀を惠良で止めた。

長橋藏人尉延秀ノ墓 (或ハ信秀ト書ス)

四万川ノ内、中野川小字左古ニアリ、

皿ヶ森

越知面ニアリ古城趾ニシテ風景ノ地ナリ、

中越越前守ノ居城地

即、越知面ノ皿ヶ森ナリ

長橋藏人尉信秀ノ居城趾

四万川ニアリ、壁路山ト稱ス、四万川ノ三角州ニシテ峻崖ノ小丘ヲナス、要害甚堅固ノ地ナリ、磯、磯等ヲ所々ニ認ムベシ、

海津見神社

有名ナル海津見神社(昔ノ龍王大明神)ハ壁路山ノ頂上ニ鎮坐セリ、此ノ地ハ古城趾ニシテ且風景ノ地ナリ賽者常ニ絶エズ

島ガ畦城趾

壁路山ノ西北對岸島ガウネト稱スル所ニ長橋肥後守ノ隱居城ノ跡アリ、

河野士ノ千人塚

廣野小白井谷ニアリ昔津野氏ノ將前田道慶豫州ノ河野軍ヲ逆ヘ討ツテ大ニ之ヲ破ル、追テ橋原字大越ノサキ廣野小白井  
谷ニ至テ之ヲ屢ニス仍テ其屍ヲ埋メシ處ヲ河野士ノ千人塚トイフ、

前田道慶ノ墓

橋原本村ノ野中ニアリ道慶ハ中平駿河守ノ臣ニシテ豫州軍ト戰ヒテ屢々軍功ヲタテタル人ナリ、

餅搗山ノ城趾

橋原本村ト飯母トノ間ノ山上ニアリ何人據リシモノカ詳ナラズ、



檀願寺跡

併ツキ山ノ近傍ニアリシト雖モ不詳(坊主ケ淵モ全様ナリ)

上岡善之進ノ首塚

橋原川西地ニ在リ、初メ橋原ノ庄屋中平氏、北川ノ上岡吉右衛門ノ子、善之進ヲ養フテ子トナシ、之ニ庄屋ヲ讓レリ、然ルニ善之進在職中罪アリテ斬ニ所セラル蓋シ其罪タル村ノ公益ヲ圖ラントシテ犯セルモノナレバ或祠ヲ建テ、之ヲ祀リ其靈ヲ慰スル者アリトイフ

駿河屋敷

陰曆八月ニ善之進ト稱スルモノアリ大抵全人ノ首ヲ刑場ヨリ此處ニ取來リシ日ニ起ルト云フ(日ヲ逸ス)

唐箕ガ城跡

橋原本村ニアリ、中平駿河守ノ邸アリシガ子孫代々此處ニ居住セシモ數年前ヨリ玉川氏ノ邸宅ニナリ居レリ(玉川養蜂場此處ニアリ)

吉本元仙

橋原本村ノ愛宕山上ニ在リシト云フ、即現今愛宕神社ノ鎮坐セル邊ニ在リシナランモ今ハ少シモ面影ヲ存セズ。

勤王家贈位紀念碑

四方川ノ人ナリ五石ト號シ醫ヲ業トス、詩ヲヨクシ、又画ニ巧ミナリシガ數年前病死セリト云フ墓ハ四方川ニアリ、

中平氏ノ先塋

吉村寅太郎、掛橋和泉、前田繁馬、中平龍之助等ノ贈位紀念碑ニシテ橋原本村ノ入口ニ在リ

那須氏ノ先塋

橋原本村入口右方化粧阪ニ在リ

橋原太郎川ニ在リ、(假令縣道ノ上下下ニ在ルモノ之ナリ)縣道ノ上方ニ(東ヨリ順ニ)俊平、信吾ノ二人ノ招魂碑アリ各碑ノ高二尺余、幅約八寸角ニシテ台ハ立派ナルニ重臺ニシテ碑文ハ田中子爵ノ撰并ニ書ナリ、之ノ二碑ノ上ニ一棟ノ(而積約三坪)結構ナル雨庇ヲ設ケタリ

其西ニハ藤原重宗ヲ祀レル小祠アリ  
縣道ノ左側下方ニ祖先ノ墓碑建テ並ベリ

越知面ノ吉門家

越知面ノ三島神社神職吉門有政ノ先ハ元ト藤原姓ナリ、吉門有近衛門大夫ナルモノ伊豫國明神村ヨリ此ノ地ニ移リ來リテ三島神社ノ神職トナリシヨリ代々其職ヲ襲フテ有政ニ至ル有政ハ實ニ第十一代吉門三郎第三男タリ。

- 一、長谷ノ瀧 越知面ノ最東南ニ位セル長谷部落ノ東端ニアリ三箇ノ瀧ハ何レモ十數丈斗リ落テテ奇觀筆紙ニ盡シ難シ、然レドモ邊鄙ニシテ世人ニ多ク知ラザルハ遺憾ノ至リナリ
- 一、龍ヶ森 本村部東南位ニアリテ其形富士山ニ似タリ故ニ一名越知面富士トモイフ
- 一、燒ヶ瀧 後別當ニアリ斷崖絶壁ニカ、ル數丈ノ大瀧ニシテ實ニ比類稀ナル佳景ナリ、
- 一、大野原 越知面、四方川等ノ北方ニ在ル一大高原ニシテ數里ノ間草勢々トシテ限知ラレヌ、中ニモ或ハ川アリ湖アリ洞穴アリ、奇岩怪石アリ、加フルニ四方ノ眺望亦絶佳ナリ

中越三河守吉長ノ墓

越知面部越知面川ノ岸ニアリ大ナル石碑ヲ建テ之上ニ結構ナル屋根疵ヲナセリ 碑面ニハ鷲峯院殿前三州大守海岸道逸大禪定門 會儀 江月院殿黃山妙藥大姉トアリ

親忠ノ遺墨

本村ニ折節之ヲ藏スルモノアリ、津野定貫モ亦親忠ガ遺墨數枚ヲ藏セリ 蓋、定貫ハ今日津野氏ヲ唱フ者ノ内津野正系ニ尤モ近親ノモノナリト云フ。

大藏谷明神家

大藏谷ノ明神家ノ先祖明神清右衛門ハ永正年中ヨリ津野親忠公ヘ任ヘ祿二十石ヲ給フ馬巡リニシテ親忠滅亡ノ際高岡郡戸波村ニ於テ戰死ス、二代目明神彦右衛門ハ津野家斷絶ニ付キ天正元年ヨリ橋原ニ住シテ三島神社ノ神主トナル武家ノ格式ヲ維傳シ全社ニ於テ毎年正月二日の矢ノ例アリ弓太郎弓次郎ト稱スルモノアリ弓太郎ハ庄屋ナリ、弓次郎ハ彦右衛門ナリ 飯テ弓太郎弓次郎兩名ガ全社神前ニ於テ拾貳手弓ヲヒクナリ、之ノ家筋今モ猶大藏谷ニ在リテ弓次郎ヲ勤績セリ



當主ヲ重固ト云フ明神清右衛門ノ十二代ノ孫ナリ、  
明神彦右衛門ヲ椿原天徳山吉祥寺建立ノ際ソノ式地半分ヲ寄進シタルノ故ヲ以テ毎年正月二日ニ全寺ノ住職僕ヲ連レテ  
全人方ヘ禮ニ來ラレ、翌日ハ明神方ヨリ又家僕ヲ具シテ全寺ニ年禮ニ行ク例ナリ、

吉祥寺ニ於ケル明神家ノ席順

津野祭等ノ時吉祥寺ニテ着席スルニ住職ノ右一番神官、二中平(泉中平家)三那須以下竹村中平等古キ郷士ヲ先ニ立テ地  
下浪人迄着席ス

焼香順序

陰曆八月廿八日吉祥寺ニ於テ大日如來ノ施餓鬼及作祭ヲナスニ因リ大藏谷明神ガ一番ニ焼香、二番土居(ト云フハ泉ノ  
三番津野、夫レヨリ郷士中席順終ルヤ地下浪人、夫ヨリ名本ニ至ル  
全月二十九日ハ津野公ノ施餓鬼ヲ行フ、一番土居(中平氏)、二番明神、三番津野氏ナリ、

一同焼香終ルヤ當番ヨリ吸物酒肴ノ御膳ヲ仕出ス、  
御膳終ルヤ大日堂ヘ一同着席ス、之ヲ詰方ト云フ。一同着席後一體ヲナス、禮終ツテ大會佛執行アリ、庭拂ヒ、花鳥小躍  
ネリト順次諸例ヲナス、諸例終ルヤ一同禮ヲナシ各自ノ座式ヘ退去ス、

掛座式ノ順

吉祥寺入口左ノ一番明神、二番津野、三番土居(泉ノ中)座式、右ノ一番大藏谷部座敷、之ハネリ舞臺ト稱シ大藏谷一同ノ  
座式ニ用ユ、二番那須氏、三番吉祥寺、四番庄屋ノ座敷トナル大日堂ハ飯母、後別當、本村ノ見物所ナリ吉祥寺ノ玄關ハ  
太郎川、神在居、川西地ノ見物所ナリ  
餘興ニ地狂言アリ見物人ハ吉祥寺境内ニ於テハ見物中頭巾、ホウカムリヲ免サズ  
參考

世ニ津野氏多シ然レモ親忠公ノ直系ニ屬スルモノ一人モ之ナシ、又茲ニ土居ト稱スルハ元ト津野氏ト全祖ニシテ世々ソ  
ノ臣下タリシ家ナリ故ニ焼香等ハ最モ先ニスル例トナレリト云フ、  
大藏谷名本ハ明神重固ノ祖、世々之ヲ相勤メ重固モ十五代ヨリ父ニ代リテ同役ヲ相勤メタリ

天正以前ノ勸請ニ係ル神社

本村ハ稀有ノ大村ニシテ從ツテ神社佛閣モ亦多シ今四万川ニ於ケル天正以前ノ勸請ニカル(茨木利政氏ノ)神社關ヲ左ニ摘  
記シテ參考ニ供セントス、

高岡郡西津野村四万川字奈路鎮坐  
郷社

天神社

祭神 菅原道真公

合祭 大日靈貴尊、月讀命、

社格 明治五年 制定

勸請 年曆不詳

天文貳拾叁甲子歲社殿建立ノ棟札ニ御寶殿立初テ凡五百年云々又寶永七年ノ棟札ニ御寶殿立初テ凡六百八十年云々  
又延享四年十月時ノ神職長谷部越前太夫ヨリ集録方ヘ差出セル調書ニ

勸請初年ヨリ享保九年迄七百五十年ト申傳候夫ヨリ延享四年迄貳拾叁年合シテ七百貳拾八年ト申傳ヘ候云々  
古來ノ傳説ニ據ルニ菅原道真公ノ遺骸ヲ見シ云ハル公卿故アリテ隱遁ノ念ヲ起シ遠ク此四万川ノ里ニ來ラレシニ此ハ山  
深ク人家モ稀ナリケレバ之レ偏見ノ所ヨト思サレ歸京ノ念モナク幾星霜ヲ重ネラレシガ或時不圖病ニ罹ラレ種々療養ヲ盡  
サレシモ聊其効無ク益々危篤ト見エシニ卿ハ中岡右京ナルモノヲ枕邊ニ召サレ、予此度ノ大患快復ノ期ナキヲ知ルゾカシ  
就テハ予カ所持ノ鏡并ニ太刀長刀共汝ニ讓ル又予カ日頃尊信セル菅公ノ靈臺ハ壁路山ノ麓ニ祠ヲ建テ此里ノ守護神ト齋祀  
セハ、開里ノ氣隨疑無シト仰セラレ自ラ南無威徳天滿大自在天神ト書キ留メラレ右京ヘ渡サレ遂ニ逝去アリシカバ右京其  
遺言ノ通り壁路山麓川添ヘノ地ニ社殿ヲ建立シ靈臺ヲ奉シ齋祀セル由ノ傳説アリ此時ノ社地ハ寛文六丙午歲七月ノ洪水ニ  
流失シ同拾壹年霜月現今ノ社地ニ遷シタルヲ棟札ニ明記セリ  
因ニ記ス吉田光照卿ノ墓モ社地ノ側ニ在リシガ寛文六年ノ洪水ニ同シク流失セシ由申シ傳フ。

四万川諸神社寶物調 (明治四十年現在)

海津見神社



表

文化元年

寺社御仕置

高屋 九助  
野本 喜三進  
順之助

祭主

長谷部大隅守  
全 出雲守

奉遷宮 龍王大權現 標札

御那奉行中

大黒竹 八  
長尾 貞五郎  
白井太郎右衛門

子十月二日

表

津野山高作配役 那須幾之進  
四万川村庄屋 廣瀬 嘉右衛門

世話人 名本 中野川

九藏

同老

本願主 中越 圓藏 敬白

四万川 氏子 惣中

大工 分九 喜太夫 作之

裏

當社元中野川峯古池水上仁池ノ神止祀事安永五申年  
其後大變洪水古池荒ヒ川田地流失ス後仁蛇王權現止御名  
於申テ時は寛政六寅年四月寶殿建立志天長谷部  
大隅守代祭願主中野川村其後神具仁ヨリ文化元子年

裏

十月二日申義由壁路山之峰古城地江奉遷御神号  
龍王宮止祀其後本社再建文化六巳年十月廿八日  
正遷宮 四万川村惣領主祈所文政六癸未年  
長谷部兵部十一代孫 隱岐正義利 改之謹書

他ハ明治年代ノモノ之ヲ畧ス

一神鏡 一面

寸八寸

重二百二十目

無銘

寄附人不明

一神鏡 一面

寸壹尺

重四百六十目

無銘

寄附人 愛媛縣宇和島土居村 須上 忠三郎

同宿城下 横新町

藤井 利七

明治八年十月奉納

一、甲冑

一、甲冑

一 副 萌黄威

一 副 雜兵具足



- 一、あぶみ
- 一、鈴
- 一、劍
- 焼刃乱無銘 寄附人 戸田 彦稻
- 其他差シタルモノナシ之ヲ畧ス
- 攝 社
- 愛宕神社

吉門有理

有理ハ越知而吉門有政ノ實兄、征露ノ役名譽ノ戦死ヲ遂ゲシ勇士ナリ今其所屬小隊長大西又五郎ヨリ有理ノ妻玉與ニ宛テタル戦死ノ報ヲ左ニ掲ゲテ有理ノ軍功ヲ永遠ニ傳ヘントス、閱讀ル人其心シテ視テヨ、拜啓時下春陽の候御家族益御清穉之條慶賀候陳者小官は茲に滿腔の熱涙を流し忠烈勇士の士陸軍歩兵軍曹吉門有理君が名譽の戦死を御遺族諸君に報するの機に接す夫れ吉門君は昨年八月恰も餘熱尚ほ熾なる時に於て出征し而かも世に難攻不落と稱へて露軍の死守する旅順の要塞に向ひしなり君の到着當時は我攻圍軍は屢々苦戦慘勝たる裡に埋没せしこと夥とせず君小官の小隊に屬し分隊長として此大任に衝り身を鴻毛の輕きに措き能く部下を督勵して奮戦毎に兼に摸範を示せり旅順陥落後我隊の北進すべく同地出發以來は百數十里の雪中行軍間終始一日の如く致々軍務に勉勵す越へて二月廿三日太子河支流福成峪河城以北數度の野戦に於ては風雪に曝露し千辛万苦を排して其都度著しき功績を顯せり二月二十八日我隊は敵の本防禦線たる馬群丹附近に迫り當日攻撃を爲すべく中隊は其第一線を以て暗夜に乘し五百牛泉西北方最高地に突撃を實施するに當り君最先頭に立て奮進せしが敵は天險の要害を待み容易に退かず加ふるに優勢を以て我右側脊に追迫せし爲め我隊は末だ山頂半ばならずして其過半の兵員を損傷し繁登するに従ひ益々死屍累々の慘狀を呈せしも君神色自若として部下を叱咤鼓舞し爆烈藥を習し銃砲猛射の下に邁進奮闘敵陣に肉迫し彼れに多大の損害を與へ遂に擊退せり次で三月二日中隊は再び此地警戒に任ずる事と相成君亦之れに與かる嗚呼當日は之れ吉門君が神靈と化せんとするの秋なりし全日午後三時四十五分敵は優勢を以て逆襲に轉し來り猛烈なる銃砲火は全く茲に集注し又々瞬時にして血河屍山の悲況を現出するに至りたり然れども不撓不屈の吉門君は依然沈着の態度を失せず部下を指揮する平常に異ならず勇猛凜々應戰する一刹那

不幸敵彈は君の腹部及頭部の二ヶ處を貫通して又起つ能はざらしむるに至る直に部下をして除るに綳帶を施し后方に退けし事何せん何分腦部銃創の爲め百方の醫術其功なく遂に全日午後四時可惜此勇士をして天に逝かしむ其武功故群にして忠勇義烈の狀眞に大和武士の名に脊かざるものに有之候本職は大に其事の壯なりとし且つ之を悲むや一入の痛切を究め候へ共此頑強なる敵は遂に三月八日を以て撫順城方向に擊退するを得たるは吉門軍曹の功與て大に力ある事と信じ候將來戦局は前途益々遼遠なるに不幸にして此勇敢なる偉男子を失ひたるは我隊終生の恨事のみならず大日本帝國の爲め大に惜むべき事に御座候貴家に於ても亦御痛惜の御心情は申上ぐる迄もなく御座候へ共人誰か死なからん武夫屍を馬革に裹むは其本分なり嗚呼吉門君の如き實に武士の本領を全ふしたるものにて遺風余烈は長へに我帝國史の光華たるべく且つ天恩深く之れに酬ゆる處あり幾庶くは御遺族諸君以て其愁心を慰められんとを就ては如上の功績は已に其筋に進級並叙勳の手續を致置候又遺憾の如きは當日戦闘の地に於て最も可重なる埋葬相替み置候へば不日戦後の整頓を了へたる后火葬に附し遺骨後送の事に取斗ふべく本意に候へ共目下戦闘中にして其運びに至り難く不取敢遺髪のみ及御送付候間御受領被下度茲に謹んで吊詞を述べて併せて戦死の狀御報送勿々不一

明治三十八年三月廿二日

歩兵第四十四聯隊第二中隊第二小隊長  
陸軍歩兵少尉 大西 又五郎

吉門玉與殿

編者曰ク吉門有政ノ如キ勇士此他ニモ猶少ナカラズト雖モ都合ニヨリ遺憾ナガラ一々是ニ記セザルコト、セリ

五石詩數題

五石ノ詩甚グ多シ今、五石詩集中ヨリ數題ヲ左ニ示サン。

- 甲午養 生
- 人唯俯思百病生心神澄潔氣方清作詩時遊塵埃攪飲酒且忘世俗情春嘯花間閑笑語秋吟月下伴光明老來逸樂無過此自學元仙
- 誇獨醒
- 乙未養 生
- 古稀餘一又逢春萬里韶光意氣新世俗塵埃總廢採詩文明友稍相親吟風嘯月忘辛苦醉柳顛花養心神洗耳更無肥馬念自誇天下
- 獨醒人



春 寒

春 雪

春寒十日氣如衝枕上詩成呵筆慵通夜不眠天欲曙已聞鳥雀喚庭松

四隣人定臥堂中孤枕只傳遠寺鐘片夢覺來無術維推窓夜雪滿庭松

清 兵 蜂 起  
二千五百五十五年昇平仰樂明治天瑞續五風且十雨世榮千秋又萬年縱振西清野蠻意何關東洋日本權任彼方今時正到一朝舉

又

天期已到動才牙軍議戰評暫不休定識英雄得時起一條妖氣落清州

偶 成

改歲池塘草未生連日雪飛少人行東風二月聞鶯語此是春來第一聲

笠 佛 路 上

十里羊腸任杖屨與深半醉醒間獨欣此裏多新句●問柳尋花行自刪

訪 山 中 定 家

吟筇重到故人家先喜呱呱兒輩加新婦煮茶善饗我婉容愉色勝於花

日 清 戰 爭

治亂盛衰天所成已看妖氣落韓濔韓依閔子破民政清賴袁生叛定盟雷火發邊碎艇船日章飄處降蠻兵東軍渡水未重歲占領二州

又

神兵始起最勇軍四百余州只一征可見東洋男子志容易占領幾多城

別 後 寄 天 然 上 人

雲樹久矣廿年別關山遠隔音信絕憶昔曾遊屢添交詩陣文鋒爭優劣我軍雄敵君兵強君詩何比我才拙別後東西幾星霜勝與弗及

淚交血君住阪西兜森前我居水東蓬邊風吹向西語雜寄片飛回東書不傳追憶當時耽如夢空將願魯老寒村滿胸離恨無由認日以

淚眼望西天

即 吟

醉陶運日掩窓簾轉覺無聊這裡添孤悶誰排眼易就麥花畦上雨纖々

送 金 澤 玄 長 歸 大 洲

春好清明前後天花香柳色兩嬋娟分手臨期留不止他時敢待片魚篇

寄 柳 原 天 然 師

多歲住他鄉商雲樹長御風誰得術縮地奈無方雲外鴻常背枕頭夢債不寄詩煩刪斧舊交莫相忘

春 日 郊 行

無聞無見不詩景綠意紅情雜鳥聲探勝優遊未思返滿眸春色近清明

又

平郊原野翠濼々散策雅分西歎東脚倦龍鐘岩頭酌花香化酒在杯中

慶 德 山 宴 會

滿堂淨氣空無塵庭上花開飽若烟今日勝遊誰盡醉佳殺醉酒話新陳

謹具詩臣元仙清貞誠惶誠恐頓首稽首再拜

奉 祝 征 清 軍 捷 勝 利

已有西兵窺我土駭々膽慙難干戈東軍揚戟不振築只有清人詩失過會破天津之條約猶且募兵漫嚼牙旭旗始揚東山蓋東軍涉水

豐鳩匯大地關崩飛土砂巨港艦碎騰浪波神兵一路如破竹幾多長城以燒巢清將夢驚悔不返李鴻遠來強求和嗚呼快哉凱陣日天

地轟響萬歲歌

初 秋

光陰得々往誰留人事匆匆如水流未見郊天風色改回頭曆日已初秋

秋 日 散 步

吟遊探勝未知休萬里清光山更幽停杖岩頭何所見葉聲片語夕陽秋

次 韻 細 川 鷗 波 詩

地天得節度清風萬里秋光展錦紅林下歸樵看有感求詩人在夕陽中

酒 間 賦 美 人



携帶佳人嬌木邊蛾眉紅粉勝花娟今回微汝豈其樂一刻千金乃此宴

五月旬即事  
山村農務忙如織打麥插秧的々焉中有幽人獨相反問敲詩句醉還眠

斷梅  
宿雨晴來天朗清水光山色掛如迎吟遊有約算更待忽聽柴門劇啄聲

哭孫文太郎  
夢驚心悸如漣漣怪底豈圖此見屍身入蠶盆吞熱鏡即今不若一時悲

全  
陟岵瞻望無詮待急還採我返黃泉仰哭于天俯慟地潸然誰庶淚漣々

全代升賦  
多年守寡勝辛酸有懷豚兒負笈誰忽聽計音腸欲裂可沈江海入奔湍

奉賀 征清勝利  
對等條約定天津日清戰爭起閑遠東軍憤起如猛火西兵敗走似遊豚已破城倉分取米又背巨港奮捕船清兵遂巡拋戈去神兵勇進

勢益曠今回征伐管清韓普驚於四夷八蠻嗚呼快哉落城日旭旗翻々翻地天君不見當年蒙姑窺我土神風起兮覆數艦雄名千古猶

未朽勇猛應知日本魂笑彼戎狄誰支得一戰一爭作微塵神兵功成等凱陣武運無量幾萬年

除夕  
身體稍健八九翁又逢除夕意猶誰幸求數口醫飢米醇酒三杯不憶窮

丁酉元旦  
幽樓甘得蘇山南常伴蘇樵開俗談任彼光陰疾似矢今朝七十又加三

東窓試筆  
山脚水廻望眼寬巖巖遠澗只漫々百千遊樂猶如此胸裡風流見筆端

客舍聞子規  
幽窓夢破夜三更枕上思詩々未成堪聽雲間新社宇聲聲呼起故園情

七夕  
七夕

初秋  
銀河朗霽祭天孫少婦爭衣滿小園豈吾今日兼乘異要微阮咸掛武禪

酷暑炎々已數旬祝融只似苦於人回頭曆日秋方到未覺郊天風色新

中秋無月  
會期三五夜中關雨霽水輪望不願把酒誰醒詩亦拙巽勝何崇苦人間

送孫誠太郎之東京  
明治三十年舊九月十五日也

喜汝憤心願孝誠凌雲志氣向東京皇州親賴他山石精技要磨胸裡瓊

戊戌題自画山水  
樹木參差立岸汀隱仙相對話幽亭山脚水繞家尙遠二三帆影返遙青

觀瀑  
秋風滿地望闌干任杖優游步自安遙見北方山削處千尋飛瀑下雲端

嗜画  
自稱鳴河一画仙窓前採筆養高年身在山村幽僻裏心游渺々水雲邊

又  
揮毫常伴古人賢嗜酒又如吸百川餘齡七十且加四心在幾洋奇絕邊

病起  
久矣病疴親枕席鴻聲一語等閑選一朝得治離家望且駭風光滿地天

途孫確太郎之大坂  
喜汝擔簦登坂志憤心溢膈意競々他山石以可爲砥磨琢莫愆三折肱

寒夜獨酌  
寒氣連旬壓戶窓門巷久絕韻流竟臨臥宵々例呼酒一外傾尽醉魔降

己亥元旦  
斗柄指東曙色新世間夢覺對芳辰三元即起風色改正地天一般春

寄大平詞君



附 録

一、西津野村現在吏員

村 長	山 本 旬 施	助 役	中 越 重 廣
助 役	森 山 宗 晴	書 記	明 神 清 助

一、贈位奉告紀念標 は西津野村橋原(化粧坂の邊)にあり高さ一丈巾二尺厚さ四寸位の木標にして表面には明治三十一年七月四日特旨を以て正五位を贈られたる那須俊平、中平龍之助、前田繁馬並に全時に従五位を贈られたる掛橋和泉の四士の位階姓名を列記せり(七十二頁に吉村寅太郎とあるは誤りなり)

此の四士は明治廿四年四月八日特旨を以て正四位を贈られたる吉村寅太郎、全年十二月從四位を贈られたる那須俊平、全年七月四日正五位を贈られたる上岡膽治の三士と共に前に本縣大島町招魂社及東京靖國神社に合祀せられたるものなり。

一、刑部少輔津野元實の墳墓は高岡郡戸波村にあり(田村耕馬君通信の内)

一、西津野村方言中には「きとあるは方言に非ずして正しき名詞なり言海に「雁山行纏」雁穿の略、雁に絡ふ衣。脚絆。雁衣」とあり



附 錄

一、西津野村現在吏員

村 長	山 本 旬 施	助 役	中 越 重 麿
助 役	森 山 宗 晴	書 記	明 神 清 助

一、贈位奉告紀念標 は西津野村櫛原(化粧坂の邊)にあり高さ一丈巾一尺厚さ四寸位の木標にして表面には明治三十一年七月四日特旨を以て正五位を贈られたる那須俊平、中平龍之助、前田繁馬並に全時に從五位を贈られたる掛橋和泉の四士の位階姓名を列記せり(七十二頁に吉村寅太郎とあるは誤りなり)

此の四士は明治廿四年四月八日特旨を以て正四位を贈られたる吉村寅太郎、全年十二月從四位を贈られたる那須信吾、全卅一年七月四日正五位を贈られたる上岡膽治の三士と共に前に本縣大島岬招魂社及東京靖國神社に合祀せられたるものなり。

一、刑部少輔津野元實の墳墓は高岡郡戸波村にあり(田村耕馬君通信の内)

一、西津野村方言中にはいさどあるは方言に非ずして正しき名詞なり言海に「脛巾行纏(脛穿の略、脛に絡ふ衣。脚絆の脛衣)とあり





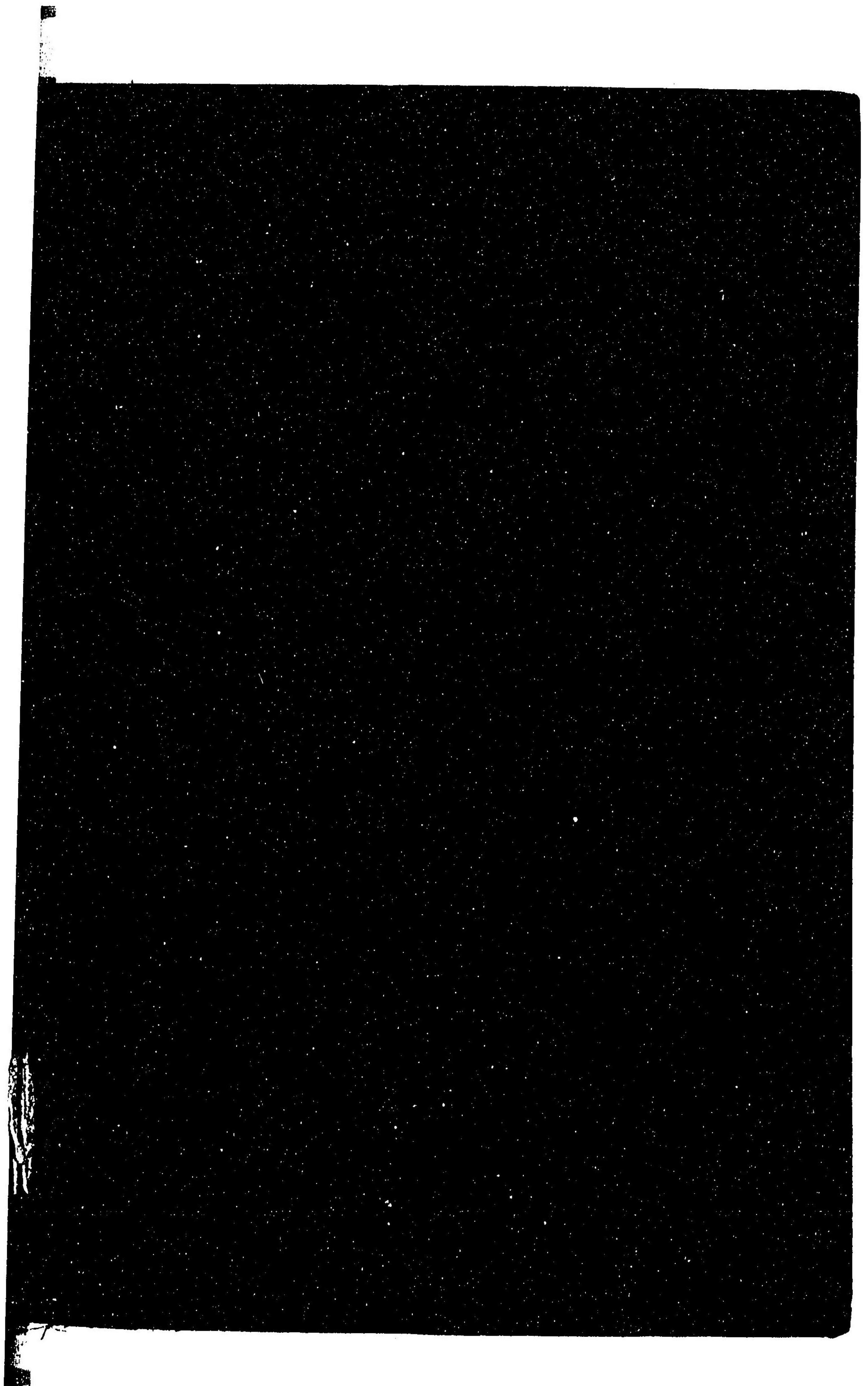


22  
496



22  
496







026096-000-0

22-496

津野山遺聞録

宮地 美彦 / 編

M42

ADC-3753





